

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第195集

石岸遺跡

2015

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第195集

いし ぎし
石 岸 遺 跡

2015

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

序

新城市の須長地区は、かの有名な長篠・設楽原の戦いの決戦地で、付近には復元された馬防柵などがあり、多くの歴史ファンの方々が訪れています。

このように戦国時代のイメージが強い地区で、奈良時代の大型倉庫群がみつかったことは、大きな驚きとともに、ここが古代から重要な地域であったことを示す証左であろうと思います。

この重要な調査成果が収められた本報告書が、この地域の歴史研究に寄与することを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成に際し、多大なご協力を賜りました原因者をはじめとする多くの方々に感謝いたします。

平成 27 年 3 月

公益財團法人 愛知県教育・スポーツ振興財團

理事長 伊藤克博

例 言

1. 本書は、愛知県新城市八束地に所在する石岸遺跡（いしがしいせき：県遺跡番号 760285）の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は、北緯34度55分33秒、東経137度32分4秒（世界測地系）である。
2. 調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線建設にともなう事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査対象面積は800 m²である。
3. 発掘調査は、平成20年4月から平成20年9月にかけて実施し、整理および報告書作成作業は平成25年4月から平成26年3月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は、朝日航洋（株）の支援を受けて、宮腰健司（現・統括専門員）、樋上 昇（調査研究専門員）、岡久雅浩（調査研究主事—現・愛知県立岡崎北高等学校教諭）が担当しておこなった。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、新城市教育委員会、中日本高速道路（株）をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆は、小林克也・佐々木由香・バンダリ スタルシャン（以上、（株）パレオ・ラボ）、井上 巍（（株）第四紀 地質研究所）、蔭山誠一・川添和暁・鬼頭 剛・樋上 昇（以上、愛知県埋蔵文化財センター）が分担し、編集は樋上がおこなった。執筆分担については、目次に執筆者名を記した。
7. 整理作業は、樋上 昇が担当した。作業にあたっては次の方々、諸機関の助力を得た。
瀧 智美・時田典子、（整理補助員）、金子知久（写真工房 遊）、アルケーリサーチ（株）、（株）イビソク、国際文化財（株）、（株）ラング
8. 本書に示す座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。ただし、表記は旧測地系（日本測地系）とした。
9. 本書に示す土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』による。
10. 遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理をおこなった。
11. 本書中の各遺構番号については、以下のアルファベットによる分類記号を調査時のまま使用した。
SB：掘立柱建物、SD：溝、SK：土坑、SI：竪穴建物、NR：自然流路、SX：その他の遺構
12. 写真および図面などの調査にかかる記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
(公財) 愛知県教育・スポーツ振興財團 愛知県埋蔵文化財センター
〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4161)
13. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
愛知県埋蔵文化財調査センター
〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)
14. 本書を作成するにあたり、次の方々、諸機関から多くのご指導とご助言を得た。記して感謝したい。
安 昭炫・伊藤 茂・伊藤正人・岩山欣司・大塚達朗・長田友也・小林克也・小林紘一・佐藤正教、
城ヶ谷和広・賤 元洋・平井義敏・廣田正史・増子康眞・松本泰典・山形秀樹・Zaur Lomatatidze・Ineza Jorjoliani（敬称略、50音順）

目次

第1章 調査の概要	(樋上 昇)
1. 調査に至る経緯と調査の経過	1
2. 歴史的環境	2
第2章 遺構	(樋上 昇)
1. 概要と基本層序	4
2. A区	5
3. B区	26
第3章 遺物	
1. 土器・土製品	57
(1) 1期の土器・土製品 (川添和曉)	57
(2) 3期の土器・土製品 (樋上)	61
2. 石器・石製品 (川添)	63
3. 木製品 (樋上)	65
4. 金属製品 (藤山誠一)	66
第4章 自然科学分析	
1. 新城市中央部、石岸遺跡の地下層序と堆積年代 (鬼頭 剛)	116
2. 石岸遺跡出土木材の樹種同定 (小林克也)	122
3. 石岸遺跡出土の大型植物遺体 (佐々木由香・バンダリ・スダルシャン)	129
4. 石岸遺跡の黒曜石原産地同定 (井上 嶽)	133
第5章 総括 (樋上)	137
遺構写真図版	
遺物写真図版	
抄録	

挿図 目次

図 1-1 新城市位置図	1
図 1-2 周辺道路分布図 (1:25,000)	3
図 2-1 調査区位置図 (1:5,000)	4
図 2-2 A 区第 2 面道構平面図 (1:200)	6
図 2-3 A 区第 1 面道構平面図 (1:200)	7
図 2-4 A 区西壁土層断面図 (1:50)	8
図 2-5 A 区南壁土層断面図 (1:50)	9
図 2-6 A 区土削記述	10
図 2-7 A 区 003・191SD 道構平面図 (1:50)	11
図 2-8 A 区 003・191SD 土層断面図 (1:50)	12
図 2-9 A 区 031・033・034・035・036・037・042・ 144SI 道構平面図 (1:50)	13
図 2-10 A 区 033・035・036・037・042・144SI 土層断面図 (1:50)	14
図 2-11 A 区 034・035・036・042SI 土層断面図 (1:50)	15
図 2-12 A 区 032SI 道構平面図 (1:50)	16
図 2-13 A 区 032SI 土層断面図 (1:50)	17
図 2-14 A 区 038・095SI・093・101・110SD 道構平面図 (1:50)	18
図 2-15 A 区 038・095SI 土層断面図 (1:50)	19
図 2-16 A 区 093・101・110SD 土層断面図 (1:50)	20
図 2-17 A 区 101SD・046NR 遺物出土状態図 (1:50)	21
図 2-18 A 区 001SD-A 道構平面図 土層断面図 (1:50)	22
図 2-19 A 区 004SD ほか道構平面図 土層断面図 (1:50)	23
図 2-20 A 区 100SD 道構平面図 (1:50)	24
図 2-21 A 区 100SD 桂穴土層断面図 (1:50)	25
図 2-22 B 区第 3 面道構平面図 (1:200)	26
図 2-23 B 区第 2 面道構平面図 (1:200)	27
図 2-24 B 区第 1 面道構平面図 (1:200)	28
図 2-25 B 区西壁土層断面図 (1:50)	29
図 2-26 B 区西壁土層断面図 (2) (1:50)	30
図 2-27 B 区南壁土層断面図 (1) (1:50)	31
図 2-28 B 区南壁土層断面図 (2) (1:50)	32
図 2-29 B 区 600・671・672SI 道構平面図 (1:50)	33
図 2-30 B 区 671・672SI 土層断面図 (1:50)	34
図 2-31 B 区 670・675・676SI 道構平面図 (1:50)	35
図 2-32 B 区 670・675・676SI 土層断面図 (1:50)	36
図 2-33 B 区 673・678SI ほか道構平面図 (1:50)	37
図 2-34 B 区 673・678SI ほか土層断面図 (1:50)	38
図 2-35 B 区 674SI ほか道構平面図 土層断面図 (1:50)	39
図 2-36 B 区 670SK 遺物出土状態図 (1:50)	40
図 2-37 B 区 502・511・512・513・514SI 遺構平面図 (1:50)	41
図 2-38 B 区 502・511・512・513・514SI 上層断面図 (1) (1:50)	42
図 2-39 B 区 511・512・513・514SI 土層断面図 (2) (1:50)	43
図 2-40 B 区 503・507SI 道構平面図 土層断面図 (1:50)	44
図 2-41 B 区 504・505SI 道構平面図 (1:50)	45
図 2-42 B 区 504・505SI 土層断面図 (1:50)	46
図 2-43 B 区 650SB 道構平面図・柱穴 433SK 遺物出土状態図 (1:50)	47
図 2-44 B 区 650SB 柱穴土層断面図 (1:50)	48
図 2-45 B 区 1013SB 道構平面図 柱穴土層断面図 (1:50)	49
図 2-46 B 区 1014SB 道構平面図 柱穴土層断面図 (1:50)	50
図 2-47 B 区 1015SB 道構平面図 (1:50)	51
図 2-48 B 区 651・1016SB 道構平面図 (1:50)	52
図 2-49 B 区 651・1016SB 柱穴土層断面図 (1:50)	53
図 2-50 B 区 1017SB・1018SA 道構平面図 (1:50)	54
図 2-51 B 区 1017SB・1018SA 柱穴土層断面図 (1:50)	55
図 2-52 B 区 500SD 道構平面図 (1:50)	56
図 3-1 安山岩片 法量散布図	66
図 3-2 金属製品実測図 (1:2)	66
図 3-3 1 期遺物出土分布図 (1) (1:400)	67
図 3-4 1 期遺物出土分布図 (2) (1:400)	68
図 3-5 1 期遺物出土分布図 (3) (1:400)	69
図 3-6 1 期遺物出土分布図 (4) (1:400)	70
図 3-7 1 期遺物出土分布図 (5) (1:400)	71
図 3-8 1 期出土土器・土製品実測図 (1) (1:3)	72
図 3-9 1 期出土土器・土製品実測図 (2) (1:3)	73
図 3-10 1 期出土土器・土製品実測図 (3) (1:3)	74
図 3-11 1 期出土土器・土製品実測図 (4) (1:3)	75
図 3-12 1 期出土土器・土製品実測図 (5) (1:3)	76
図 3-13 1 期出土土器・土製品実測図 (6) (1:3)	77
図 3-14 1 期出土土器・土製品実測図 (7) (1:3)	78
図 3-15 1 期出土土器・土製品実測図 (8) (1:3)	79
図 3-16 1 期出土土器・土製品実測図 (9) (1:3)	80
図 3-17 1 期出土土器・土製品実測図 (10) (1:3)	81
図 3-18 1 期出土土器・土製品実測図 (11) (1:3)	82
図 3-19 1 期出土土器・土製品実測図 (12) (1:3)	83
図 3-20 1 期出土土器・土製品実測図 (13) (1:3)	84

図3-21	1期出土土器・土製品実測図-14 (1:3)	85
図3-22	1期出土土器・土製品実測図-15 (1:3)	86
図3-23	1期出土土器・土製品実測図-16 (1:3)	87
図3-24	1期出土土器・土製品実測図-17 (1:3)	88
図3-25	1期出土土器・土製品実測図-18 (1:2/1:3)	89
図3-26	3期出土土器・土製品実測図-1 (1:4)	90
図3-27	3期出土土器・土製品実測図-2 (1:4)	91
図3-28	3期出土土器・土製品実測図-3 (1:4)	92
図3-29	3期出土土器・土製品実測図-4 (1:4)	93
図3-30	3期出土土器・土製品実測図-5 (1:4)	94
図3-31	3期出土土器・土製品実測図-6 (1:4)	95
図3-32	3期出土土器・土製品実測図-7 (1:4)	96
図3-33	3期出土土器・土製品実測図-8 (1:4)	97
図3-34	1期出土石器・石製品実測図-1 (1:2)	98
図3-35	1期出土石器・石製品実測図-2 (1:2/1:3)	99
図3-36	1期出土石器・石製品実測図-3 (1:3)	100
図3-37	1期出土石器・石製品実測図-4 (1:3/1:4)	101
図3-38	1期出土石器・石製品実測図-5 (1:2/1:3)	102
図3-39	1期出土石器・石製品実測図-6 (1:3)	103
図3-40	1期出土石器・石製品実測図-7 (1:2)	104
図3-41	1期出土石器・石製品実測図-8 (1:2/1:3/1:4)	105
図3-42	1期出土石器・石製品実測図-9 (1:3)	106
図3-43	1期出土石器・石製品実測図-10 (1:3)	107
図3-44	1期出土石器・石製品実測図-11 (1:3)	108
図3-45	1期出土石器・石製品実測図-12 (1:3)	109
図3-46	1期出土石器・石製品実測図-13 (1:2/1:3)	110
図3-47	1期出土石器・石製品実測図-14 (1:3/1:4)	111
図3-48	1期出土石器・石製品実測図-15 (1:4)	112
図3-49	003SD 出土木製品実測図-1 (1:4)	113
図3-50	003SD 出土木製品実測図-2 (1:8)	114
図3-51	その他の出土木製品実測図 (1:4)	115
図4-1	石岸道路における深掘地点	117
図4-2	石岸道路 A 区 (地点 1) における 深掘削断面	117
図4-3	石岸道路 A 区 (地点 2) における 深掘削断面	118
図4-4	石岸道路 B 区 (地点 3) における 深掘削断面	119
図4-5	石岸道路出土木材の光学顕微鏡写真-1	126
図4-6	石岸道路出土木材の光学顕微鏡写真-2	127
図4-7	石岸道路出土木材の光学顕微鏡写真-3	128
図4-8	石岸道路から出土した大型植物遺体	132
図4-9	石岸道路 Rb - Sr 図	136
図5-1	石岸道路 3 期の遺構変遷 (1:500)	138
図5-2	石岸道路 3-3 期と周辺の地形 (1:2,500)	139

表 目次

表2-1	遺構面と所属時期の対応表	5
表2-2	3期の遺構変遷表	5
表4-1	石岸道路 A 区 (地点 1) における 放射性炭素年代測定結果	120
表4-2	石岸道路 A 区 (地点 2) における 放射性炭素年代測定結果	120
表4-3	石岸道路 B 区 (地点 3) における 放射性炭素年代測定結果	120
表4-4	石岸道路出土木材の樹種同定結果	122
表4-5	石岸道路から出土した大型植物遺体	129
表4-6	石岸道路から出土した 計測可能なモモ・スマモ一覧	131
表4-7	化学分析表	136
表4-8	原産地対比表	136
表5-1	3期の遺構変遷表	137

写真図版

遺構写真図版 1	A 区 3面	遺物写真図版 1	1期 土器
遺構写真図版 2	A 区 3面	遺物写真図版 2	1期 土器
遺構写真図版 3	A 区 3面	遺物写真図版 3	1期 土器
遺構写真図版 4	A 区 1・2面	遺物写真図版 4	1期 土器・土製品
遺構写真図版 5	A 区 2面	遺物写真図版 5	3期 土器・土製品
遺構写真図版 6	A 区 2面	遺物写真図版 6	3期 土器
遺構写真図版 7	A 区 1面	遺物写真図版 7	3期 土器
遺構写真図版 8	B 区 3面	遺物写真図版 8	3期 土器
遺構写真図版 9	B 区 3面	遺物写真図版 9	3期 土器・土製品
遺構写真図版 10	B 区 1・2面	遺物写真図版 10	3期 土器・土製品/1期 石器
遺構写真図版 11	B 区 2面	遺物写真図版 11	1期 石器・石製品
遺構写真図版 12	B 区 1面	遺物写真図版 12	1期 石器・石製品
遺構写真図版 13	B 区 1面	遺物写真図版 13	3期 木製品
遺構写真図版 14	B 区 1面	遺物写真図版 14	3期 木製品・金属製品
遺構写真図版 15	B 区 1面		

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経緯と調査の経過

石岸遺跡は愛知県新城市須長字石岸に所在している。地形的には豊川およびその支流によって形成された狭い平野と、その北に聳える雁峰山（標高628.3m）の境に位置し、雁峰山から派生する尾根を削り出した標高約80mの平坦面に位置している。西には長篠・設楽原の戦いで織田・徳川連合軍と武田軍の決戦場となった速吾川が北から南に流れ、豊川に注いでいる。

本遺跡は第二東海自動車道横浜名古屋線（新東名高速道路）建設の事前調査で、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。橋脚部分のみの調査であるため、東からA・Bの2調査区、合計800m²の調査面積である。

本調査に先立つ試掘調査では特に重要な遺構・遺物を確認しておらず、遺構面も1面のみの設

定であったため、当初は平成20年5月下旬から7月までの約2ヶ月の調査期間を予定していた。しかしながら、実際には最初に着手したA区において2面、次の調査区であるB区では3面もの遺構面と、1000を超える遺構数が確認されたこと。また、B区が本調査開始時点においてまだ耕作されており、作物の収穫時期である7月中旬まで調査に入れなかったことなどの事由により、結果的に石岸遺跡の調査完了は9月20日と2ヶ月近くずれ込むことになった。

調査担当者は宮腰健司・樋上昇・岡久雅浩の3名である。

入札による支援業者は朝日航洋株式会社で、調査体制は以下の通りである。

現場代理人	浅田良治
調査補助員	城前喜英
測量技師	尾崎祐司
測量補助員	安藤貢一

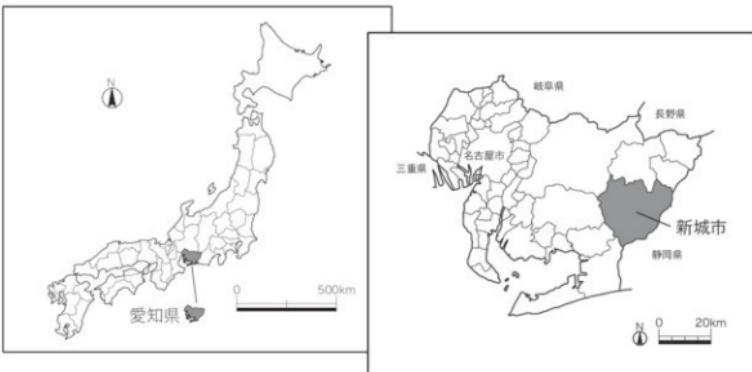


図1-1 新城市位置図（須長10号墳報告書より転載）

前述の理由によってB区の調査着手が著しく遅れたことにより、厚さ1m以上におよぶ古代の遺物を大量に含む整地層(調査時は包含層と認識)を人力ではなく、重機で掘削せざるを得なかつた。そのために、本来なら包含層上面で確認し得たはずの掘立柱建物柱穴の多くの破壊してしまったことは、調査担当者として慚愧に堪えない。

調査は、A区が5月12日にフェンス張りと基準杭の設置。5月20日より表土はぎを開始し、5月30日から上面遺構の検出と掘削。6月25日に全景撮影。下面遺構の検出と掘削は6月27日から開始し、7月11日に全景撮影をおこなつた。

B区は7月17日より表土はぎ開始。7月28日より第1・2面の遺構検出と掘削。8月22日に全景撮影。8月26日より第3面の遺構検出と掘削。9月12日に全景撮影。

調査終了直前の平成20年9月13日には地元説明会を開催し、70名の参加者を得た。

埋め戻しは9月16日からで、9月20日に完了してフェンス・資材の撤去をおこなつた。

遺物整理業務は樋上を担当者として、平成25年度の1カ年で、コンテナ23箱の出土遺物は愛知県埋蔵文化財センターにおいて瀧智美・時田典子(整理補助員)が選別・接合・復元作業をおこなつた。また、土器の実測・デジタルトレースは株式会社イビソクに、木製品の実測・デジタルトレースは株式会社シン技術コンサル、石器の実測・デジタルトレースは株式会社ラング、金属器のデジタルトレースは国際文化財株式会社に委託した。

遺物の写真撮影は写真工房遊の金子知久氏に依頼し、遺構図の編集作業および遺構・遺物写真的レイアウトは有限会社アルケリサーチに委託した。

2. 歴史的環境

石岸遺跡は連吾川によって形成された南北に細長い谷筋の東にある残丘状の低い尾根筋の東側緩斜面に位置している。

連吾川は前述のように天正3(1575)年5月

21日に織田・徳川連合軍と武田軍による長篠・設楽原の戦いの最終決戦地で、両軍が対峙したことでの名を知られており、本遺跡の約600m南には織田・徳川連合軍が築いたとされる馬防柵が復元されている。

本遺跡の東約250mの丘陵部上には須長9号墳と同10号墳が築かれている。このうち9号墳の所在が現状では不明だが、10号墳に関しては平成21年度に愛知県埋蔵文化財センターによって発掘調査がおこなわれ、尾根の先端に堀削をもって築かれた径約14mの円墳で、横穴式石室の主体部を有することが確認されている。出土遺物から7世紀後半頃の築造であることが判明しており、後述するように本遺跡ときわめて密接な関わりをもつと考えられる(愛知県埋蔵文化財センター2014)。

また、本遺跡の西約250mの加原遺跡では平安時代の竪穴建物群が、西約600mには古墳時代前期の大集落である石座神社遺跡が存在している。石座神社遺跡の東側斜面には溝で区画された奈良時代の掘立柱建物と竪穴建物からなる遺構群が存在し、両遺跡ともこの石岸遺跡とはなんらかの有機的な関連性を有する可能性がある。

石座神社遺跡では縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物群も確認されており、この点においても本遺跡との関わりを考えておく必要性がある。また、本遺跡の約750m東にあるモリ下遺跡では縄文時代早期前半と後・晩期の遺構・遺物を調査している。このほか本遺跡の約2km南にある萩平遺跡では旧石器～縄文時代早期の遺構・遺物、夜燈遺跡で縄文時代早期の遺構・遺物、上ノ風呂遺跡で縄文時代後期の遺物、大ノ木遺跡でも縄文時代後・晩期の遺構・遺物が確認されている。

南貝津遺跡、吉竹遺跡、石座神社遺跡、モリ下遺跡などから弥生時代中期の土器が出土している。

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 2012『柿下遺跡』

2014『須長10号墳』

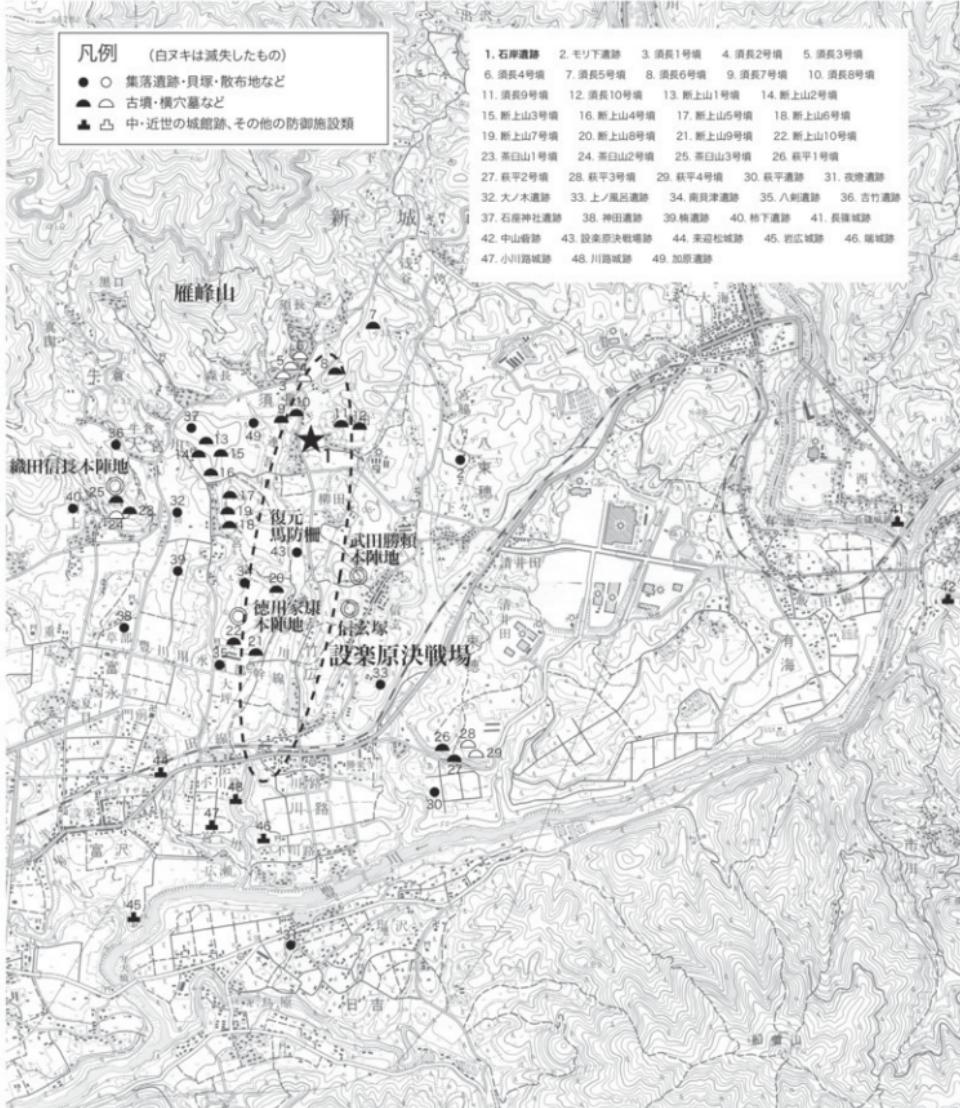


図 1-2 周辺遺跡分布図 (国土地理院 1:25,000 「三河富岡」「三河大野」 須長 10 号墳報告書第 3 図を改変)

第2章 遺構

1. 概要と基本層序

地形的にはB区が高く、第1面の検出面で標高約82m、A区は約81.5mである。ただし後述するように、B区は古代の遺物を大量に含む整地層を二次堆積によって後世に形成された遺物包含層と認証して1~1.5mも重機で除去したうえでの検出面であることから、本来の遺構面はB区北西隅で標高約83.5m、同じくB区南東隅で約82mと、同一調査区内で1.5mもの比高差がある。

これは7世紀後半から11世紀代にかけての度重なる整地によるもので、整地層は最も分厚い箇所で1m近い厚さとなっている。このB区の整地層は、調査区西側の南北に伸びる残丘を削り取ったものと考えられる(図2-1)。

一方、A区は現代の水田耕作土を除去した面が

遺構検出面である。

A区では2面、B区では3面におよぶ遺構面を確認した。それぞれの所属時期は表2-1のとおりだが、A区に関しては7世紀後半から11世紀までの遺構がほぼ連続的に形成されている。

それに対してB区は第1面がA区の1・2面に対応し(3期)、第2面が弥生時代中期頃(2期)、第3面が墾文時代中期～後期(1期)の遺構面となる。

本遺跡の東に位置する丘陵上には7世紀後半に築造された直径約14mの円墳である須長10号墳が所在する(愛知県埋蔵文化財センター2014)。地理的にも近く、時期的にも本遺跡の存続期間と重なることから、きわめて密接な関わりがあったと考えられる。



図2-1 調査区位置図(新城市都市計画図を1:5,000に改変)

表2-1 遺構面と所属時期の対応表

	1期（縄文中期～後期）	2期（弥生中期後葉？）	3期（7世紀後半～11世紀）
A区			1・2面
B区	3面	2面	1面

表2-2 3期の遺構変遷表

	3-1期 (H-50~I-17)	3-2期 (O-17~C-2)	3-3期 (O-29~O-10)	3-4期 (K-14~H-72)
A区	河岸 046NR (046SD) 溝 190SD 091SD 竪穴建物 0379・144S・042S (0325S)	003SD 101SD 110SD (001SD-B) 093SD 035SI 095SI (0389S)	033SI 034S 031SI (0389S)	004SD 002SD (001SD-A) 100SB
	掘立柱建物 145・150・161・163・164SK 058SK	500SD		
	掘立柱建物 (0145B) (0155B)	(0165B)	(0175B) 650SB 1013SB (0185A)	(0651B)
	廻廊			

浜長10号墳

※ 太枠チックは時期の明確な遺物が出土している遺構。かっこ付は所属時期の決め手に欠ける遺構

2. A区

A区では掘立柱建物1棟、竪穴建物11棟、溝9条、自然流路1条、土坑多数を検出した。

全ての遺構についてはCD-ROMの遺構一覧表に記載してあるため、ここでは主要遺構に絞って、表2-2に従って時期ごとに概略を述べる。

3-1期 調査区の東側には自然流路046NRが北から南へと流れ。この自然流路と微高地の境には南北溝086SDと190SDが掘削される。

その後、微高地上には竪穴建物037・144・042・036SIと、ほぼ同一地点に重複しながら連続して築造される。また032SIも遺構の重複完形から当該期とみられ、建物の軸線からみて037・144・042SIのいずれかと同時期である可能性が高い。091SDはこの032SIに切られることから、3-1期に属する。

当該期の竪穴建物で全体の規模がわかるのは032SIのみである。この竪穴建物には南側に焼土の詰まった土坑039SLがあり、カマドの可能性がある。平面形は東側がやや幅広になる台形を呈する。同様に平面台形の竪穴建物として、037・

042SIがある。

この時期の竪穴建物として最も規模が大きいのは036SIで、一辺が約8mを測る。ここからは東山50号窯式期新段階～岩崎17号窯式期併行の須恵器Hが出土している。

046NRの調査区北東隅からは、古代の木製品としては珍しい素木弓が、火薙白や矢板などとともに出土している。共伴する須恵器はおおむね東山50号窯式期併行。

3-2期 046NRの西岸の溝は086・190SDから003SDに替わり、003SDから枝分かれする溝101・110(001SD-B)SDが掘削される。さらに101・110SDの埋没後は093SD・095SIが築かれる。

調査区南側では、035SIが当該期の竪穴建物とみられる。この035SIの廃絶後、間層の堆積を経て033SIが築造される。

035・033SIは一辺が6m強の標準的な規模の竪穴建物。095SIからは8世紀前半の須恵器B蓋が出土している。

003SDは最も遺物の出土量が多く、東山50号窯式期～高藏寺2号窯式期併行と、やや時期幅

がある。

101SD からはほぼ完形の須恵器杯口とハソウ(東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行)が共作している。

同様に 110SD からは東山 50 号窯式期併行の須恵器杯口が出土している。

岩崎 41 号窯式期併行の遺物がほとんどみられず、前述のように 035SI と 033SI には間層を挟

むことから、この 3-2 期は 7 世紀末～8 世紀初頭頃にやや断絶期を有する可能性がある。

3-3 期 後述する B 区では大型の総柱建物 650・

1013SB が築かれる。A 区においては明確な遺物の出土はないが、遺構の重複関係から 034・038・031SI が当該期に相当すると考えられる。

034・031SI はいずれも東辺が確認できている

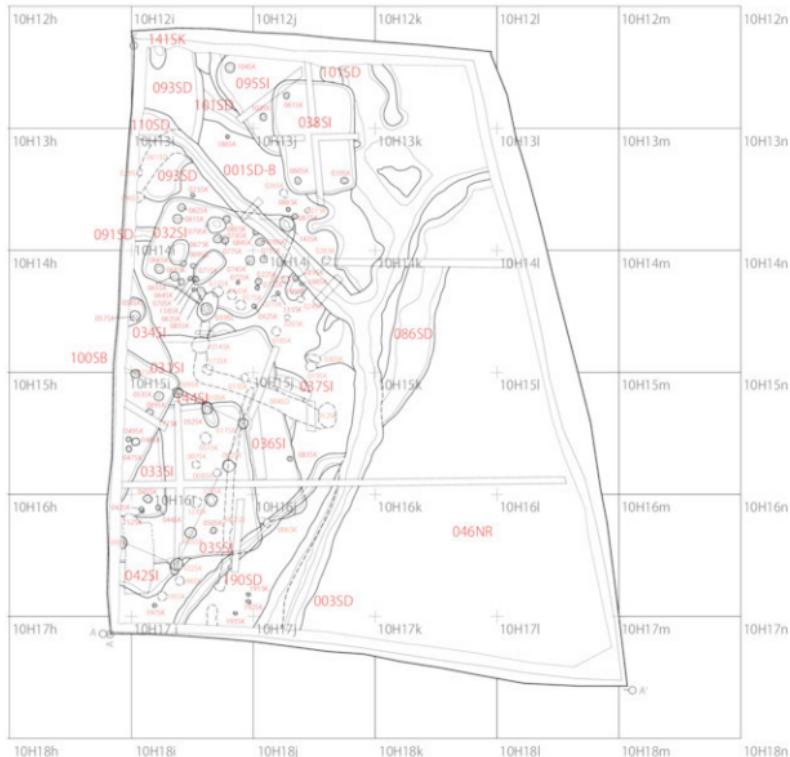


図 2-2 A 区第 2 面遺構平面図 (1:200)

だけだが、おおむね一辺が6m 前後の標準的な規模と推測される。

038SIは3-2期の095SIを切って築かれており、長軸が4.6m、短軸は3.4m のやや台形を呈する堅穴建物である。

3-4期 第1面において検出した遺構の時期に相当する。堅穴建物はなくなり、L字状の溝

004SD、次いで南北溝 002SD が掘削される。

さらに 002SD を切って、軸線を北でやや東に振る掘立柱建物 100SB が築かれる。西辺が調査区外に伸びるために、東西の規模は不明だが、南北が4間、東西は3間以上。柱の掘り方は直径50cm ほどの円形で、柱の径は20cm 程度。建物の軸線は、北で26°東に振れる。

この 100SB よりも方位はさらに北で東に振れ

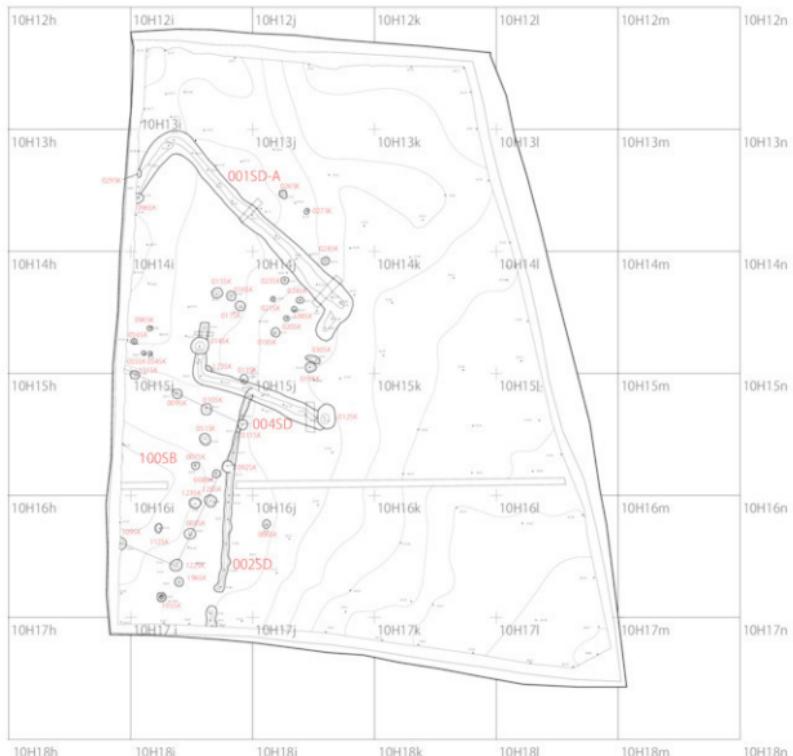


図2-3 A区第1面遺構平面図 (1:200)

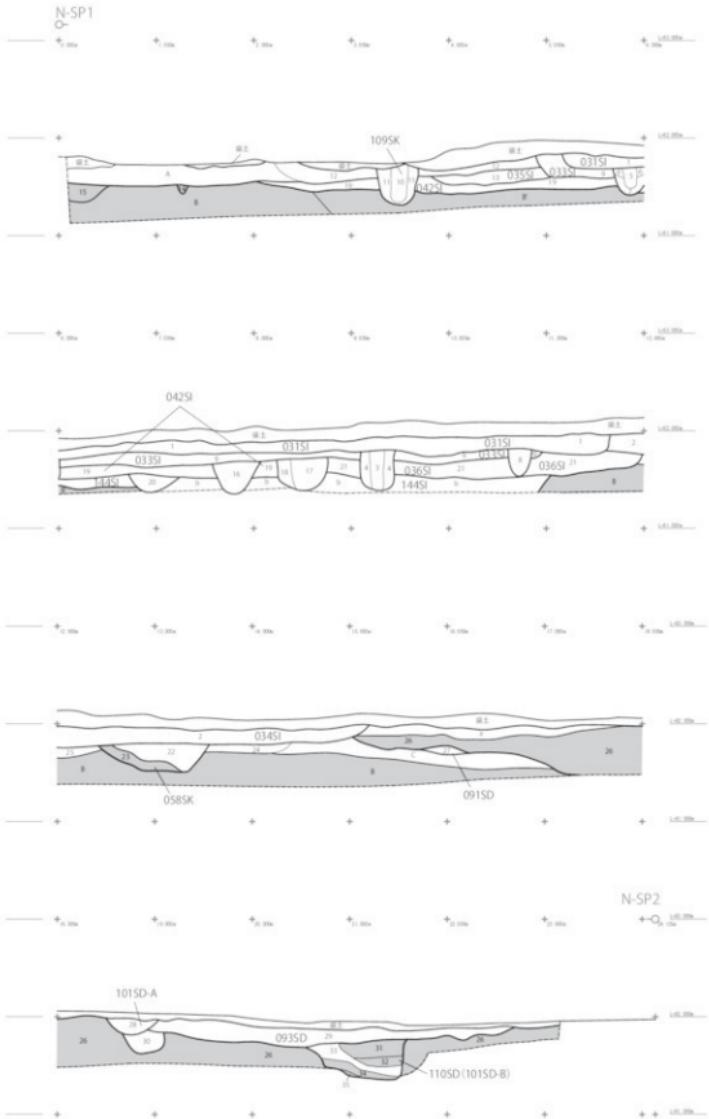


图 2-4 A 区西壁土层断面图 (1:50)

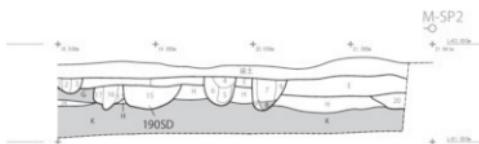
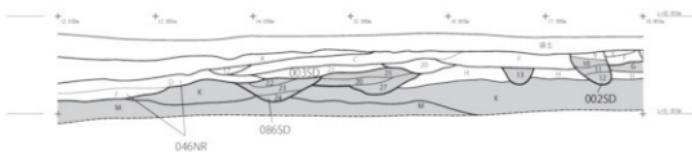
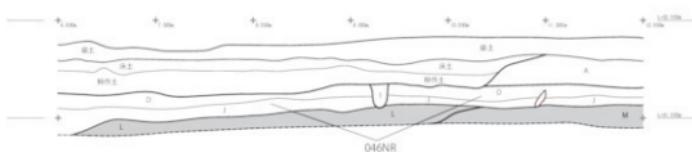
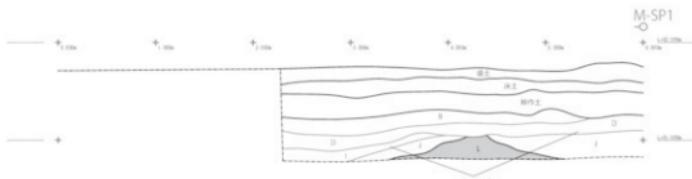


图 2-5 A 区南壁土层断面图 (1:50)

A区西壁土層断面注記

A.	23Y3/2 黒褐色	シルト	硬質 粘性やや強い 増サビ質土強い現状に含む
b.	5Y2/2 黑褐色	シルト質シルト	硬質 粘性ややあり サビ質土まばらに含む
c.	10YR3/2 暗紅褐色	シルト	やや軟質 粘性ややあり サビ質土まばらに含む
a.	23Y4/6 暗褐色	砂質シルト	硬質 粘性やや弱い 増サビ質土斑状に含む
b.	5Y2/2 黑褐色	砂質シルト	やや軟質 粘性やや弱い 増サビ質土斑状に含む
c.	10YR3/2 暗紅褐色	シルト	やや軟質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
1.	0451 地表		
2.	0451 地表		
3.	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	やや軟質 粘性強い
4.	23Y3/1 黑褐色	粘土質シルト	やや軟質 粘性強い
5.	73Y3/2 オーラープ黒色	シルト	軟質 粘性ややあり
6.	73Y3/2 オーラープ黒色	砂質シルト	硬質 粘性ややあり
7.	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	やや軟質 粘性ややあり
8.	10YR2/2 黑褐色	シルト	軟質 粘性あり
9.	0351 地表		
10.	5Y3/2 オーラープ黒色	細粒質シルト	やや軟質 粘性ややあり
11.	5Y3/2 オーラープ黒色	シルト	硬質 粘性ややあり
12.	0351 地表	粘土質シルト	やや軟質 粘性強い
13.	0351 地表		
14.	23Y3/2 黑褐色	シルト質砂	軟質 粘性弱い
15.	23Y4/3 オーラープ黒色	砂粒	軟質 粘性弱い
16.	5Y3/2 オーラープ黒色	細粒質シルト	硬質 粘性ややあり
17.	10YR2/2 黑褐色	シルト	軟質 粘性ややあり
18.	23Y3/1 黑褐色	シルト	硬質 粘性ややあり
19.	04251 地表		
20.	5Y3/1 地表	砂質シルト	
21.	03651 地表		
22.	23Y3/3 暗紅リップ黒色	細粒質シルト	やや軟質 粘性ややあり
23.	23Y3/3 暗紅リップ黒色	シルト質細粒	やや軟質 粘性ややあり
24.	23Y3/2 黑褐色	シルト	軟質 粘性弱い
25.	23Y4/2 暗紅黒色	シルト	軟質 粘性弱い
26.	23Y3/4 黄褐色	砂	粗約60% 繊維織り0% 中粒約30%
27.	23Y3/4 黄褐色	シルト	軟質 粘性やや弱い
28.	23Y3/3 暗紅リップ黒色	シルト	やや軟質 粘性やや弱い シルト斑状に含む
29.	23Y3/3 暗紅リップ黒色	砂質シルト	やや軟質 粘性やや弱い
30.	73Y4/2 暗紅リップ黒色	細粒	硬質 粘性弱い
31.	5Y4/2 暗紅リップ黒色	砂粒	軟質 粘性弱い 繊維織り少し含む
32.	5Y4/2 暗紅リップ黒色	シルト質砂	軟質 繊維織り少し含む
33.	73Y3/3 暗紅リップ黒色	シルト質砂	軟質 粘性やや強い
34.	23Y4/3 オーラープ黒色	砂	軟質 粘性弱い
35.	23Y4/3 オーラープ黒色	粗粒	軟質 粘性なし

A区南壁土層断面注記

1.	10G5/1 暗褐色	砂質シルト	軟質 粘性あり
2.	2.5Y3/1 黑褐色	砂質シルト	軟質 粘性弱い
3.	2.5Y3/2 黑褐色	シルト	硬質 粘性やや強い
4.	2.5Y4/3 オーラープ黒色	シルト	やや硬質 粘性やや強い
5.	2.5Y3/1 黑褐色	シルト	やや軟質 粘性ややあり
6.	2.5Y3/2 暗紅リップ黒色	シルト	やや軟質 粘性ややあり 所々砂質ブロック斑状に含む
7.	10YR2/3 黑褐色	シルト	やや軟質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
8.	5Y4/2 暗紅リップ黒色	シルト質砂	軟質 粘性ややあり
9.	2.5Y3/3 暗紅リップ黒色	シルト	やや軟質 粘性やや強い
10.	2.5Y3/4 黄褐色	砂	軟質 粘性弱い
11.	3Y4/3 暗紅リップ黒色	砂	軟質 粘性弱い
12.	2.5Y3/2 黑褐色	シルト質砂	やや軟質 粘性弱い
13.	5Y5/4 オーラープ黒色	粗粒	軟質 粘性なし 繊維織り少し含む
14.	7.5Y3/2 オーラープ黒色	粗粒	やや軟質 粘性ややあり
15.	5Y3/1 オーラープ黒色	粗粒シルト	やや軟質 粘性ややあり 所々砂質ブロック斑状に含む
16.	5Y4/2 暗紅リップ黒色	砂質シルト	軟質 粘性やや弱い
17.	2.5Y3/2 暗紅リップ黒色	シルト	やや軟質 粘性弱い
18.	5G4/1 暗紅リップ黒色	砂質シルト	やや軟質 粘性弱い
19.	2.5Y3/3 オーラープ黒色	粗粒	軟質 粘性なし
20.	2.5Y3/2 黑褐色	シルト	やや軟質 粘性弱い
21.	2.5Y3/3 黄褐色	砂質シルト	やや軟質 粘性ややあり サビ質土やや強い斑状に含む
22.	10YR2/3 暗紅リップ黒色	シルト質砂	やや軟質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
23.	7.5Y3/3 暗紅リップ黒色	砂	軟質 粘性弱い
24.	7.5Y4/2 暗紅リップ黒色	シルト質砂	軟質 粘性ややあり サビ質土少し含む
25.	7.5Y5/2 暗紅リップ黒色	砂	軟質 粘性弱い 繊維織り少し含む
26.	7.5Y5/3 暗紅リップ黒色	砂	やや軟質 粘性弱い ピート質砂状に含む
27.	10Y4/2 オーラープ黒色	粗粒	やや軟質 粘性ややあり サビ質土少し含む
28.	7.5Y5/2 暗紅リップ黒色	粗粒	やや軟質 粘性弱い サビ質土斑状に含む
A.	2.5Y4/2 暗紅黒色	シルト	やや軟質 粘性やや弱い
B.			
C.	10GY4/1 暗褐色	砂質シルト	硬質 粘性やや弱い サビ質砂状に含む
D.	046N08壤土		
E.	2.5Y3/2 黑褐色	シルト	硬質 粘性やや強い 増サビ質土強め斑状に含む
F.	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	硬質 粘性やや弱い 増サビ質土斑状に含む
G.	5Y4/3 暗紅リップ黒色	シルト質砂	硬質 粘性やや弱い 明サビ質土斑状に含む
H.	5Y4/2 暗紅リップ黒色	砂質シルト	粘性ややあり
I.	046N08壤土		
J.	5B64/2 暗紅黒色	砂質砂	サビ質土斑状に含む
K.	7.5Y5/2 暗紅リップ黒色	シルト質砂	硬質 粘性やや弱い 明サビ質土斑状に含む
L.	5BG5/1 青褐色	砂	粘性弱い サビ質土斑状に含む
M.	5GY4/1 暗オーラープ黒色	砂	粘性弱い サビ質土斑状に含む

図 2-6 A 区土層注記

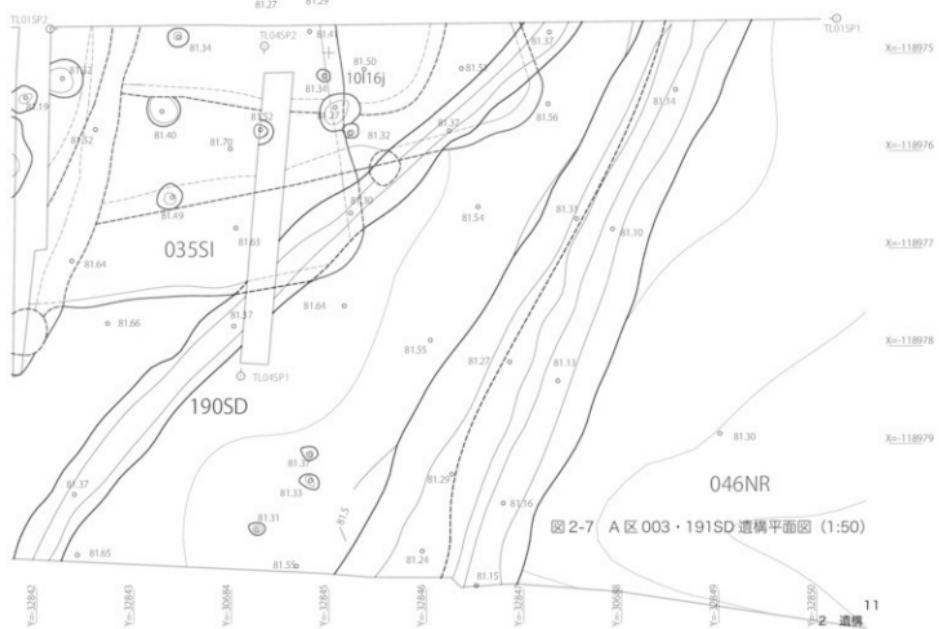
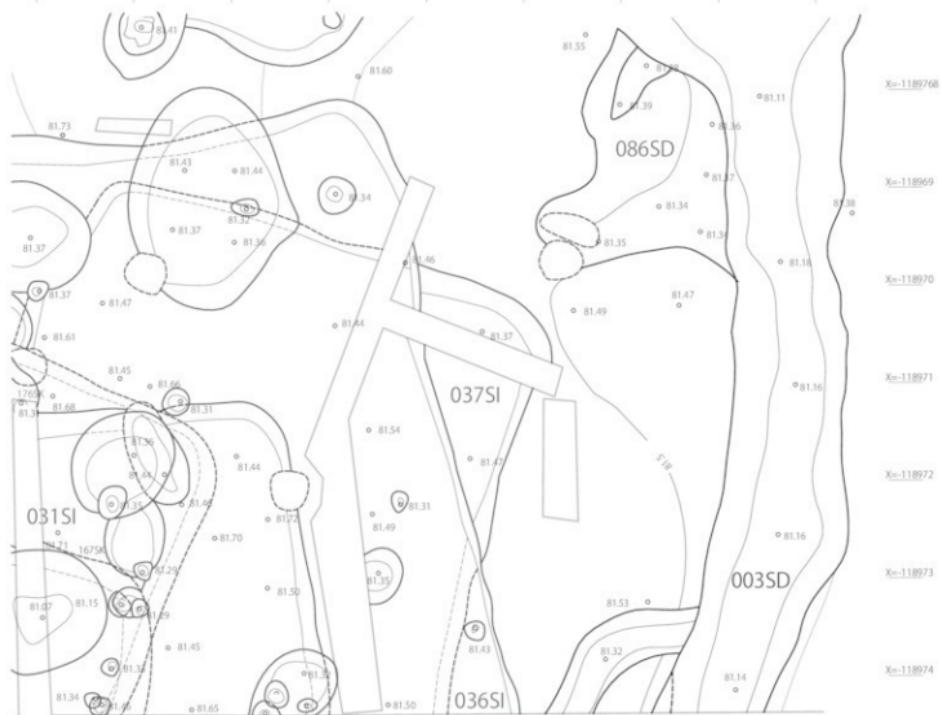


図 2-7 A 区 003・191SD 遺構平面図 (1:50)

Y=32440

Y=32440

Y=30644

Y=32440

Y=32440

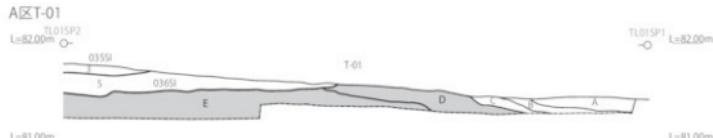
Y=32440

Y=30644

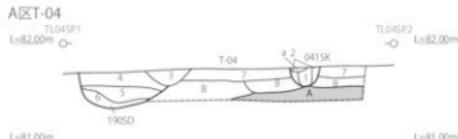
Y=32440

Y=32440

11
2-遺構



1. 25GY2/1 黒色	シルト	やや硬質、粘性やや強い。サビ質土やや強い斑状に含む。
2. SY3/1 オリーブ黒色	シルト	硬質、粘性やや弱い。
3. 25GY2/2	シルト	硬質、粘性やや弱い。サビ質土斑状に含む。
4. SY3/2 オリーブ黒色	シルト	やや硬質、粘性やや弱い。下部にサビ質土一部含む。
5. 10Y3/2 オリーブ黒色	シルト	硬質、粘性やや強い。硬質サビ粘質土含む。
A. SY3/2 オリーブ黒色	粘土質シルト	やや硬質、粘性やや強い。硬質サビ粘質土含む。
B. SY4/2 灰オリーブ色	砂質粘土	軟質、粘性やや弱い。
C. 25Y3/2	シルト	やや硬質、粘性やや強い。
D. 25Y3/2 オリーブ黒色	シルト	やや硬質、粘性やや強い。
E. 25GY3/1 灰オリーブ灰色	シルト層粉	やや軟質、粘性ややあり。



a. 25GY2/1 オリーブ灰褐色	シルト	軟質、粘性ややあり。下面に層厚の明暗褐色サビ質土挟む。
1. 10Y3/1 オリーブ黒色	シルト	やや軟質、粘性やや弱い。サビ質土少し含む。
2. SY3/1 オリーブ黒色	シルト	硬質、粘性やや弱い。サビ質土斑状に含む。
3. SY3/2 オリーブ黒色	シルト	硬質、粘性やや弱い。明ワサビ質土斑状に含む。
4. SY4/2 灰オリーブ色	シルト	硬質、粘性やや弱い。明ワサビ質土少し含む。
5. 10Y3/2 灰オリーブ色	砂質シルト	やや硬質、粘性やや弱い。
6. 7SY4/2 灰オリーブ色	砂質シルト	起飛点、砂質コロクス斑状に含む。
7. 25Y3/2 黑褐色	シルト	硬質、粘性やや弱い。サビ質土斑状に含む。
8. 10Y3/2 オリーブ黒色	シルト質粉	硬質、粘性やや弱い。硬質サビ粘質土含む。
A. 25GY3/1 灰オリーブ灰褐色	シルト層粉	やや軟質、粘性やや弱い。
B. 10Y3/1 オリーブ黒色	シルト	硬質、粘性やや弱い。サビ質土斑状に含む。

図2-8 A区 003・190SD 土層断面図 (1:50)

るが、3-2期の110SD (101SD-B) をコの字状に再掘削した溝001SD-Aは、東端が100SBの東側柱列にはば崩うことから、同時期に属するとみられる。

101SD-Aと100SBの間にも若干の柱穴が認められることから、同時期の掘立柱建物ないしは柵列が存在した可能性が高い。

A区において、この3-4期に属する遺物は少ないが、002SDから折戸53号窯跡期～東山72号窯跡期併行の灰釉陶器碗が出上している。

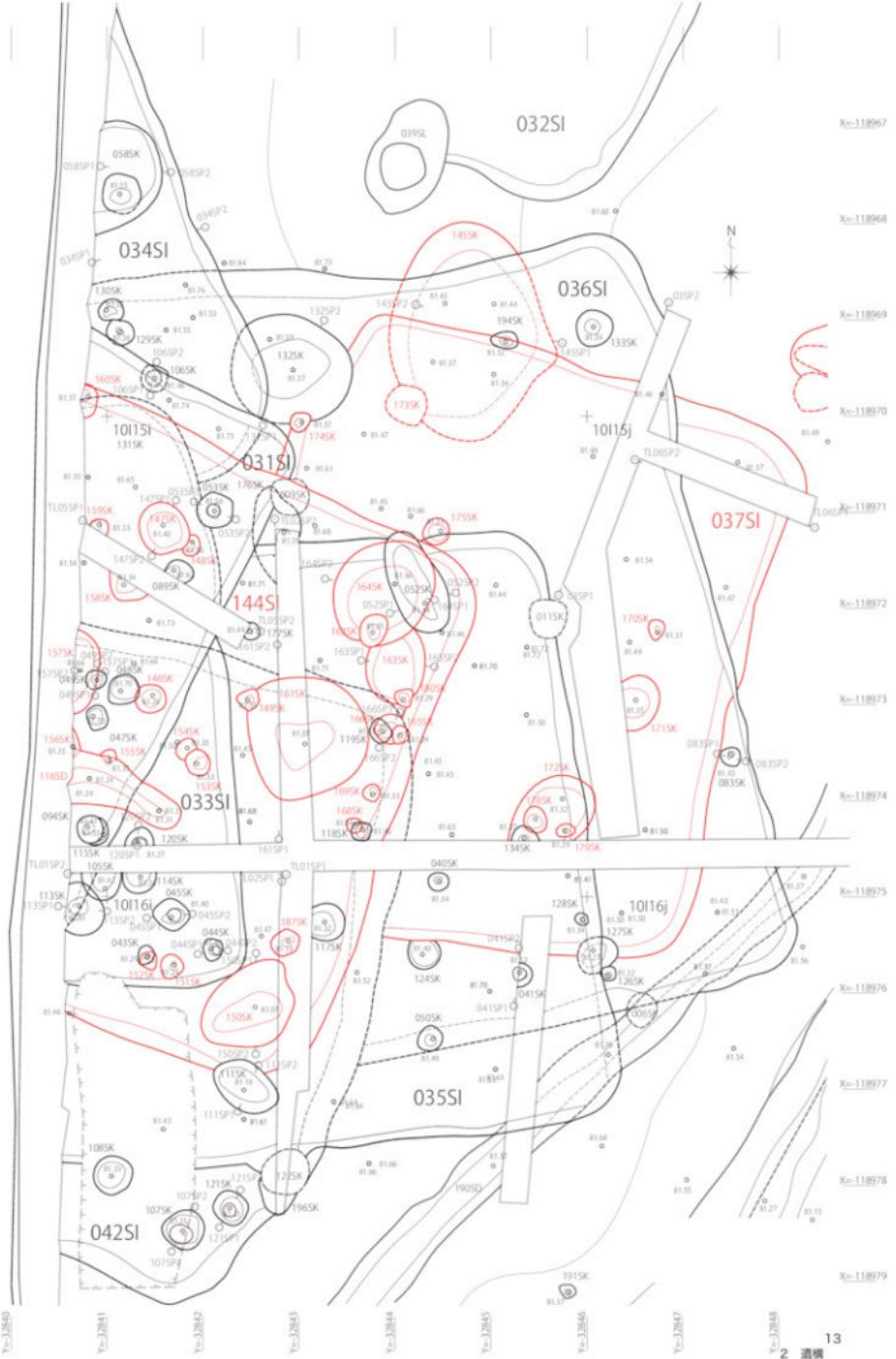


図 2-9 A 区 031・033・034・035・036・037・042・144SI 運構平面図 (1:50)

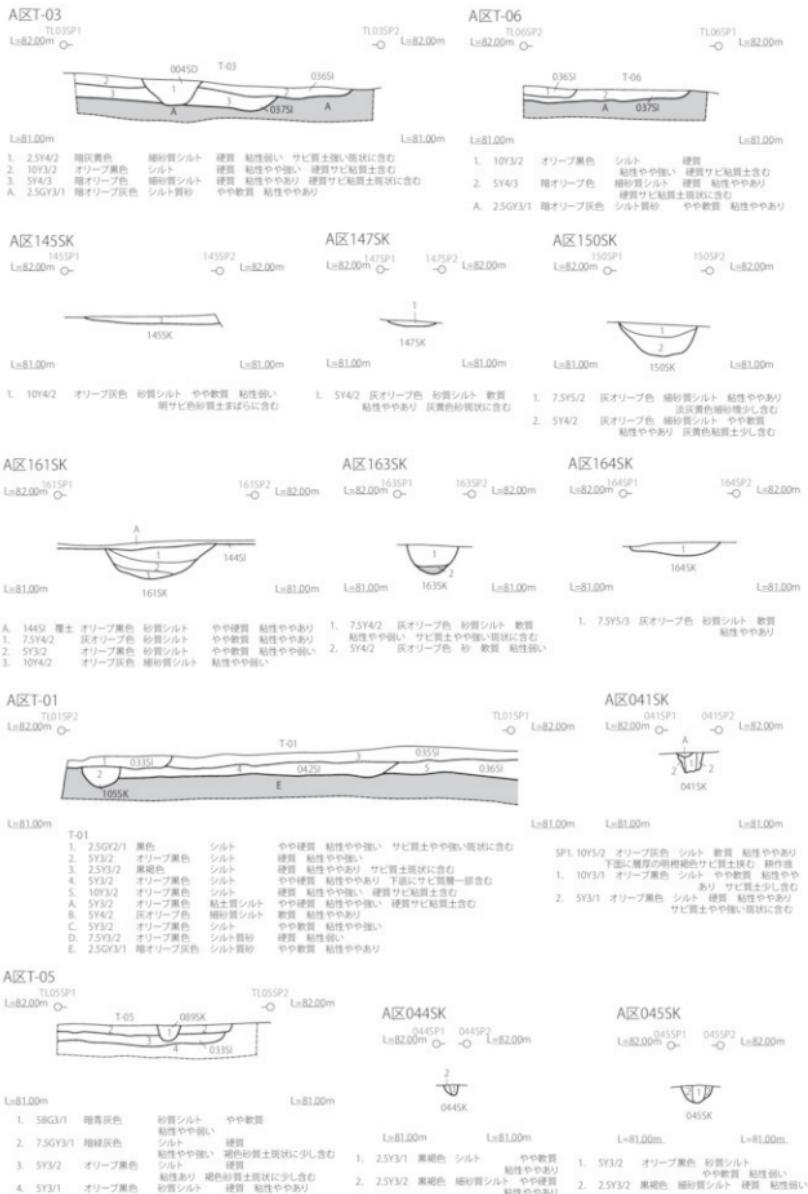


図 2-10 A 区 033・035・036・037・042・144S1 土層断面図 (1:50)



図 2-11 A区 034・035・036・042SI 土層断面図 (1:50)

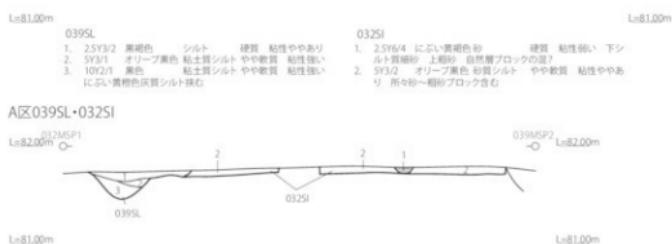
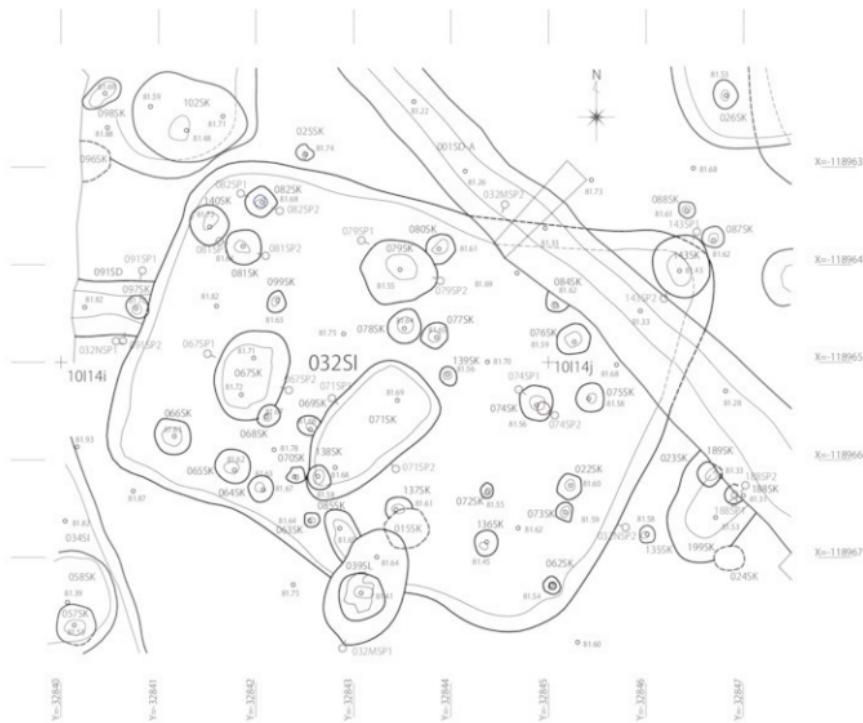


図 2-12 A 区 032SI 遺構平面図 (1:50)

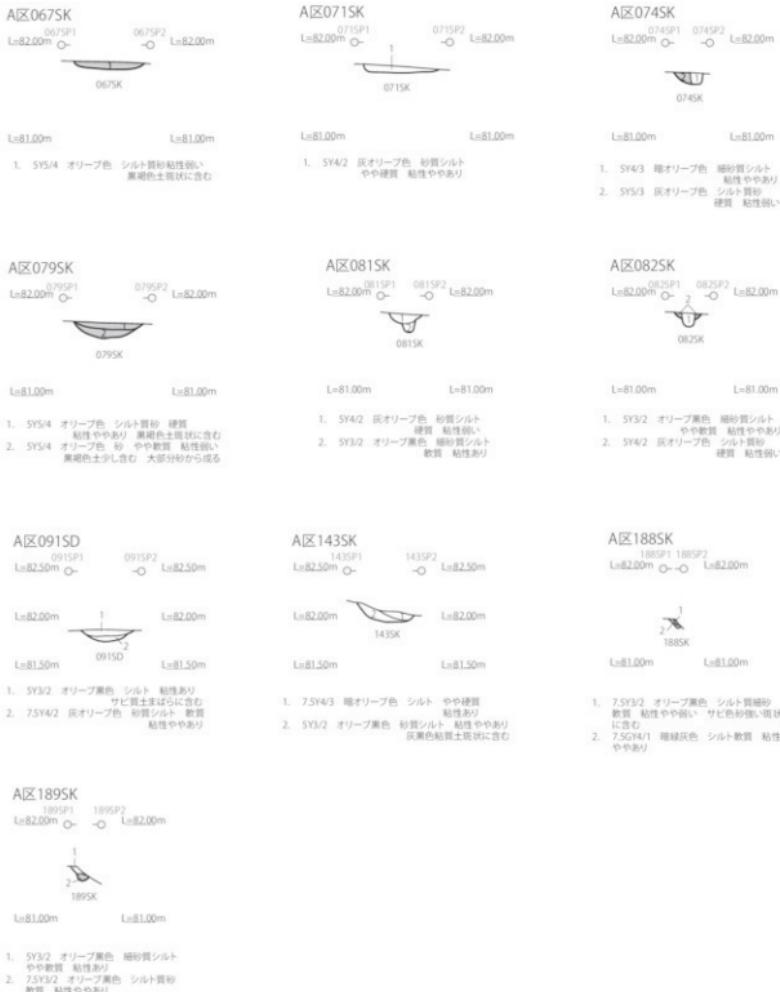


図 2-13 A 区 032SI 土層断面図 (1:50)



図 2-14 A 区 038・095SI・093・101・110SD 遺構平面図 (1:50)



図 2-15 A 区 038・095SI 土層断面図 (1:50)

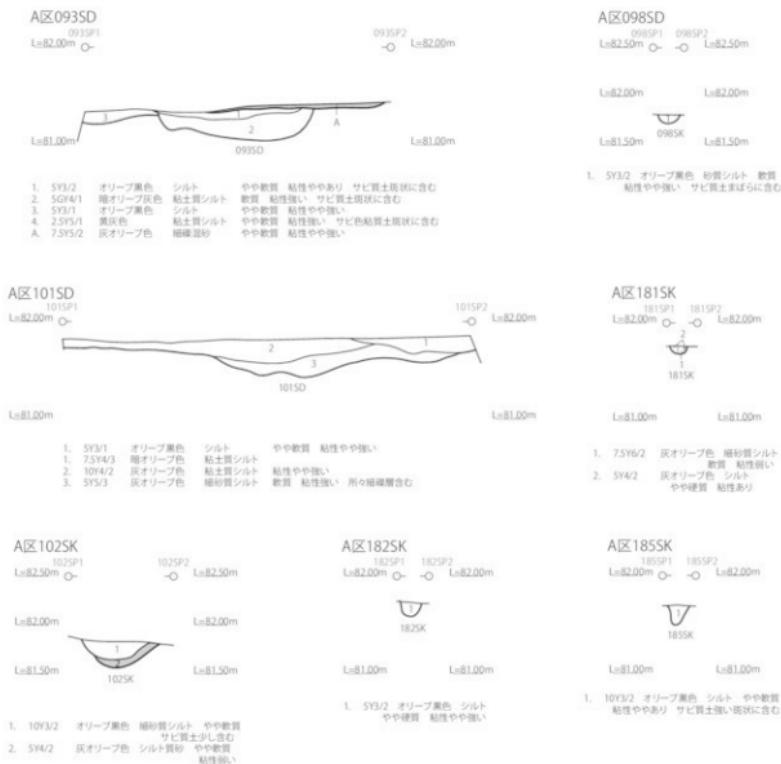


図 2-16 A区 093・101・110SD 土層断面図 (1:50)

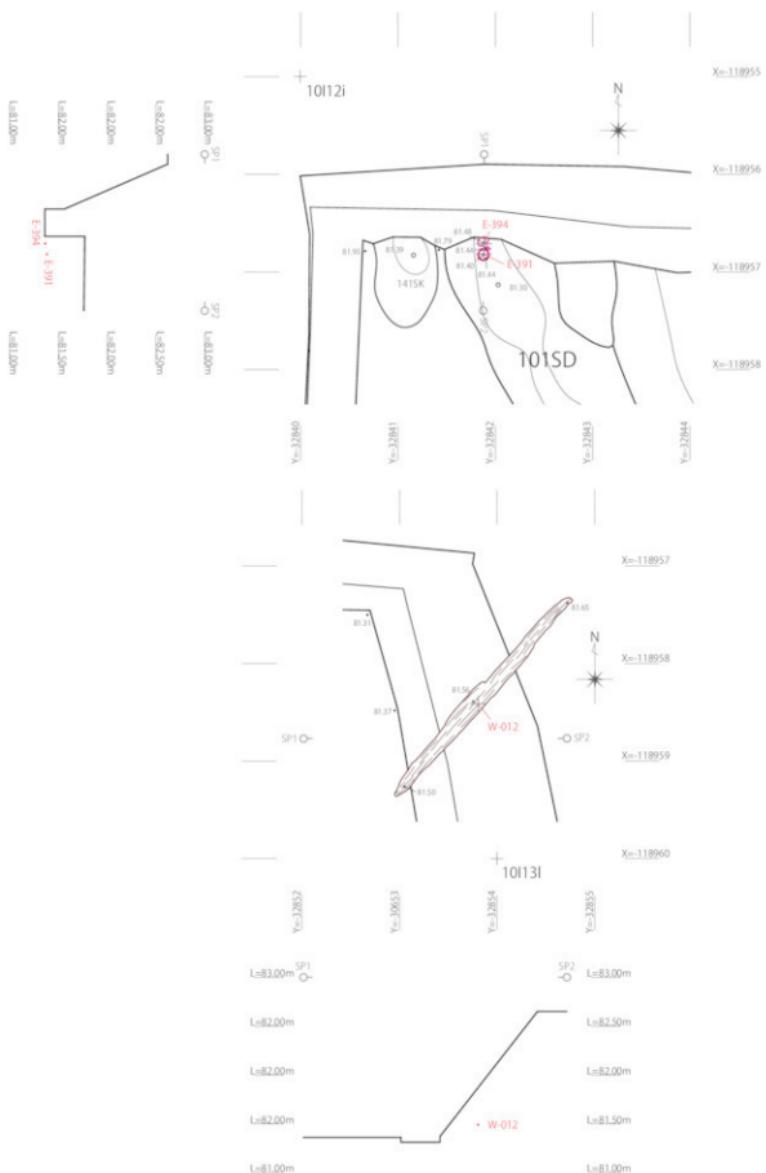


図 2-17 A 区 101SD・046NR 遺物出土状態図 (1:50)

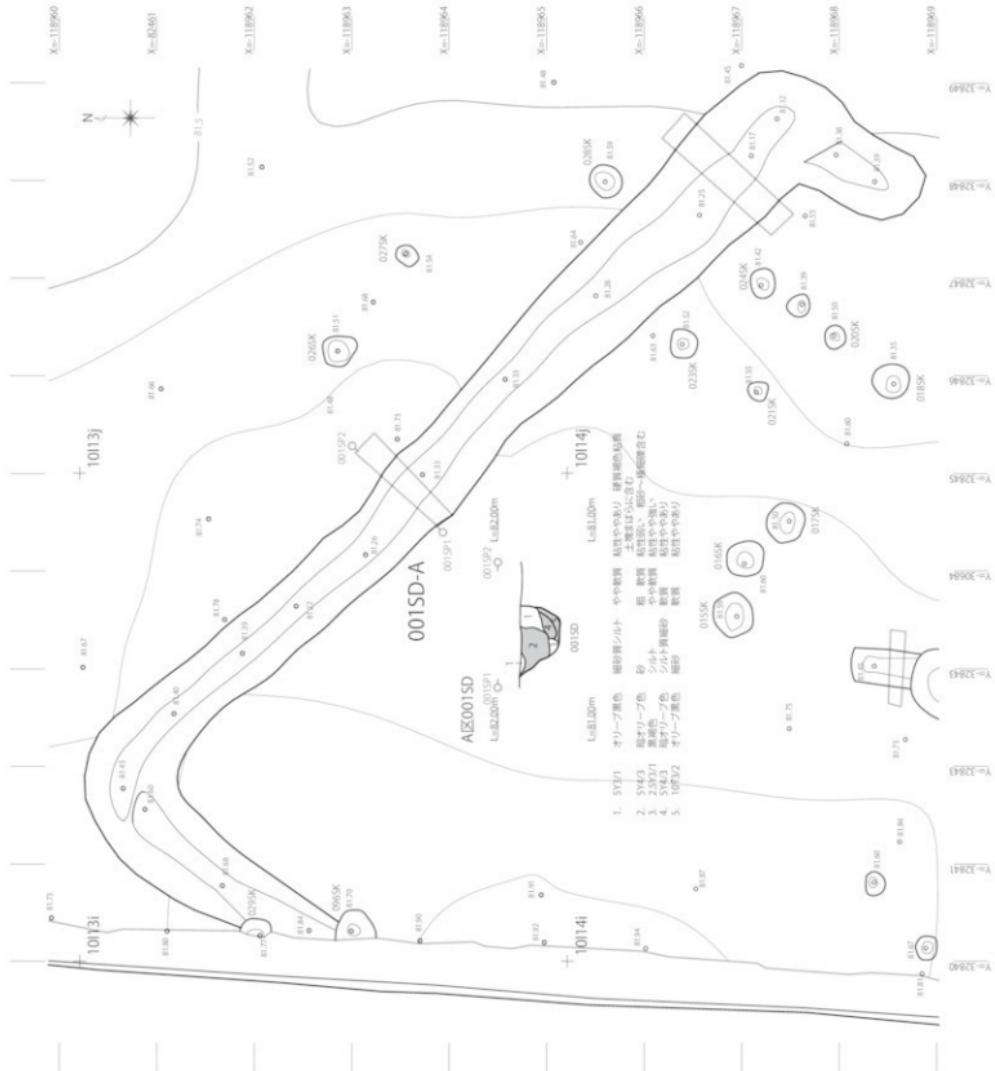
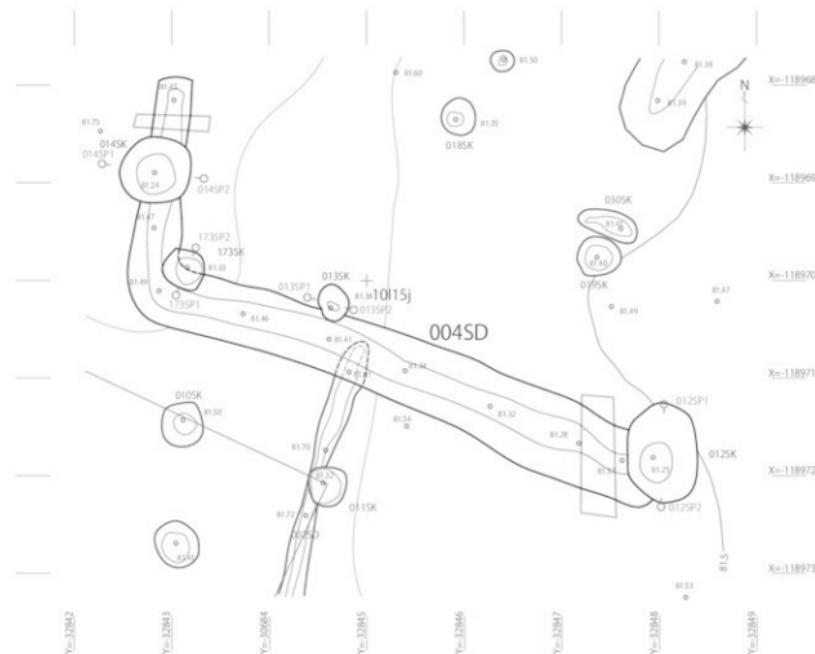
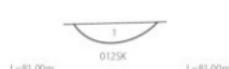


図 2-18 A 区 001SD-A 遺構平面図・土層断面図 (1:50)



A区0125K

012SP2 L=82.00m



1. 75Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト やや硬質
粘性やや強い 下層にサビ層を薄い斑状に含む

A区013SK

L=82.00m 013SP1 013SP2 L=82.00m



3 100%13 摄影集 七上 附录 新课标

A区0145K

014SP2 L=82.00m



1.	7.5Y4/2	戻オリーブ色 前後の便器 サビ 肉桂色まばらに含む	シルト シルト	やや健美 やや軟質	粘性あり
2.	7.5Y2/2	オリーブ葉色 強い サビ 肉桂色状況に含む	シルト	やや軟質	粘性やや
3.	5Y3/2	オリーブ葉色	細砂質シルト	軟質	粘性ややあり
4.	7.5Y3/2	オリーブ葉色	細砂質シルト	軟質	粘性ややあり

A区1336K

173SP1 173SP2 L=82.00m



図 2-19 A 区 004SD ほか遺構平面図・土層断面図 (1:50)

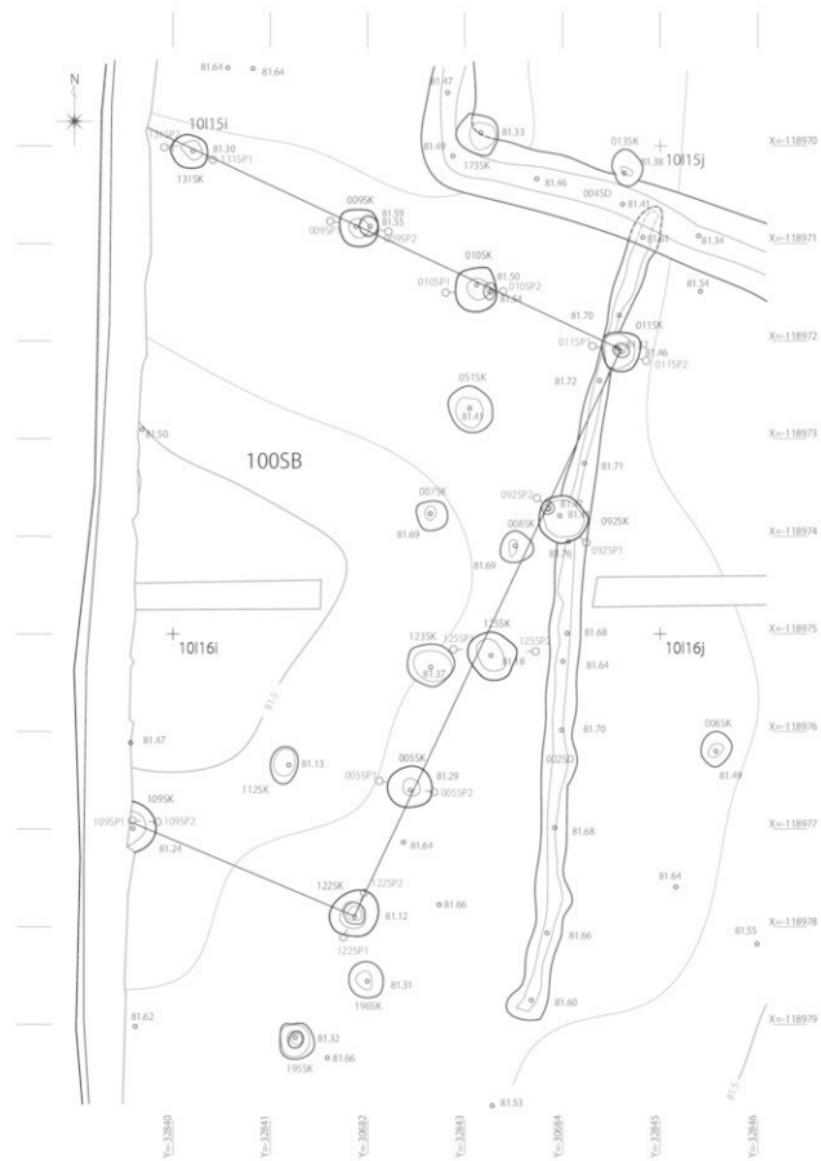


図 2-20 A 区 100SB 遺構平面図 (1:50)



図 2-21 A 区 100SB 柱穴土層断面図 (1:50)

3. B区

表2-1で示したように、B区は3面の遺構面で遺構検出作業をおこなった。しかし、B区の西壁・南壁の土層断面図をみてもわかるように、本来第1面として検出した標高約82mは、最も新しい時期の柱穴が掘り込まれた遺構面よりも1.5m近く低い。これは前述のように古代の遺物が大量に

含まれる整地層を二次堆積の單なる遺物包含層と誤認したこと。そして古代の柱穴群を、当初は現代の乱れと誤って認識したことによっている。

特に西壁北寄りのセクションをみると限り、この調査区の上に建っていた住宅の基礎を取り除いた標高83.5m付近から、柱掘り方が0.9mを超えるような柱穴がいくつも掘り込まれていることがわかる。しかも、これらの柱穴の多くは底面が標

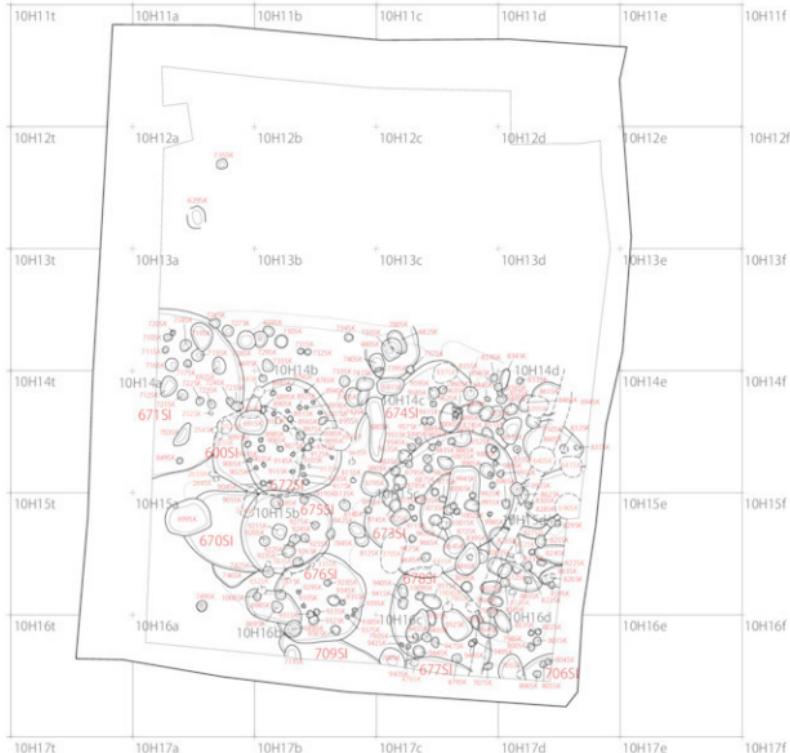


図2-22 B区第3面遺構平面図 (1:200)

高82mまでは到達していないことから、我々が第1面として遺構検出をおこなった面では、既に多くの柱穴を失っていた可能性がきわめて高い。これは、調査担当者として重大な失態であることをここに明記して、今後の反省材料としたい。

しかも、西壁および南壁の土層断面をみる限り、古代（3期）の掘立柱建物の柱穴が掘削された整地面は1面だけではなく、おおまかにみても3面、

細かくみれば5面におよぶことがわかる。第3章で示したB区包含層（整地層）の遺物が7世紀後半～11世紀と非常に広い時期幅があり、かつA区の3-1～3-4期に対応するように、それなりのまとまった遺物群であることは、3～5回におよぶ度重なる整地によってB区の遺構面が形成されていることを意味しているのである。

ただし、南壁セクションでの調査区南東隅で

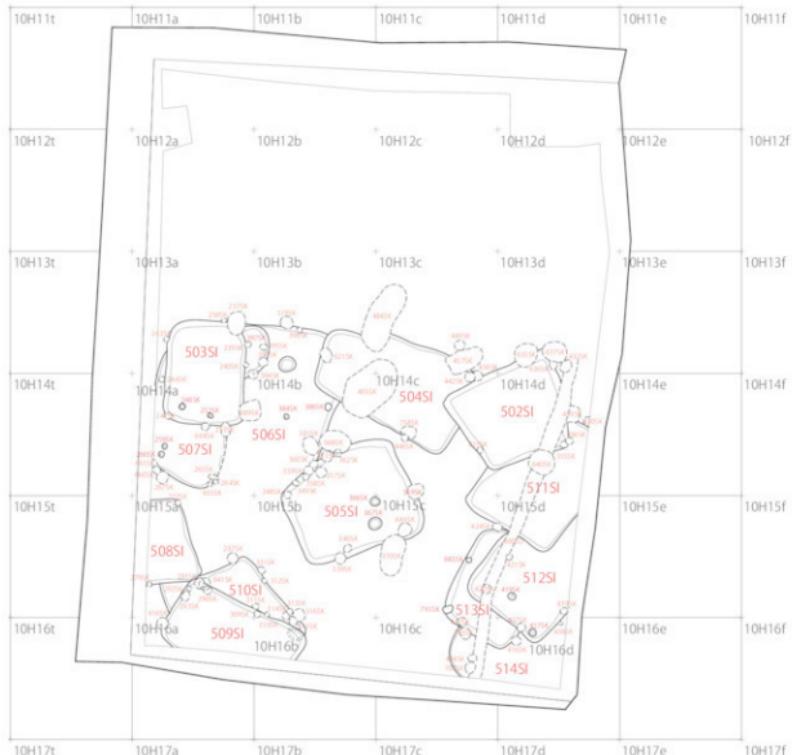


図2-23 B区第2面遺構平面図（1:200）

は整地層が30cm程度ときわめて薄くなっていること、また後述する図2-48の総柱建物650SBの柱穴のうち最も東壁寄りで検出した636SKでは標高82.2mで近世の水田耕作土が認められることから、必ずしも整地層は水平ではなく、西側により分厚く堆積していることから、第3面は同じ調査区内でも最高所と最低所で約1.5mもの比高差があったことがわかる。

そのような比高差を無視して最低所に合わせて遺構検出面を1面のみにしてしまったこと、そしてB区第1面の遺構のほとんどが掘立柱建物であったために、遺構の時期決定をきわめて困難にしてしまった。後述するように、大型の総柱建物650SBのみは柱抜き取り穴から8世紀後半の短頸壺が出土したことにより、かろうじて廃絶時期をおさえることができたが、それ以外の掘立柱建

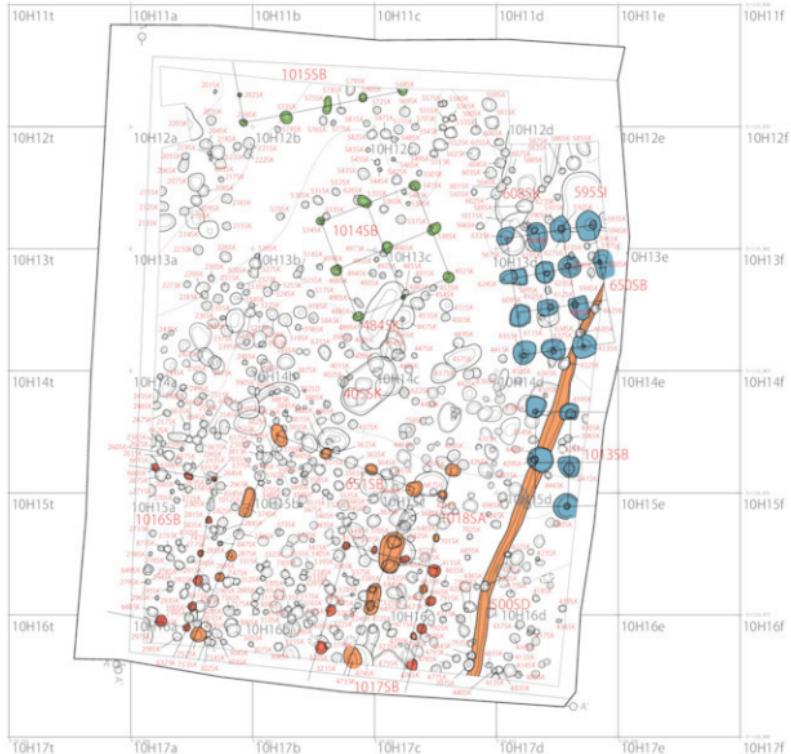


図2-24 B区第1面遺構平面図 (1:200)

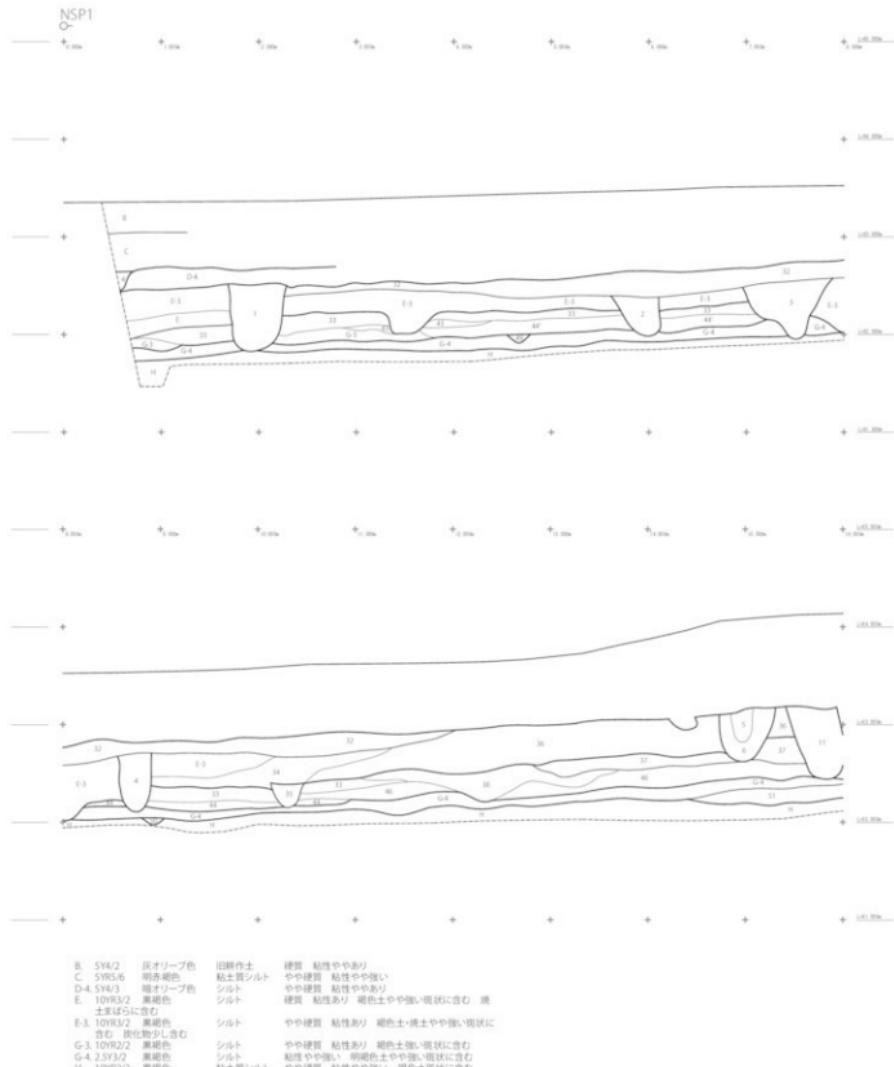


図 2-25 B 区西壁土層断面図 -1 (1:50)

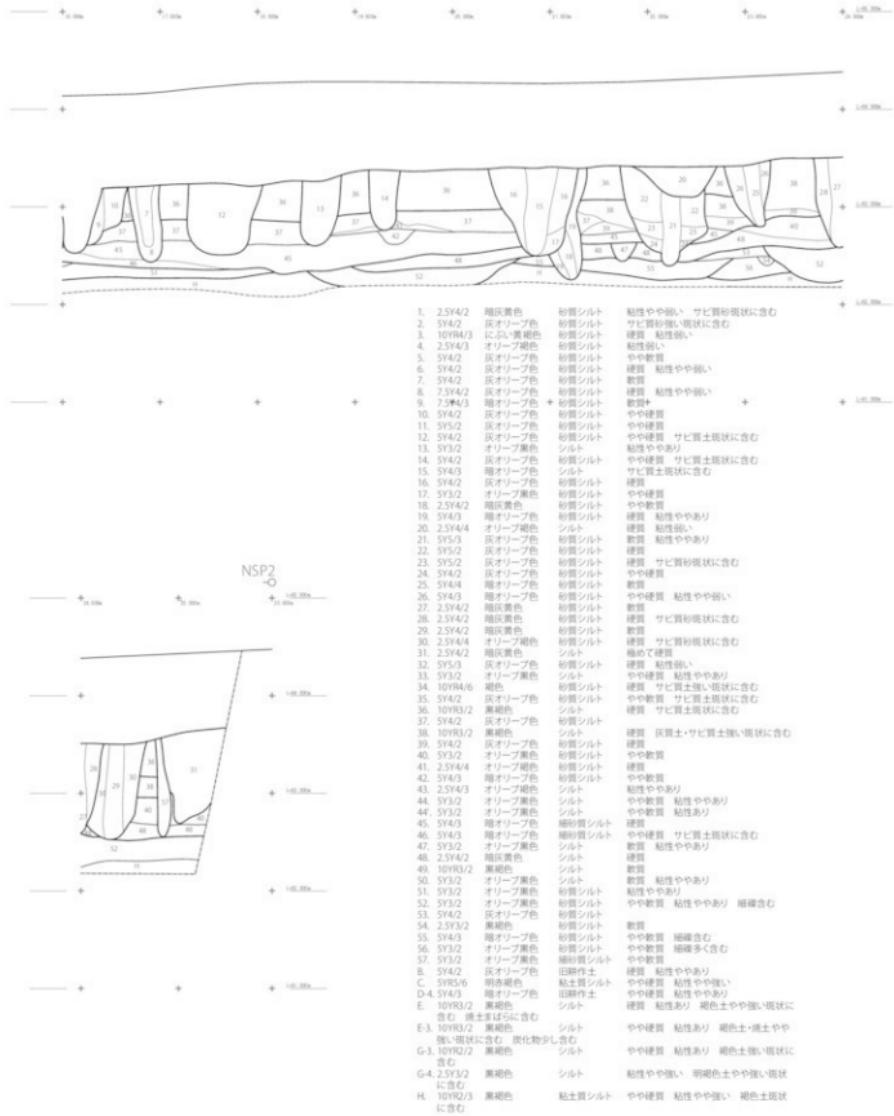


図 2-26 B 区西壁土層断面図 -2 (1:50)

B区南壁土層断面図-1 1:50

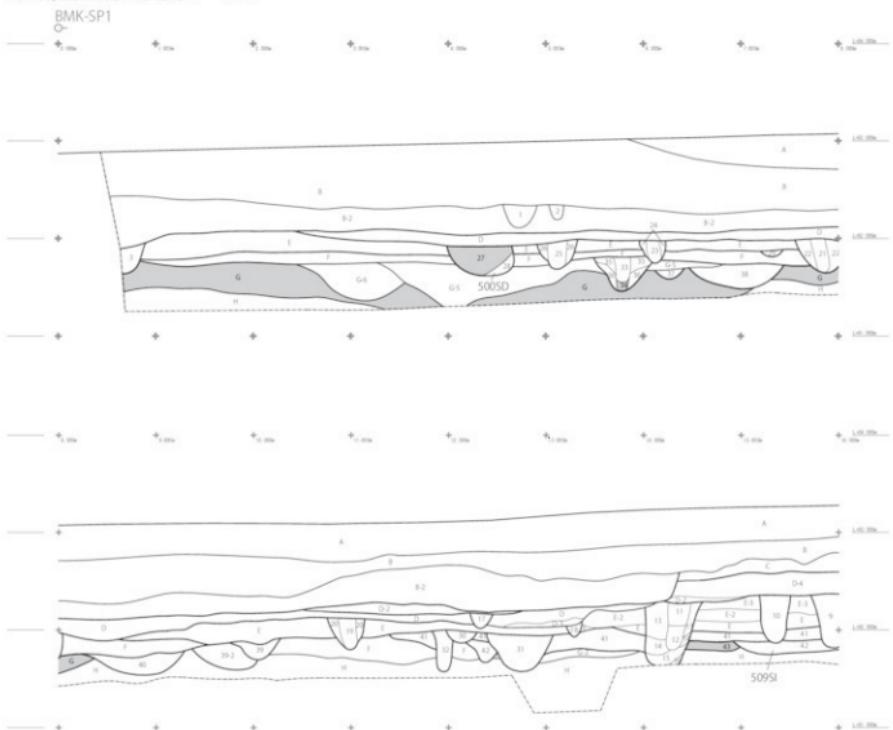


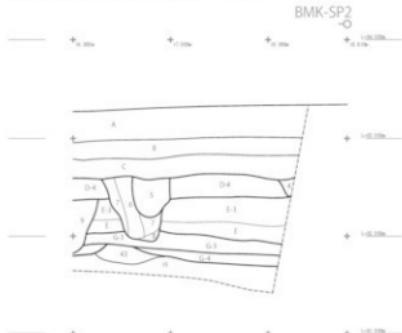
図 2-27 B 区南壁土層断面図 -1 (1:50)

物については柱穴内から時期を限定しうる遺物が出土していないために、柱穴の重複で遺構の前後関係を決める以外に手はない。しかし、図 2-28 にみるように、実際に建物として確めることができた柱穴同士にはほとんど重複関係がない。整地層ごとに遺構検出をおこなっていれば決め得たかもしれない掘立柱建物の時期決定を、建物の軸線と周囲の遺構との関連からしか推定せざるを得な

くしてしまったのは痛恨の極みである。

本来であれば 3 面以上あった古代の遺構検出面を第 1 面として、実際の調査では 3 面の遺構検出面を確認した。このうち最下層の第 3 面は縄文時代中期～後期である(1 期)。調査区南部において、竪穴建物の可能性がある直径 3.5 ～ 7m の平面円形の落ち込みを 12 基と土坑多数を確認した。

B区南壁土層断面図-2 1:50



1.	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト	乾燥 粘性ややあり	
2.	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト	乾燥 粘性ややあり	赤褐色土層間に含む
3.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	乾燥 粘性や強い	
4.	5YR5/6	明黄色	シルト	乾燥 粘性あり	湿度物まばらに含む
5.	10YR2/2	黒褐色	シルト	硬質 粘性あり	
6.	7.5Y3/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やや強い	
7.	10YR4/3	にじみ黄褐色	シルト	硬質 粘性やや弱い	
8.	10YR2/2	黒褐色	シルト	極めて硬質 粘性あり	湿度物まばらに含む
9.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや硬質 粘性あり	褐色土層に現状に含む
10.	3Y3/2	オリーブ褐色	シルト	粘性ややあり	褐色土層中に含む
11.	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや乾燥 粘性あり	褐色土層に現状に含む
12.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性ややあり	褐色土層間に含む
13.	10YR1/4	暗褐色	シルト	硬質 粘性あり	褐色土層間に含む
14.	7.5YR3/3	褐色	シルト	硬質 粘性ややあり	褐色土層間に含む
15.	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	やや硬質 粘性やや強い	褐色土層間に含む
16.	7.5YR3/4	褐色	シルト	硬質 粘性ややややややあり	褐色土層間に含む
17.	7.5YR3/2	褐色	シルト	水分多く 粘性ややややややあり	褐色土層間に含む
18.	10YR2/3	黒褐色	シルト	水分多く 粘性ややややややあり	褐色土層間に含む
19.	2.5Y3/3	黒褐色	シルト	乾燥 粘性やややややや	法藍色土層間に含む
20.	10YR3/2	黒褐色	シルト	乾燥 粘性やややややや	褐色土層間に含む
21.	2.5Y3/3	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層間に含む
22.	2.5Y3/2	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層間に含む
23.	3Y3/2	オリーブ褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層間に含む
24.	2.5Y3/2	暗褐色	シルト	やや硬質 粘性やややややや	褐色土層間に含む
25.	3Y3/2	オリーブ褐色	シルト	乾燥 粘性やややややや	褐色土層間に含む
26.	2.5Y3/2	暗褐色	シルト	やや硬質 粘性やややややや	褐色土層間に含む
27.	2.5Y3/4	黃褐色	シルト	乾燥 粘性やややややや	褐色土層間に含む
28.	2.5Y3/2	褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層間に含む
29.	10YR2/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層間に含む
30.	10YR2/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
31.	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや乾燥 粘性やややややや	褐色土層やややややや
32.	2.5Y3/3	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
33.	10YR4/4	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
34.	10YR3/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
35.	10YR3/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
36.	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	硬質 粘性強い	褐色土層やややややや
37.	10YR3/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
38.	2.5Y3/2	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
39.	2.5Y3/2	褐色	砂質シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
39-2.	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
40.	10YR2/2	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
41.	2.5YR3/2	暗赤褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
42.	3Y3/2	オリーブ褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
42-2.	2.5Y3/2	褐色	砂質シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
43.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	乾燥 粘性弱い	粗砂少し含む
A.	10YR6/8	明黄色	砂	乾燥 粘性弱い	風化物少し含む
B.	3Y4/2	灰オリーブ褐色	旧耕作土	硬質 粘性弱い	
B-2.	3Y4/3	暗オリーブ褐色	旧耕作土	水分多く 粘性やややややや	
C.	3YR5/6	明赤褐色	粘土質シルト	水分多く 粘性やややややや	
D-2.	10YR3/1	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	風化物少し含む
D-3.	7.5YR5/6	明褐色	砂質シルト	水分多く 粘性やややややや	風化物少し含む
E.	2.5Y3/3	暗褐色	砂質シルト	水分多く 粘性やややややや	風化物少し含む
E-2.	10YR3/2	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
E-3.	10YR2/2	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
F.	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
G.	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	乾燥 粘性弱い	
G-2.	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
G-3.	10YR2/2	暗褐色	シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
G-4.	2.5Y3/2	褐色	砂	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや
H.	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	水分多く 粘性やややややや	褐色土層やややややや

図 2-28 B 区南壁土層断面図 -2 (1:50)

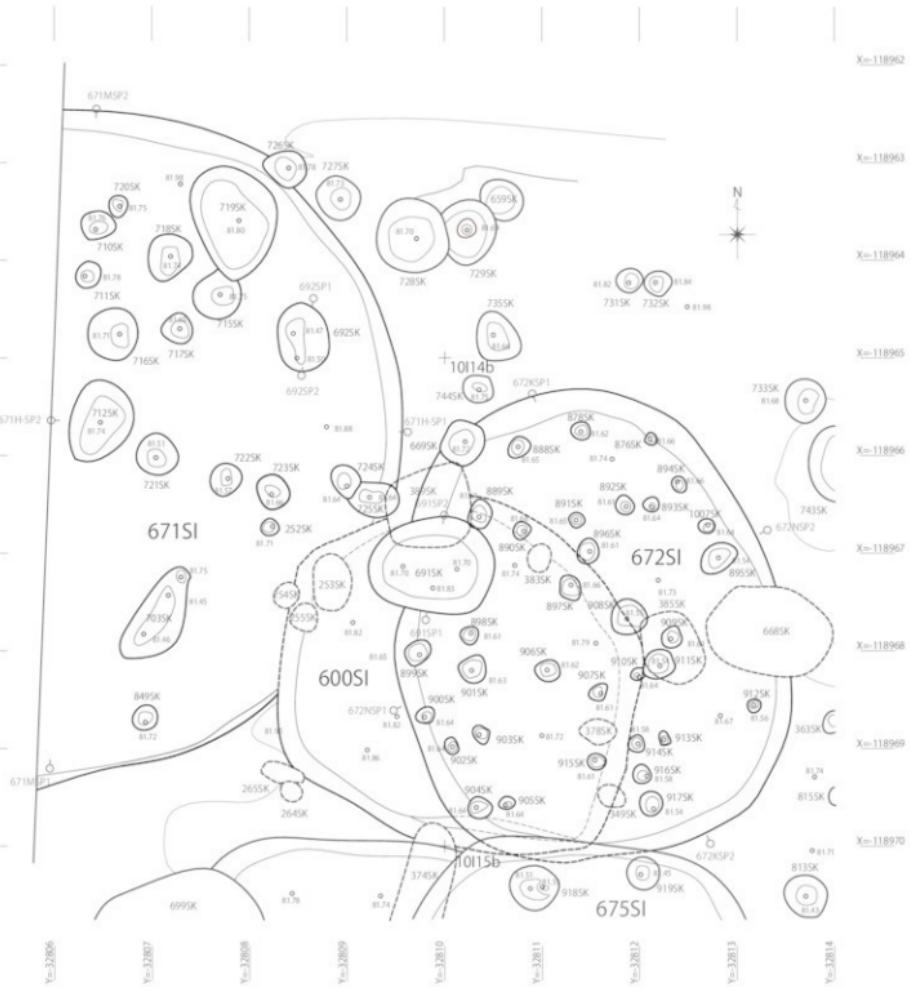


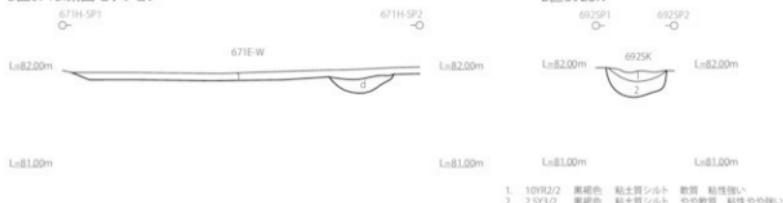
图 2-29 B 区 600 · 671 · 672SI 遗构平面图 (1:50)

B区671SI南北セクション



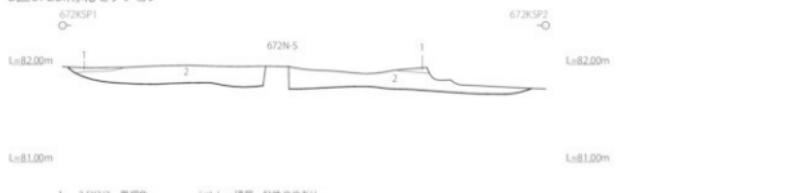
1. 黒褐色
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
d. 10YR3/3 黑褐色
1. 黒褐色
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
d. 10YR3/3 黑褐色
1. 黒褐色
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
d. 10YR3/3 黑褐色

B区671SI東西セクション



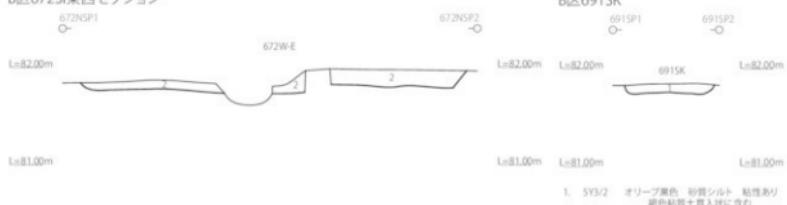
1. 10YR2/2 黒褐色
2. 2.5Y3/2 黒褐色
1. 黒褐色
2. 2.5Y3/2 黒褐色

B区672SI南北セクション



1. 2.5Y3/2 黒褐色
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色
1. 黑褐色
2. シルト

B区672SI東西セクション



1. 5Y3/2 オリーブ褐色
2. 黒褐色

図 2-30 B 区 671・672SI 土層断面図 (1:50)

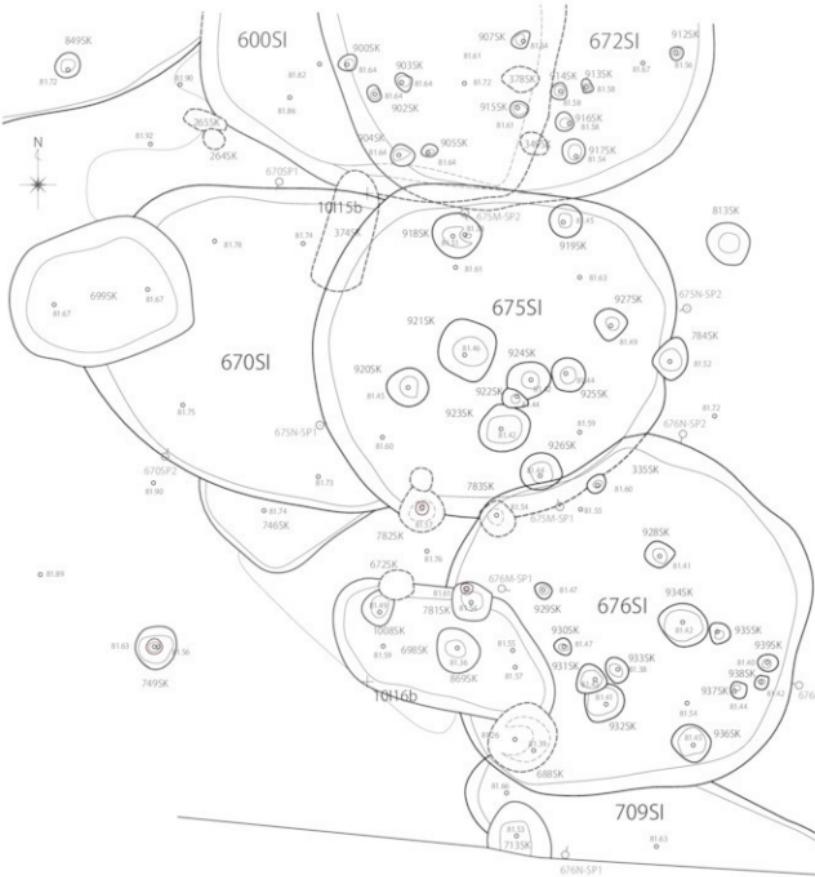


图 2-31 B 区 670·675·676SI 遗构平面图 (1:50)

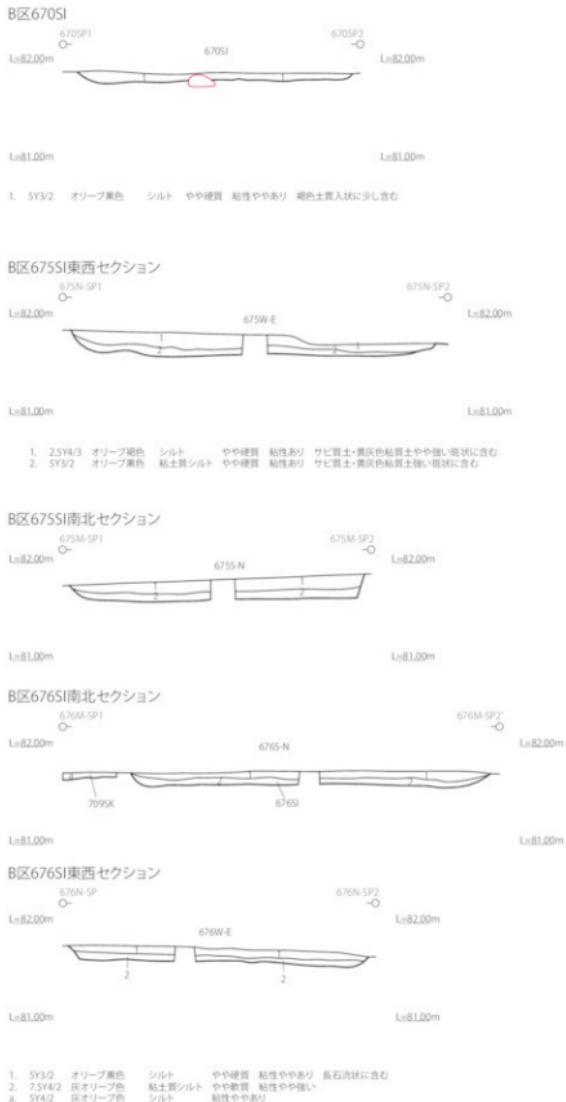


図 2-32 B 区 670・675・676SI 土層断面図 (1:50)

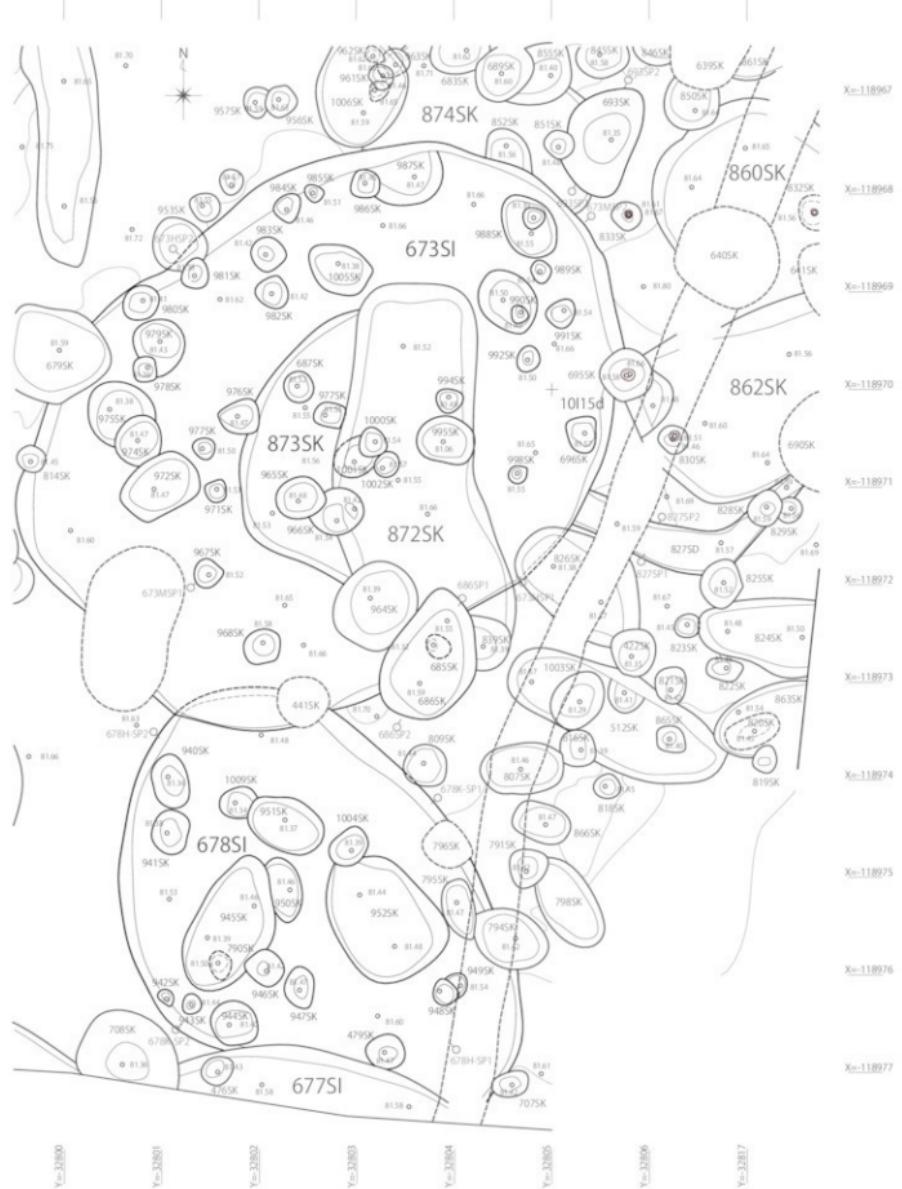
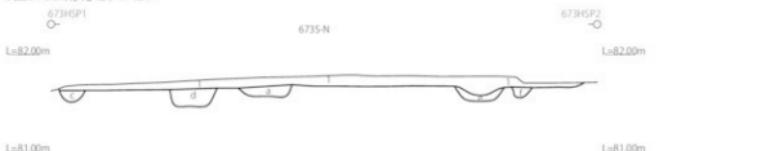


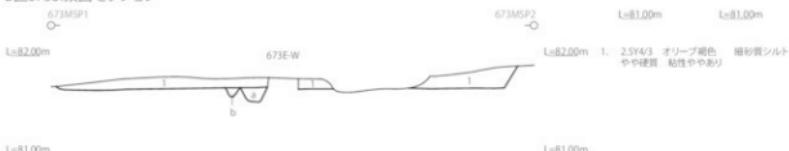
図 2-33 B 区 673・678Si ほか遺構平面図 (1:50)

B区673SI南北セクション

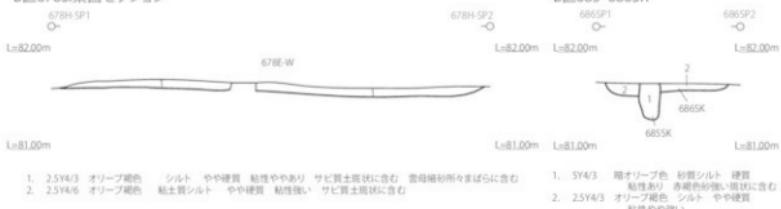


- 1. SY3/2 オリーブ褐色 シルト やや軟質 粘性あり 所々長石沈状に含む
- a. 2SY4/2 増灰褐色 細砂質シルト やや軟質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
- b. 3SY4/2 増灰褐色 細砂質シルト やや軟質 粘性ややあり
- c. 2SY4/3 オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
- d. 3SY3/2 灰色オーブ色 シルト 軟質 粘性あり 灰色粘質土・サビ質土斑状に含む
- e. 3SY3/3 灰色オーブ色 シルト やや硬質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
- f. 3SY3/3 灰色オーブ色 シルト やや硬質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む

B区673SI東西セクション



B区678SI東西セクション



B区678SI南北セクション



B区685+686SK



B区693・694・684SK



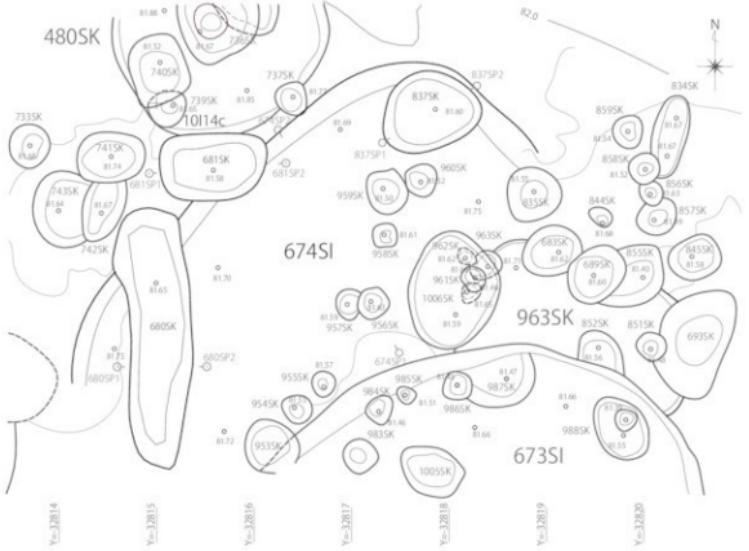
B区693・694・684SK

B区693・694・684SK

- 1. 2SY4/3 オリーブ褐色 シルト 硬質 粘性ややあり サビ色地に弱い斑状に含む
- 2. 2SY4/3 オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性やや強め
- 1. 5SY3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性あり 明褐色土外側に弱い斑状に含む
- 2. 5SY3/1 オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性やや強め
- 694SK
- 1. 5SY3/2 オリーブ褐色 粘土質シルト 軟質 粘性やや強め
- 2. 5SY4/2 反オリーブ色 シルト やや軟質 粘性やや強め
- 2. 7SY4/2 反オリーブ色 細砂質シルト やや硬質 粘性ややあり

図 2-34 B 区 673・678SI ほか土層断面図 (1:50)

Xe-118964

**B区674SI**

L=81.00m

- a. SY4/3 オリーブ緑色 シルト 硬質 黏性ややあり 褐色土少し含む 長石斑状に含む
1. 2.5Y3/3 黄褐色 シルト やや硬質 黏性あり
2. 2.5Y3/2 オリーブ緑色 粘土質シルト やや硬質 黏性あり
3. 10Y4/2 オリーブ緑色 粘土質シルト 硬質 黏性あり
3. SY4/2 暗オリーブ色 粘土質シルト 硬質 黏性あり

B区680SK

L=81.00m L=81.00m L=81.00m L=81.00m

1. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや硬質 黏性ややあり 黄褐色土斑状に含む

B区681SK

L=81.00m L=81.00m

1. SY2/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 黏性あり 褐色土質少し含む
2. SY3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト やや硬質
SP1. 2.5Y4/3 オリーブ黒色 粘土質シルト 硬質 黏性ややあり

B区837SK

L=81.00m L=81.00m

1. SP3/1 墓青色 粘土質シルト やや軟質 黏性やや強い
2. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト やや硬質 黏性やや強い
サビ色粘土質土はらばに含む

図 2-35 B 区 674SI ほか遺構平面図・土層断面図 (1:50)

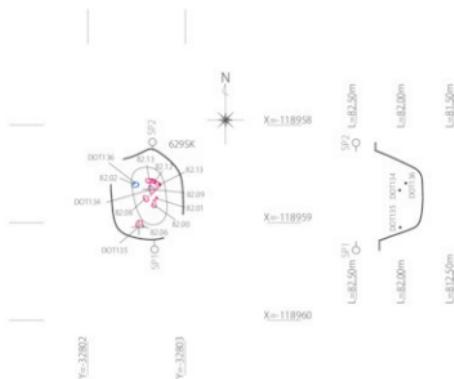


図 2-36 B 区 679SK 遺物出土状態図 (1:50)

2期は第2面の遺構群である。1期同様、調査区南半部で竪穴建物の可能性を有する平面長方形の落ち込みを13基確認した。遺構にともなう明確な遺物がないために時期は明らかではないが、A区の遺構にともなわない遺物などからみて、弥生時代中期後葉頃ではないかと推定している。

3期に関しては前述のごとく第1面が相当し、おおむね7世紀後半～11世紀である。

1期 1期の遺構群は前述のように平面円形ないしは梢円形の竪穴状遺構12基と多数の土坑である。

竪穴状遺構で最大のものは671SIで直径約7mを測る。

次いで673SIが大きく、長軸6.4mで短軸が4.8m。

以下、678SIが長軸5.1mで短軸が3.5m。672SIが長軸4.8mで短軸が約4m。600・675・676SIがほぼ直径3.5mである。

このほか、679SKなどから当該期の遺物が出土している。

2期 2期の遺構は3期と同様、調査区南半部でのみ確認している。

平面が長方形の竪穴状遺構群13基と若干の土坑群である。前述のごとく3期の遺構検出面が本来の遺構面よりも低すぎたために、古代とほば同じ面で遺構検出をおこなっている。

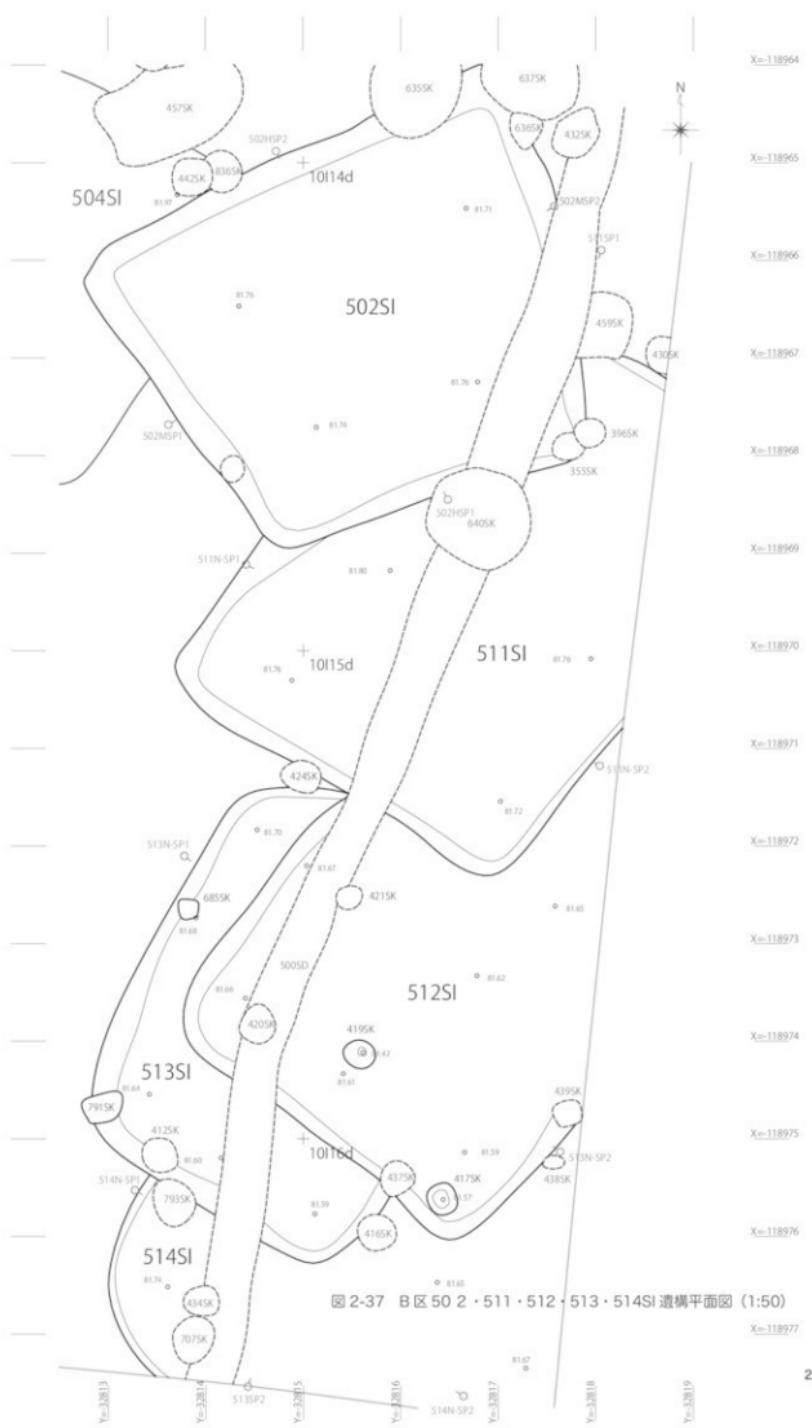
竪穴状遺構で最も規模が大きいのは506SIで、長辺7.5mで短辺が5m以上。

次いで504・509SIで長辺が6m強。他はいずれも長辺が約5m。

いずれも周溝・主柱穴・が跡がないために、竪穴建物とは断定できないうえ、明確にともなう遺物もない。

3期 3期の遺構は掘立柱建物の柱穴とおぼしき土坑を調査区全域で確認している。しかしこれとても、遺物包含層と誤認して整地層を主として西側で1m以上も掘り下げた状態で検出したものであることから、本来であればこの数倍の柱穴が存在していたと思われる。

このうち、調査段階で1棟の建物と確まるることを認識していたのは650・651・1013SBである。



B区502SI東西セクション

L=83.00m 502MSP1
O- 502MSP2 L=83.00m



B区502SI南北セクション

L=83.00m 502NSP1
O- 502NSP2 L=83.00m



1.	100/3/2 黒褐色	シルト	やや硬質 粘性ややあり 全体に長石や多い 漬化物わずかに含む
2.	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	粘性あり 黄褐色の細い粒土を含む
3.	2.5Y3/3 墓モーリーズ褐色	シルト	やや硬質 粘性ややあり 黄褐色を含む
b.	2.5Y4/4 オリーブ褐色	粗砂質シルト	粘性ややあり 黄褐色シルト質強めに含む
A.	5Y5/2 オリーブ褐色	シルト	やや硬質 粘性ややあり
B.	2.5Y4/4 オリーブ褐色	粗砂質シルト	硬質 粘性ややあり

B区511・512・513・514SI

L=83.00m 511SP1
O- L=83.00m

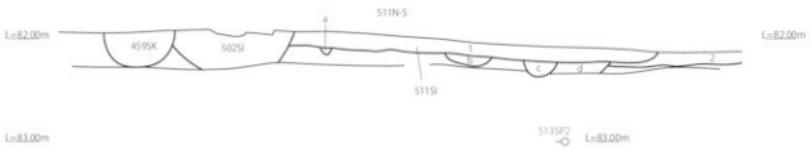


図 2-38 B 区 502・511・512・513・514SI 土層断面図 -1 (1:50)



- L=81.00m
1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性ややあり 全体に粗粒やや多い
 2. 2.5Y3/3 嗜オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性ややあり 全体に粗粒やや多く所々集積
 3. 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性ややあり 全体に粗粒やや多く含む
 4. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 粘性ややあり 嗜褐色土斑状に含む 全体に半砂含む
- a. 5Y4/2 底オリーブ色 細粒質シルト
粘性やや多く含む
- b. 5Y2/2 嗜褐色土斑状
 - c. 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性ややり
 - d. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや硬質 粘性ややあり 嗜褐色土斑状に含む
 - e. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性ややあり

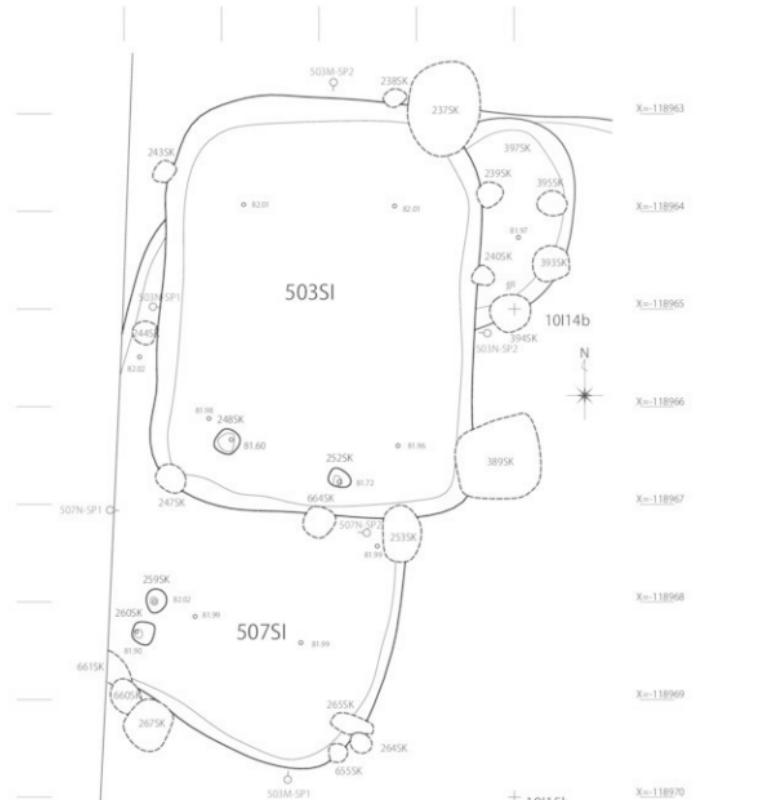
図 2-39 B区 511・512・513・514SI 土層断面図 -2 (1:50)

ただし 650SB と 1013SB は、5 ないしは 6×3 間の南北に長い 1 棟の掘立柱建物と認識していた。しかし調査期間中に受けた有識者のご教示や、柱間・柱筋の方針が北から 3 間分とそれ以南で異なることから、結果的には 650SB は 3×3 間の総柱建物、そして 2×2 間以上の総柱建物 1013SB に分離する方が整合性が高いとの結論に達した。

650SB は桁行方向の南北が 4.8m (16 尺) で、軸線は北で約 8°西に振れる。柱の芯々間は 1.6m で約 5 尺。梁行 (東西) 方向は北の側柱で 3.6m (12 尺)、南の側柱で推定 3.8m (12.7 尺) と、南に向かってわずかに広がる。北側柱列での柱

芯々間は 4 尺である。検出できた 14 基の柱穴はいずれも掘り方の一辺が 1m 前後の隅丸形を呈する。このうち 599・609SK 以外は柱痕跡を遺しており、その径は 20~30cm 程度。北西の隅柱 (633SK) などは再掘削による柱掘り方であり、部分的に根継ぎなどの補修を受けている可能性がある。

この 650SB の南側柱列の西から 3 番目の柱穴 (433SK) は掘り方底面に柱痕跡を遺すものの、埋土は均質で柱そのものは抜き取られていた。そして、柱を抜き取った後に埋めた土の中から完形の須恵器短頸壺が出土した。これは本遺跡



B区503・507SI

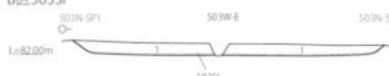


1. 10Y92/2 黄褐色
2. 5Y3/2 オリーブ色
シルト
シルト
軟弱 黏性 ややあり 剥離土・褐色粘土質土やや強い斑状に含む
やや軟弱 黏性ややあり 剥離土質状に含む

L=81.00m

L=81.00m

B区503SI



L=81.00m

L=81.00m

B区507SI



図 2-40 B 区 503・507SI 遺構平面図・土層断面図 (1:50)

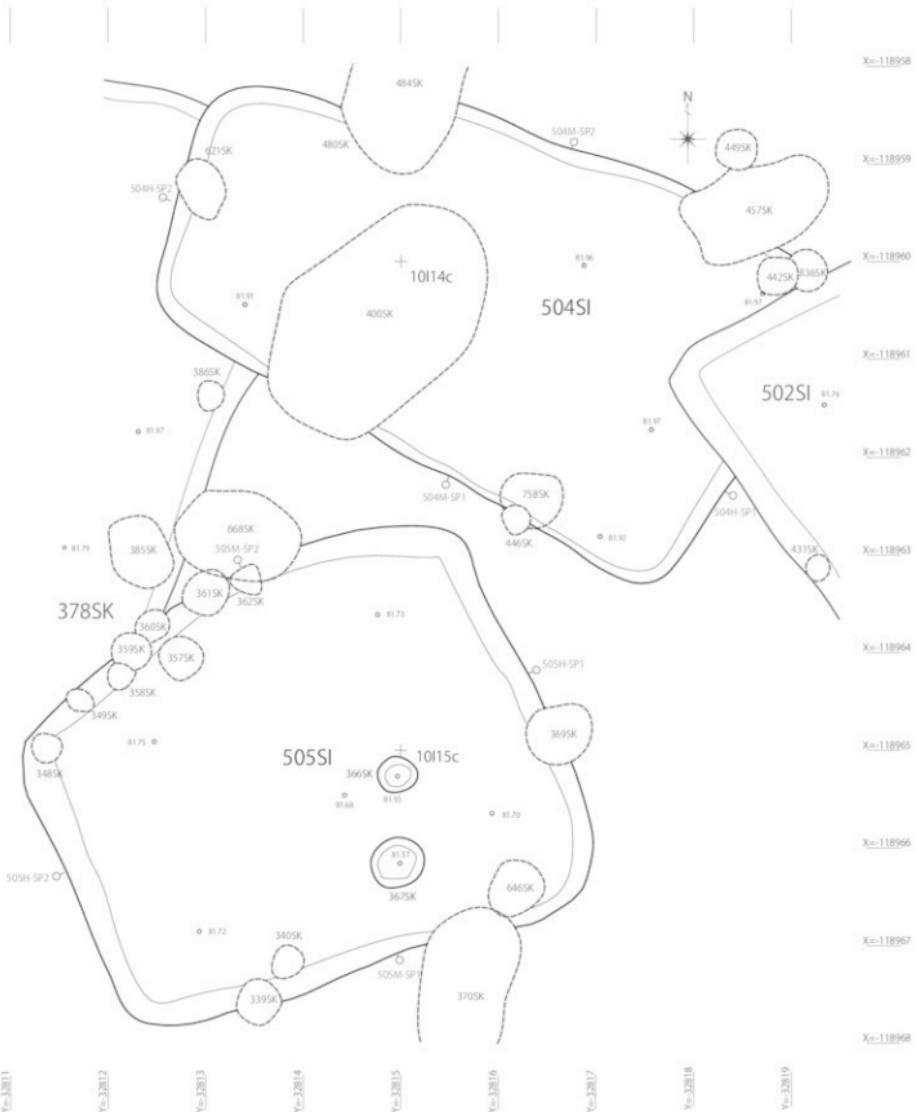
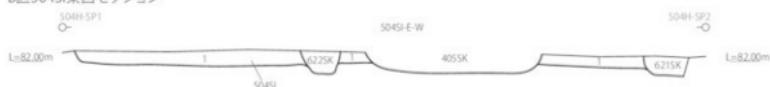


図 2-41 B 区 504・505SI 遺構平面図 (1:50)

B区504SI東西セクション



L=81.00m

L=81.00m

1. 2SY3/2 黒褐色 シルト やや硬質 粘性あり 黒色土・褐色粘質土やや強い斑状に含む

B区504SI南北セクション



L=81.00m

L=81.00m

B区505SI東西セクション



L=81.00m

L=81.00m

1. 2SY3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性ややあり 黑色土所々やや強い斑状に含む 長石洗状に含む

B区505SI南北セクション



L=81.00m

L=81.00m

図 2-42 B 区 504・505SI 土層断面図 (1:50)

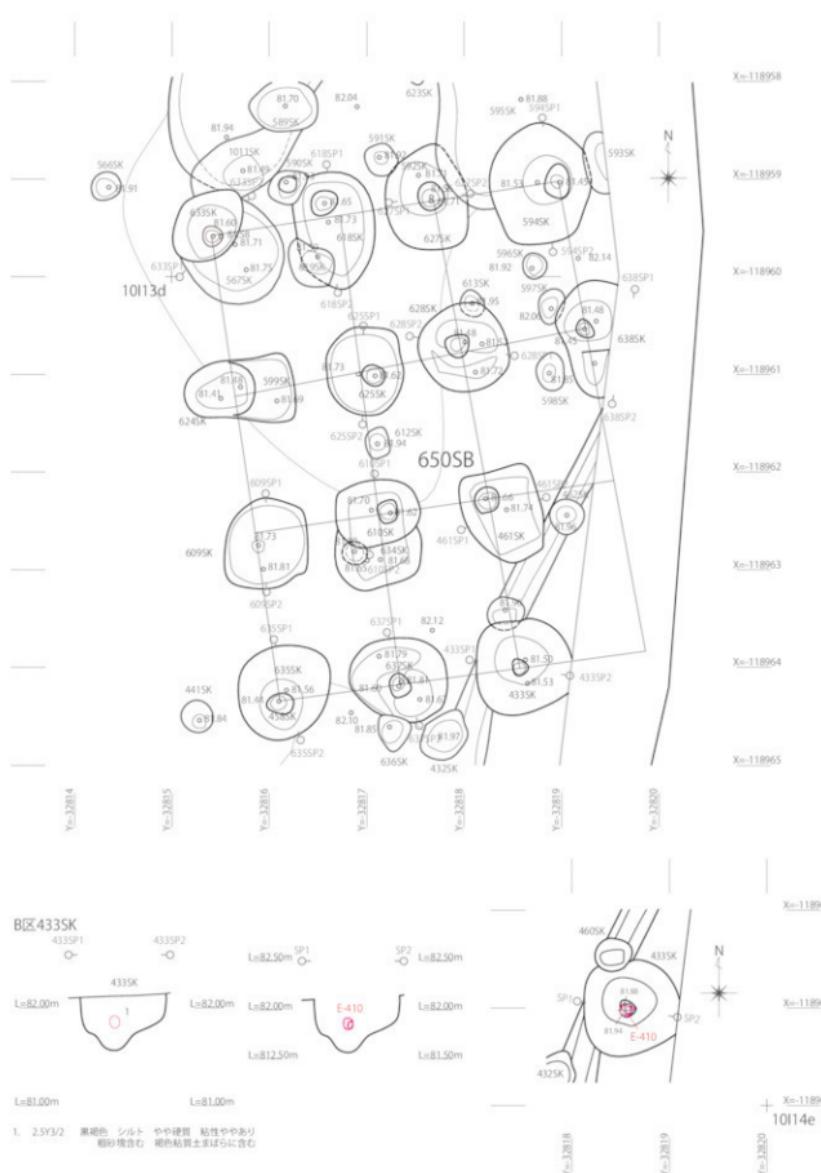


図 2-43 B 区 650SB 遺構平面図・柱穴 433SK 遺物出土状態図 (1:50)

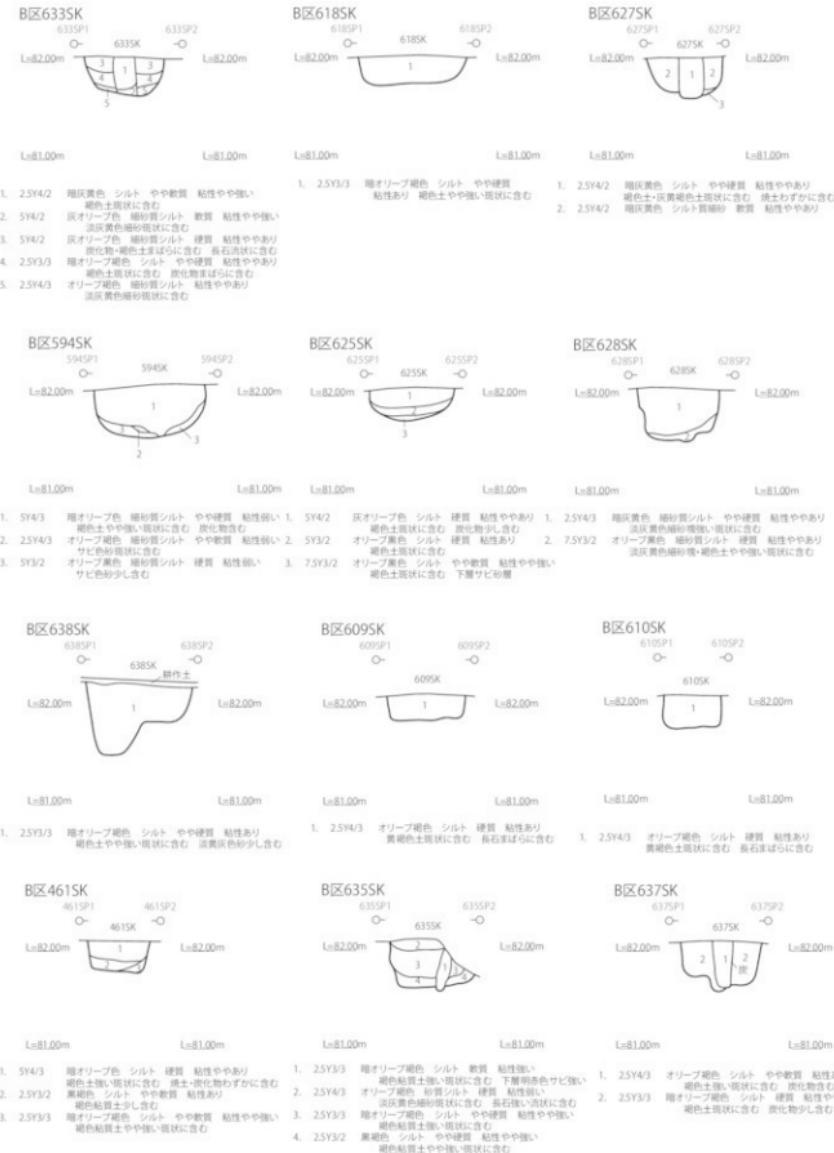
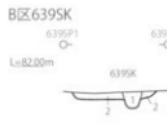
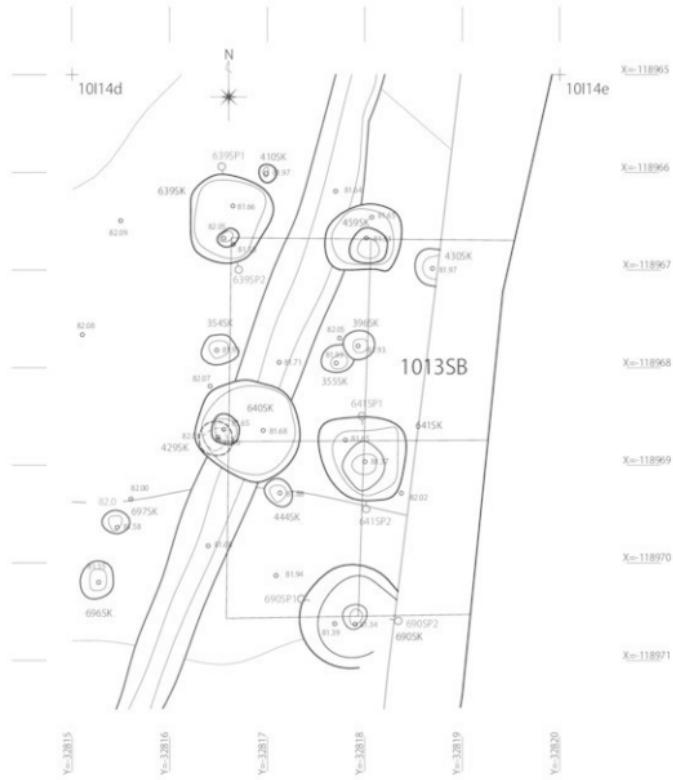
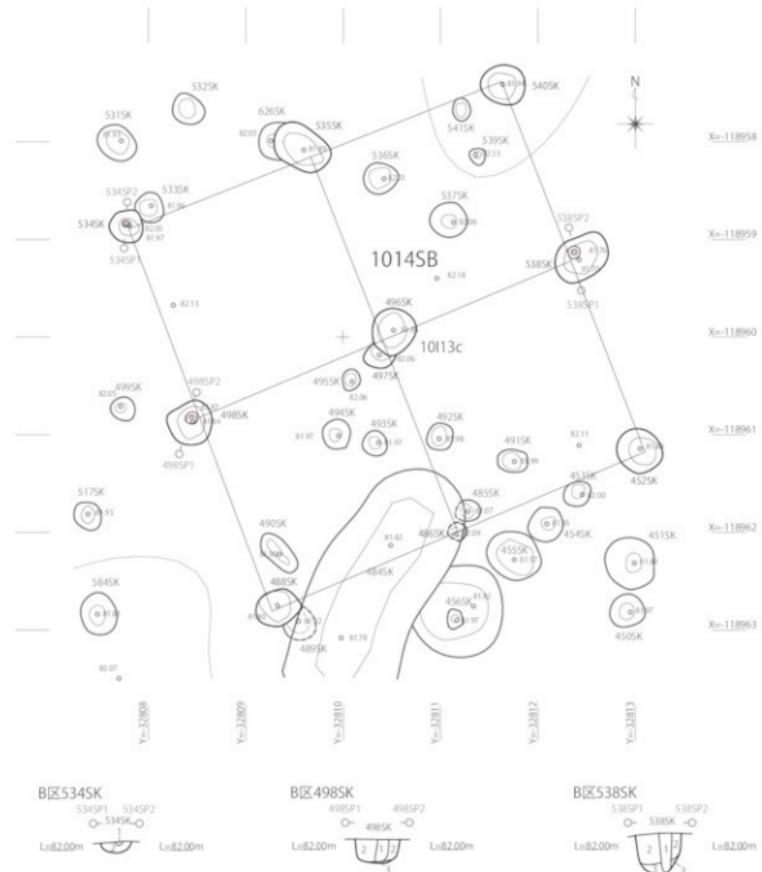


図 2-44 B 区 650SB 柱穴土層断面図 (1:50)



- | | | |
|---|---|---|
| 1. SY3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト 滅質 粘性強い
長石混状に含む | 1. 2SY3/3 暗オリーブ褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む | 1. SY4/3 暗オリーブ色 粘土質シルト 粘性やや強い
褐色土質に含む |
| 2. 2SY3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性弱い | 2. 7SY4/2 暗オリーブ色 粘土質シルト 硬質 粘性強い
褐色土斑状に含む | 2. 10Y4/2 オリーブ黒色 粘土質シルト 硬質 粘性やや強い
褐色粘土少し含む |
| 3. SY3/1 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む | 3. SY3/1 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む | 3. SY3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト 硬質 粘性強い |

図 2-45 B 区 1013SB 遺構平面図・柱穴土層断面図 (1:50)



- | L=81.00m | L=81.00m | L=81.00m | L=81.00m | L=81.00m | L=81.00m |
|--|----------|---|----------|---|----------|
| 1. 23Y4/4 オリーブ緑色 シルト 粘性なし
2. 31Y3/ 墓オーブル色 シルト 粘性やや強い
褐色粘質土含む | | 1. 10Y9/3/2 黒褐色 シルト やや軟質 粘性あり
2. 2.5Y3/2 黑褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
3. 2.5Y5/6 黑褐色 カーボン酸化物少しある
褐色粘質土斑状に含む | | 1. 2.5Y3/3 墓オーブル緑色 シルト やや軟質
粘性ややあり 黏土まばらに含む
2. 2.5Y4/3 オリーブ緑色 シルト 硬質
粘性あり 褐色土・泥土まばらに含む
3. 2.5Y3/2 黑褐色 シルト 硬質
粘性やや強い 褐色土斑状に含む | |

図 2-46 B 区 1014SB 遺構平面図・柱穴土層断面図 (1:50)

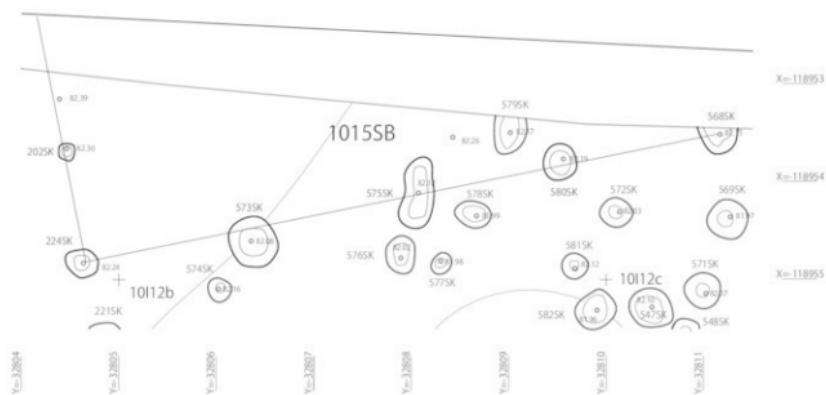


図 2-47 B 区 1015SB 遺構平面図 (1:50)

でも数少ない猿投窓産で、城ヶ谷和広氏より鳴海32号窓式期に属するとのご教示を得たことから、650SBそのものは岩崎25号窓式期（8世紀前半頃）に機能していたと考えて差し支えなかろう。

同じく柱掘り方の一辺が約1mの大型総柱建物1013SBは、650SBより約2m南に西側の柱筋を揃えて南に並び建つ。建物の軸線は650SBと異なり、ほぼ真北である。検出面が650SBよりも低いことから全体に遺存状況が悪く、南西隅柱は確認できなかった。もう一間分南に伸びる可能性も考えられるが、現状においてその痕跡はない。また、南北で3.9m(13尺)で639SKと640SKでの柱間寸法は1.9m(約6尺)。東西の柱間寸法は1.5m(5尺)で、650SBとは異なる。639・690SKにて確認できた柱の径は約20cm。

この650・1013SBはいずれも一辺が約1mの巨大な隅丸方形の柱掘り方をもつという点で、後述する他の掘立柱建物とは大きく異なっている。さらに総柱建物であることを鑑みれば、きわめて

公的な性格を帯びた倉庫群の一部と考えるのが自然であろう。

なお、この2棟の大型倉庫はいずれも南北溝500SDを切っている。500SDは時期を決め得る遺物はないが、A区の110SD(101SD-B)につながる可能性が高いとみている。

651SBはB区南半部の中央に位置する南北棟建物で、南端は調査区外に伸びる。桁行は5間(9m)以上で梁行は3間(6m)。ただし桁行方向の側柱列には1つの掘り方に2箇所の柱を建てるという大壁(壁建ち)建物に近い工法をとる。

柱掘り方の平面形は円形ないし楕円形でサイズは不統一。柱の径は10cm程度。時期を決める手だては皆無だが、A区の100SBに建物の軸線が近いことと、100SBの南端と651SBの北端の柱筋がほぼ並ぶことから、ここでは100SBと同じく3-4期の最終末と想定しておく。

他は全て調査終了後に遺構図上から復元した掘立柱建物である。

図 2-48 B 区 651・1016SB 遺構平面図 (1:50)





図2-49 B区651・1016SB柱穴土層断面図(1:50)

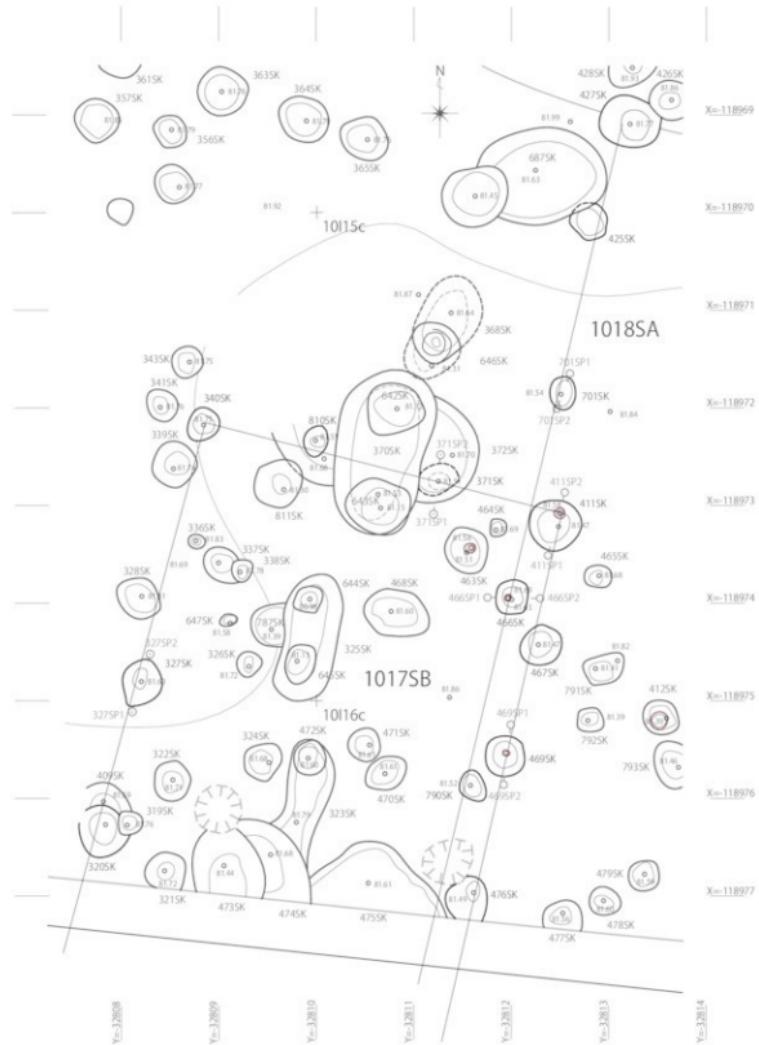


图 2-50 B 区 1017SB · 1018SA 遗构平面图 (1:50)

1014SB は調査
区中央やや北よ
りに位置する 2×
2 間 (4.2×4.1m)
の総柱建物。建物
の軸線は北で 21°
西に振れる。柱掘
り方は直径 30 ~
50cm の円形ない
し梢円形で、柱の
径は 15cm 程度。

この 1014SB
と似た軸線の建
物が調査区北端
の 1015SB。4 間
(7m) 以上 × 2 間
(2m) 以上で、柱
掘り方は直径 20
~ 50cm と不揃
い。この 2 棟に
関しては時期の決
め手に欠けるが、
西に軸線が振れる
という点で A 区
の 036SI に近い
時期 (3-1 期最終
末) の可能性があ
る。

1016SB は調査
区南西隅の南北棟
建物。5×3 間 (6.2×2.7m) 以上で柱間は不揃い。

柱掘り方は直径 20 ~ 50cm の円形でばらつく。
軸線は北で 11° 東に振れる。

1017SB は調査区中央南端の南北棟建物で、軸
線は 1016SB に近く北で 15° 東に振れる。柱間
は不揃いな 3 間以上 × 3 間 (4.8m 以上 × 3.8m)。
柱掘り方は直径 30 ~ 55cm の円形で、柱の径は
約 10cm。

1018SA もほぼ同じ軸線の柵列で、6 間 (8.3m)
以上。柱掘り方は直径 30 ~ 60cm の円形で、柱



図 2-51 B 区 1017SB・1018SA 柱穴土層断面図 (1:50)

の径は 7cm 程度。

この 1016・1017SB・1018SA はおおむね
500SD と軸線が合うことから、3-2 期に想定し
ておく。

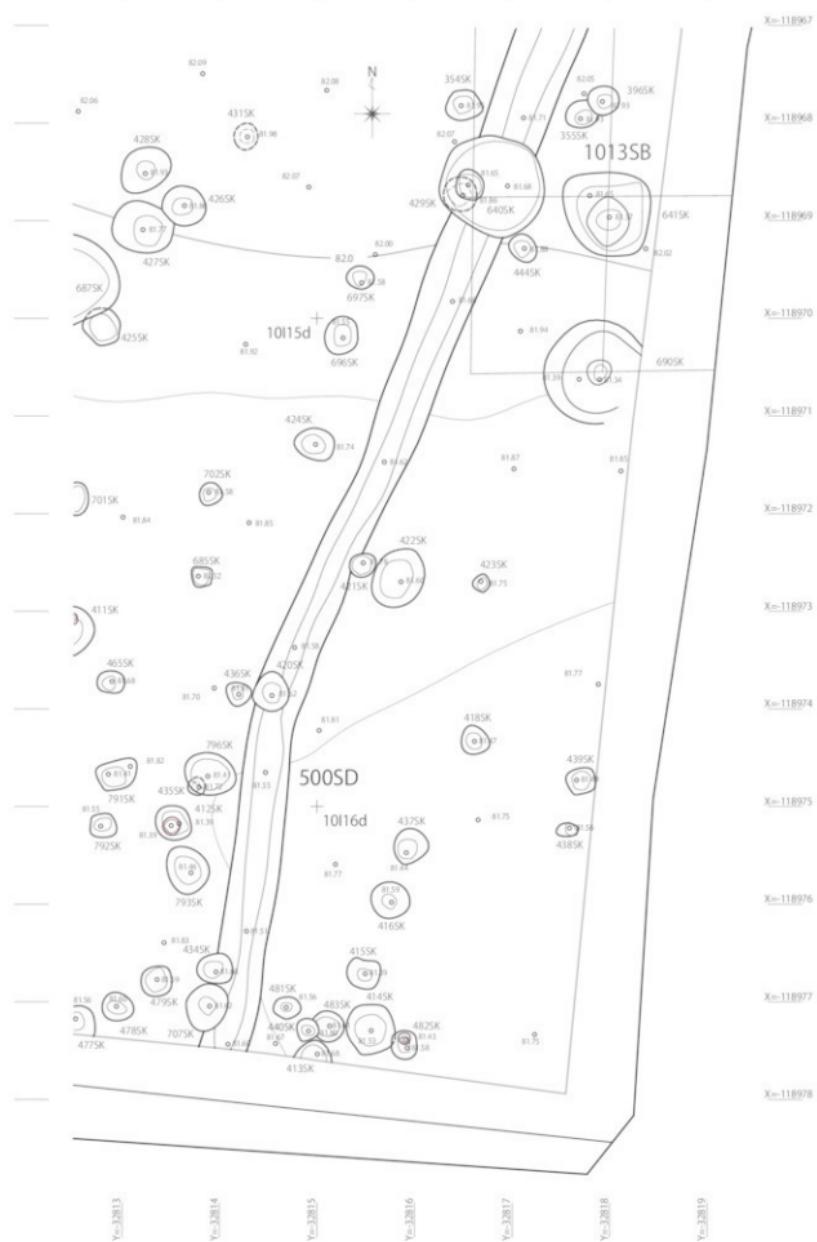


図 2-52 B 区 500SD 遺構平面図 (1:50)

第3章 遺物

1. 土器・土製品

(1) 1期の土器・土製品

今回の石岸遺跡からは、1500点ほどの縄文土器が出土した。その中で、図化を行ったものは土器345点・土製品1点である。土器345点の中でも、接合できなかった同一個体を別個で図化したものもあるため、最小個体数はより少なくなると思われる。

図版では、出土調査区や掘削順および遺構出土ごとに提示した。1～125は08B区で検出2段階の包含層掘削および縄文時代に帰属する遺構内から出土した資料、126～334は検出1段階までの包含層掘削および古代以降に帰属する遺構内から出土した資料、335～345は08A区から出土した資料である。しかし、この報告文では、紙面の都合上、分類した項目順に報告する。

縄文土器は、おおむね後期中葉の八王子式を主体として、中期後半から後期末まで確認できた。これらは、時期・器種・種別、および部位などから、第1群から10群に分けることができる。

()内の番号は、遺物番号を示す。

第1群 (109・113～115・119・216・223・257)

縄文時代中期に属するものを一括した。109は内湾する形状の口縁部片で、半截竹管による施文・区画のなかに縄文(LRか?)が施され、外端部には区画に沿って楔状の刺突が加わっている。中期前葉の北裏CI式に当たるものと思われる。113～115・223も半截竹管による弧状沈線区画の中に縄文LRが施されているもので、119は半截竹管のなかに楔状の刺突が加わるものである。これらも北裏CI式に相当するか。216は屈折する口縁部に2条の棒状工具による連続刺突

文を挟み、2段に爪形の刺突列文が施されている。中期中葉の北屋敷式に相当するものと考えられる。

257はキャリバー形の器形を呈するもので、外面に粘土紐の貼付が認められる。

第2群

後期中葉の堀之内2式に相当するものである。A～d類にさらに分類できる。

第2群a類 (4・27・128・135・138・177・290・320) 屈折した口縁端部に沈線や縄文が施される一群をまとめた。4・27・128は縄文LRに2条の短沈線が施されている。138は胴部への屈曲部に沈線内に縄文LRが施され、さらに連続する短沈線が入れられたものである。

第2群b類 (150・274・282・309・330・342) 8の字の貼付文が施されているものである。282・274・382は器形の屈折部分に貼り付けが認められるもの、150は口縁部内面側に貼り付けが認められるものである。貼付の上に縄文LRが施されているものが多い。

第2群c類 (321・322) 沈線区画内に縄文LRが施されているものである。同一個体と考えられる。

第3群

後期中葉八王子式に属する深鉢形土器で、さらにa～f群に細分される。

第3群a類 屈折縁深鉢(百瀬2013) 口縁部で、さらに7類に細別できる。

第3群 a-1 類 (2・8・34・36・44・51・67・68・103・133・134・173・176・179・218・258・259・308・312・327) 波状を呈する器形で、3本沈線内に縄文が充填されているものである。179のみ RL、ほかはすべて LR である。

第3群 a-2 類 (45・50・116・117・292・323) 波状を呈する器形で、2本沈線区画内に縄文が充填されているものである。117は RL であるが、ほかは LR が圧倒的に多い。

第3群 a-3 類 (35・52・84・129・174・175・178・181・217・224～226・287・302・314・317・329) 平縁を呈する器形である。文様は3本沈線内に縄文 LR が充填されているものが多い。

第3群 a-4 類 (79・229・279) 装飾のある波頂部で、8の字意匠が明瞭に認められるもの。8の上部のみ貼付を行うことによって、立体的効果を出したものと思われる。縄文 LR が施される。

第3群 a-5 類 (126・127・319) 8の字の立体的装飾がなくなり、上下二段の刺突とそれを囲むような連続弧線が施されているもの。弧線は3条で、2条の横沈線で波頂部をつなぐ。縄文 LR が施される。

第3群 a-6 類 (15) 口縁端部上面に連続刺突列が施されるものである。外面に1条の沈線が巡る。鉢あるいは壺・注口土器かもしれない。

第3群 a-7 類 (180・182) その他の文様などを集めた。180は波頂部表の上端に沿って連続刺突と沈線が施され、体部側には2条沈線間に縄文 LR が充填されている。波頂部内面や上面にも連続刺突や縄文が施される。182は波頂部に沿って2条沈線と連続刺突、縦方向に3本沈線内に縄文 LR が施されている。

第3群 b 類 (85・130～132・219・275・307・315・326) 平縁直立深鉢（百瀬2013）口縁部である。85・275は2本沈線間に縄文 LR が充填されているものあり、その他は3本沈線内に縄文が施されているものある。

第3群 c 類 (38・100・153・227・246・278・316) 口縁部から頭部には文様がなく、胸部に施文のある外反縁無文鉢（百瀬2013）口縁部である。

第3群 d 類 (264) 器面表裏は幅狭いミガキ様の調整痕を残す無文深鉢で、口縁端部上端に縄文 LR が施されているものである。

第3群 e 類 特殊な深鉢形土器で異系統土器などを含む

第3群 e-1 類 (74・75) 緩やかな波状を呈する器形で、口縁端部内面に棒状工具による連続刺突が施され、胸部には多重する沈線内に斜方向の短沈線が施されている。中の沈線は相反し連下する弧状の位置で途切れている。

第3群 e-2 類 (169) 3単位と考えられる突起部を有する平縁直立深鉢である。端部上面にはヘラ状工具による連続する刻みが施され、口縁直下には同一工具による斜方向の短沈線を充填する横沈線が認められる。胸部には、3条の弧線が横に展開し、間には櫛状の細密な条線が施される。口縁部に内面には1条の隆帯が横走する。

第3群 e-3 類 (14・149) 内側に屈折する波状を呈する器形で、器面表のみならず裏にも多条の沈線が施されているものである。

第3群 e-4 類 (202・203・283) 平縁直立深鉢の突起部である。202は加曾利B1式に相当するものと考えられる。

第3群 e-5類 (66・243) その他の突起状のものを集めた。

第3群 f類 有文深鉢土器胴部片を集めた。部位と施文により、4類に分類できる。

第3群 f-1類 (28・29・31・53・64・76・83・86・91・92・101・102・105・120～122・141～145・171・172・183・185・188・189・231・276・294・296・301・304・337・338) 外に直立する部分で、3本沈線内に繩文が施されているものである。143は溝巻き状の文様をなし、古相を示すものか。

第3群 f-2類 (10・11・37・55・73・146・230・277・289・298・303・324) 外に直立する部分で、2本沈線内に繩文が充填されているものである。繩文はLRが多い。

第3群 f-3類 (5～7・12・30・46・48・49・54・77・81・97・107・136・139・140・147・208・232～236・262・263・270・331) 内湾および湾曲する部分で、3本沈線内に繩文が施されているものである。5は鋭角に屈折した区画帯を持つもので、古層を示すものか。

第3群 f-4類 (13・65・69・82・123・186・245) 内湾および湾曲する部分で、沈線のみが施されているものである。沈線は3本一単位が多い。245は上下二段にのの字状の沈線が付くもので、鉢形になるかもしれない。

第4群

後期中葉の西北出式以降の深鉢である。以下のa～d類に細分できる。

第4群 a類 (228) 円柱状の装飾が付く波状口縁部で、上端および外面に沈線と繩文Iが施される。

第4群 b類 (335) 屈曲部分の口縁部片で、貼付粘土の両脇に沈線区画が施され、繩文が充填されている。

第4群 c類 (137) 口縁屈曲部に横1条に沈線が施されているものである。

第4群 d類 (56・57・237) 細い貼付隆帯が施されるものである。

第5群

後期後葉の凹線文土器である。以下のa・b類に細分できる。

第5群 a類 (148・256・299) 凹線内面にナデ調整が施され、凹線が浅く幅広になっているものである。元住吉山II式に比定されるものである。

第5群 b類 (58・59・328) 凹線は工具による線引きのままとなっているもので、宮窓式に比定されるものである。

第6群 (24～26)

後期末の伊川津式に属するもので、08B区629SKで良好な状態で出土した。24は深鉢口縁部から胸部上半片で、ほぼ直立する器形で、口縁端部上面は面が形成される。器表面には縦方向、裏には横方向に卷貝条痕が施されている。器表面には口縁に沿って3条、胸部上半に2条のいわゆる櫛状の沈線が施されている。25は直立する器形の深鉢口縁部、26も深鉢口縁部で、器表面裏に卷貝条痕が認められる。27はくの字屈曲する深鉢口縁部片で、表側端部に繩文LRののち、2条の短沈線が施されている。

第7群

無文の深鉢形土器である。器形などによってa～d類に分類できる。いずれも、器面にはミガキ様の幅狭い調整痕が残されており、器面調整の様相としては、第3群のそれと同様である。

第7類a類(184・261・265) 口縁部が内側に屈曲するもの。

第7類b類(1・47・78・89・95・99・156・168・170・190～197・220・221・239～242・266～268・291・300・313・325・339・340・341) 口縁部が直線的に開くもの。

第7群c類(95・99・239・241・266・291)
口縁部が外反するもの。一部は第3群c類のものかもしれない。

第7群d類(16～18) 胸部片である。

第8群

鉢および浅鉢形土器である。以下のa～g類に分類できる。

第8類a類(72・260) 口縁部が屈折する鉢である。

第8類b類(310・318・336) 3本沈線に繩文が施されるもので、第3群a類と同類の文様が施されるもの。

第8類c類(9・110・152・281) 2本沈線内に繩文が充填されるもので、第3群b類と同類の文様が施されるもの。

第8類d類(39・154・155・293) 器面は丁寧にミガキがかけられており、上端部には連続押圧が、内面には隆帯および連続刺突列が施されているものである。加曾利B1式の精製浅鉢に相当する。

第8類e類(87・118・201・244・247・297) d類同様に内面に沈線などの文様が施されているものである。87は横沈線に鍵の手に上下に展開する文様が付く。これらも加曾利B1式の精製浅鉢に相当するか。

第8類f類(20・60・111・151・187) 沈線などが器面外面に施されるものである。

第8類g類(21・40・98・157・158・198～200・238) 無文のものを一括する。238は口縁端部内面に横方向の沈線が巡る。

第9群

壺および注口土器である。部位などによって、以下のa～cに分類した。

第9群a-1類(90・106・124・205・207・248～250・269・273・280・284～286・288・343) 口縁部および胸部片である。

第9群a-2類(19・112・159・160・204) 口縁・頸部につく耳状の装飾部を一括した。

第9群b類(32・41・62・63・96・125・161～163・206・222・251～253) 注口部を一括する。注口部の法量にはさまざまな段階が認められ、32・125のような小型のものから、62・162・163のような大型のものまである。

第10群(3・22・23・33・42・43・61・70・71・80・88・93・94・104・108・164～167・209～215・254・255・271・272・295・305・306・311・332～334・344・345) 底部の中で、圧痕が認められるものをほぼすべて図化した。圧痕の種類は、木葉痕と編組製品圧痕とに、大きく二分される。

木葉痕(23・33・209・210・215・311・345)

編組製品圧痕 これは、編組技術の様相によって、さらに分類が可能である。

四つ目あるいはゴザ目(3・42・43・61・71・108・164・165・211・255・295・305) 42

が3本越え・3本くぐり・1本送りである以外は、2本越え・2本くぐり・1本送りが圧倒的に多い。

網代(88・93・104・212・271・272・306・332) 88・212・271・272・306は2本越え・2本くぐり・1本送りで、93・332は3本越え・3本くぐり・1本送りである。

詳細不明(22・70・94・166・167・231・214・254・333・334・344) 詳細不明としたものは、圧痕の状態が不鮮明なために編組技術を追うことができないことを示す。80は横に対し縦が斜めに絡む、網目編みのようにも見えるが、断言はできない。

今回報告する土器群は、後期中葉八王子式を中心とする土器群であり、第10群で報告した資料の大多数は八王子式の資料と考えて差し支えない。

土偶(346)

346は、分銅形で板状を呈する八王子タイプの土偶である。現存で、長さ5.4cm・幅3.8cm・厚さ1.2cmを測る。左側より右側の厚さがやや厚い。表面は、中央に盲孔のある短沈線が施されるほかに、両端の縁から中央に向かって斜方向に2本一単位の沈線が施される。裏面には、上下両端の弧線のはかに、器形に沿って2条一単位の沈線がある。また、裏面側下端中央および上端左上には、同一工具による2条一単位の短沈線が施されている。(川添和曉)

(2) 3期の土器・土製品

3期の土器は遺構にともなうものが比較的少なく、大半がB区の厚さ0.3~0.6mにおよぶ整地層からの出土である。

前章でも記述したように、調査時点においてB区の整地層を単なる遺物包含層と誤認して掘削した後に第1面の遺構検出をおこなったために、壁面セクションで観察できる少なくとも3時期

には分かれるはずの整地層の遺物を、層位ごとに取り上げることができなかつたことをまず明記しておく。

A区 001SD(347~353) 347は須恵器杯Hの蓋で、348はその身。時期は東山50号窯式期併行。349は須恵器の壺口縁部。350~353は土師質の瓶・鍋・壺などの把手。

A区 002SD(354) 灰釉陶器椀の底部。折戸53号窯式期~東山72号窯式期併行か。

A区 003SD(355~372) 355は須恵器杯B蓋で高藏寺2号窯式期併行。356・357は須恵器杯H身。358~360は須恵器高杯の脚部。356~359は東山50号窯式期~岩崎17号窯式期併行に属する。361はハソウで7世紀前半~中葉。362は須恵器壺口縁部。363は須恵器の横瓶。364~371は土師質の把手。372は弥生時代中期の三河型台付壺の脚部。

A区 030SK(373・374) 373・374は土師質の把手。

A区 032SI(375) 375は土師器の椀か。

A区 036SI(376)

376は須恵器杯H身で東山50号窯式期新段階~岩崎17号窯式期併行。

A区 046NR(377~382) 377は須恵器杯H蓋で、378・379はその身。時期は東山50号窯式期併行。380は土師質の把手。381は土師質の壺。382は筋錘車で6世紀後半以降のものと考えられる。

A区 086SD(383~385) 383は須恵器杯H身。384は箱杯で折戸10号窯式期併行だが、遺構変遷からみて混入の可能性が高い。385は弥生時代中期の台付壺脚部。

A 区 093SD (386～389) 386 は須恵器杯 H 蓋で、388 はその身。岩崎 17 号窯式期併行に属する。387 は須恵器杯 B 蓋で高藏寺 2 号窯式期～鳴海 32 号窯式期併行。389 は土師質の把手。

A 区 095SI (390) 390 は須恵器杯 B 蓋で鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期併行。

A 区 101SD (391～398) 391・392 は須恵器杯 H 身で岩崎 17 号窯式期併行。393 は須恵器短頸壺。394 はハソウで 391 と同一地点からの出土。東山 50 号窯式期新段階～岩崎 17 号窯式期併行か。395 は土師器の小壺。396・398 は土師質の把手。397 は土師器の壺底部で高台がつく。

A 区 110SD (399・400) 399・400 ともに 7～8 世紀前半の土師器長胴壺。

B 区 205SK (401)

401 は須恵器杯 B 蓋で鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期併行。

B 区 245SK (402) 402 は製塙土器の口縁部。

B 区 250SK (403) 403 も同じく製塙土器の口縁部。

B 区 278SK (404・405) 404 は須恵器杯 H 蓋で東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行か。405 は須恵器杯 B 蓋で 8 世紀代。

B 区 320SK (406) 406 は土師質で手捏ねのミニチュア土器。

B 区 337SK (407) 407 は土師質の把手。

B 区 368SK (408) 408 は須恵器杯 H 蓋で、東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行か。

B 区 432SK (409) 409 は大口径の須恵器壺の蓋で、時期的には下がっても高藏寺 2 号窯式期まで。

B 区 433SK (410) 410 は須恵器短頸壺で、鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期古段階併行。総柱の大型掘立柱建物 650SB の柱抜き取り穴から完形で出土していることから、この建物の廃絶時期の決め手となる資料。

B 区 457SK (411) 411 は須恵器杯 H 身で岩崎 17 号窯式期併行。

B 区 500SD (412) 412 は古墳時代中期の土師器高杯。

B 区 596SK (413・414) 413 は遠江型の土師器長胴壺か。414 は 406 と同じく土師質のミニチュア土器。

B 区 616SK (415) 415 も土師質のミニチュア土器。

B 区 671SI (416) 416 は須恵器杯 H 蓋で 7 世紀後半代のもの。

B 区 包含層（整地層）(417～508) 417～420 は須恵器杯 H 蓋で、433 はその身。421～431 は須恵器杯 B 蓋。438・439・442～451 は須恵器杯 B 身。434・435・437・440・441 は須恵器杯 A。436・452～454 は須恵器碗 A。457 は須恵器盤。432・458～460 は須恵器高杯。461・462 は須恵器壺。463 は須恵器の把手。時期的には東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行 (417～420・433)、高藏寺 2 号窯式期併行 (424・434・435)、鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期併行 (429・436・437・442・452～456) のおおむね 3 時期に分かれる。

464～480 は灰釉陶器碗。481 は灰釉陶器の長頸瓶。482・484 は灰釉陶器の瓶類。483 は灰

釉陶器平瓶。485・486は灰釉陶器短頸壺。487～489は灰釉陶器の壺口縁部。灰釉陶器は黒箒14号窯式期(464～466)、黒箒90号窯式期(467～472)、折戸53号窯式期(478・479)、東山72号窯式期(475)がある。

490～496は土師器の壺。497・498は土師器の碗。499～501は土師器の高杯で、古墳時代前期～中期。502・503は土師器の瓶。504は土師器で器種不明。505は製塙土器の脚部。506・507は土製の支脚。508はフイゴの羽口。

B区 サブトレーナー(509～524) 509は須恵器杯H蓋。510は須恵器壺底部。511～514は須恵器杯B身。515は灰釉陶器碗。516は灰釉陶器瓶類。517は灰釉陶器短頸壺蓋。518は灰釉陶器で器種不明。519は土師器高杯脚部。520～523は土師器壺。524は土鍤。

A区 南壁トレーナー(525) 525は土師器内耳鍋。

A区 検出I(526～528) 526・527は山茶碗。529は土師器の碗。

A区 表土はぎ(529・530) 529は須恵器の瓶類。530は天目茶碗。

表採(531～540) 531は須恵器の高杯脚部。532は須恵器瓶類。533～536は灰釉陶器碗。537・538は土師器壺。539はフイゴの羽口。540は土鍤。(鍤上 異)

2. 石器・石製品

今回の調査で、縄文時代に属するものは1027点、古代以降に属するものが26点、合計1053点が出土した。この中で、図化提示するのは、146点である。

図面の配列は調査区分であるが、報告の記載は各器種別に行う。

(1) 縄文時代に属する遺物

打製石鎌(124) 1点のみの出土である。平基有茎鎌で、鎌身部平面形状は五角形状、断面形状もやや扁平な五角形状を呈する。中央に棱線が通らない面(裏面)側は、素材剥片の剥離面を残しているものの、表面に比べて周囲には押圧調整が多く施されている。凝灰岩製である。

部分磨製石鎌(1・62) 2点出土した。1は、凹基無茎鎌で、厚さ1.5mmと極めて薄い。剥片作出の後に研磨調整、さらに側刃部および基部に押圧剥離が施されたようであるが、最終的には鎌身部に研磨が施されたようである。出土遺構である08B区699SKは後期中葉に属する。安山岩製である。62は、無茎鎌であるが、基部形状が円基様である。全面の剥離調整後に鎌身部および一側刃と基部の一部に研磨調整が施されており、これまで知られている部分磨製石鎌とは異質である。厚さは2.9mmと1に比べて厚手である。これも安山岩製である。

石錐(2・40) 2点出土した。2は打面転位をしながら連続して作出された剥片が用いられており、剥片端部を押圧剥離で尖らせたものである。40は横長剥片の側刃一端を尖らせたものである。使用石材はとともに安山岩である。

石匙(3・125) 2点出土した。3は横長剥片を用いた横長の形状である。表面側を中心に剥離調整が施されているもので、摘部上端には礫表皮を残す。安山岩製である。125は横長剥片を用いた縱長様の形状である。これも摘部上端に礫面を残す。こちらは凝灰岩製である。

スクレイパーおよび使用痕のある剥片(4～8・36・41～43・63～67・111・126・127)

25点確認し、17点を図化した。剥片の中で、刃部と考えられる部分に剥離調整や使用痕と考えられる不連続な剥離のあるものを抽出したものが、6・8・36・41・42・63～66のように、対向す

る2辺に同様の不連続な剥離があり、一部は楔形石器あるいは二次加工のある剥片になるかもしれない。使用石材は、下呂石1点(4)・熔結凝灰岩1点(127)のほかは、23点すべて安山岩である。

楔形石器(14・46・70~72) 18点を確認し、5点を図化した。対向する2辺に階段状剥離が認められるものである。石材はすべて安山岩である。

打製石斧(19~26・37・51~54・82~90・118~120・132~134) 一部製作途上と考えられるものも含めて67点を確認し、28点を図化した。平面形状が複雑である中では短冊形が大多数を占め、23・52のように撥形も若干認められる。法量は長さ10cmを超えるものが18点あり、最長は16.5cmを測る(20)。刃部側には使用によるツブレ・線状痕あるいは摩滅があり、柄の着装痕として身部中央にも摩滅が認められるものもある。52は被熱による色調変化が認められるか。使用石材は、安山岩35点(20~23・25・26・37・51・52・54・84・85・87・89・90・119・120・134)・緑色片岩15点(53・86・118・132・133)・結晶片岩10点(24・82・88)・玄武岩2点(19)・ホルンフェルス2点・凝灰岩1点(172)・塩基性岩1点・片麻岩1点である。

刃器(27・55・56・91~95・115・121・122・135) 石製ナイフの中でも、スクレイバー・使用痕のある剥片に対して大型のものを抽出し、15点を確認した。横長剥片の縁辺(91・122)や縱長様剥片の側辺(27・92・95・115・135)に不連続な剥離が認められる。93は一側辺に階段状剥離が認められ、二次加工のある剥片かもしれない。使用石材は結晶片岩2点(94)・花こう岩1点(56)のほかはすべて安山岩である。

礫器(29・98) 4点のうち2点を図化した。29は全面に礫面を残し縁辺のみに刃部および使

用痕が認められるもの、98は全面に剥離が施されており、石核かもしれない。石材は安山岩3点(29・98)・凝灰質砂岩1点である。

大型剥片石器(28・96・97) 14点出土したうち3点を図化した。いずれも、現状では細長の形状を呈しないものの、製作の様相から打製石斧に類似するものである。使用石材は、結晶片岩4点・緑色片岩3点・安山岩7点(28・96・97)である。

剥片石核類(9~13・15~18・30・44・45・47~50・57・58・68・69・73~81・99・100・112~114・117・128~131)

剥片720点、石核32点、二次加工のある剥片81点の計833点を確認した。石材の内訳は、安山岩746点(9・10・12・13・16・44・45・50・57・58・68・69・75~80・99・100・112~114・128)、

黒曜石8点(17・18・48・49・74・130・131)、熔結凝灰岩2点(47)・下呂石1点(11)、チャート1点(15)、泥岩1点(129)である。

剥片についてみると、安山岩741点で計4884.1g、黒曜石3点で計6.6g、熔結凝灰岩1点で2.0g、下呂石1点で3.8g、チャート1点で3.8g、泥岩1点で9.3gを数えた。石核では安山岩23点で計2070.6g、黒曜石5点で計29.0g、熔結凝灰岩1点で12.4gであった。

安山岩についてのみ、剥片の法量を長さ・幅の散布図で示す(図3-1)。5.5×4cm以下で法量の集中が認められ、この法量に対応する器種が製作の中心であったことが想定される。この法量に対応する剥片石器としては、石鎚・石錐・石匙・スクレイバーなどが対応すると考えられるが、製品の出土は極めて少ない。一方、より大型の剥片に対応する器種としては打製石斧などがあり、これに関しては剥片と製品との有機的関係は自明である。

磨製石斧(123) 1点のみの出土で、欠失した

一部のみである。側面に面をとらない、非定角式である。塩基性岩製である。

打欠石鍤（136） 1点のみの出土である。扁平礫について対向する長軸端の二辺に打ち欠きが認められる。安山岩製である。

有溝石鍤（31・38・101・102） 4点出土した。いずれも長軸側を巡るような溝が施されているものである。31と102は長梢円形の円盤状、38は直方体状、101は円柱状に加工・研磨が施されている。101は石棒類との関連が強いと考えられるものである。石材は101が緑色片岩以外はすべて凝灰岩である。

磨石敲石類（32～34・59・60・103～108） 24点確認し、11点を図化した。磨痕は礫の平面中央に残されている場合が多い一方、敲打痕は平面中央に残されている場合と、礫側面に残されている場合がある。今回の出土資料では、著しい凹みがある凹石は確認できなかった。使用石材は、花こう岩12点（33・34・103・104・106・108）・凝灰岩4点（107）・塩基性岩3点（32・59）・片麻岩2点・玄武岩1点（60）・アブライト1点（105）・砂質凝灰岩1点である。

石皿台石類（35・109） 10点確認して、2点を図化した。35は長さ28cmほどを測る石材もので、中央に使用痕と考えられる敲打痕が確認できる。109一部のみの残存である。使用後に敲打などによって切断されたものと考えられる。石材は、凝灰質砂岩4点・凝灰岩2点（35）・玄武岩1点（109）・花こう岩3点である。

石棒石剣類（61・116・137） 4点確認し、3点を図化した。61・137は、剣片状になった部分である。116は基部側が残存しているものである。石材は、緑色片岩（61・137）・116は塩基性岩（116）・結晶片岩1点である。

大型石棒関連資料（110） 3点確認し、1点を図化した。図化を行わなかった2点は08B区441SK出土で、細片化したものである。110は輪切り状に切断された剣部片と考えられるもので、敲打の後に研磨調整が施されている。表面の一部には被熱による色調変化が起こっている。石材はいずれも凝灰岩である。

（2）古代以降の遺物

古代以降の石器には砥石と硯がある。

砥石（138～146） 23点出土し、8点図化した。太い直方体などの形状を呈したものが多く認められ、全面に磨痕や鉄器による細く鋭い溝状の痕跡が認められる。145は小型で扁平、一端に穿孔が認められるもので、手持砥石と考えられる。石材は、凝灰質砂岩12点（140・141・142）・凝灰岩5点（143・144・145）・片麻岩3点（139）・砂質凝灰岩1点・塩基性岩1点（138）・花こう岩1点である。

（3）石器の出土傾向について

本資料の大多数は、縄文時代後期中葉の八王子式に属する一群と考えられる。

縄文時代の石器の分布傾向を図3-3～3-7に示した。各器種について特に分布が集中する場所は、10H14a・b・c・dである。

このようにB区における縄文時代後期中葉の遺物包含層形成には著しいものがある。本調査区の包含層堆積状況は地質学的な所見とも併せて、縄文時代における遺跡形成を考える好例になるといえよう。（川添和曉）

3. 木製品

木製品はA区の003SD・038SI・046NR・086SD・093SD・101SDから出土しており、おおむね3-1～2期（7世紀後半～8世紀初頭）に属している。

A区 001SD（001～015） 001は火鑽臼で樹種はヒノキの柾目材。002は素木弓でカヤの芯

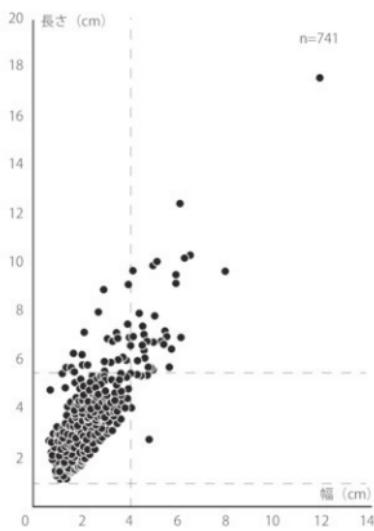


図 3-1 安山岩剥片 法量散布図

持ち材を用いる。当該期の弓は全国的にも例が少なくきわめて貴重。003～005は丸棒で樹種はいずれもヒノキ。006～008は端部に炭化した痕跡が遺るいわゆる付け木で樹種は全てヒノキ。009・010は角棒で、009がヒノキ、010はサワラを用いる。011はヒノキの薄板。012は矢板でモミ属の板目材を用いる。013～015は杭で、いずれも残存長が1mを超える長いもの。樹種は013がモミ属で、014・015はヒノキ。

A区 038SI (016) 016はヒノキの板目材による分厚い板。

A区 046NR(017～019) 017はヒノキの板。018・019は同じくヒノキの付け木。

A区 086SD (020～022) 020は穿孔板でヒノキの柾目材を用いる。021はヒノキの板で一部が炭化する。022はサワラの角棒。

A区 093SD (023) 023は厚みのあるヒノキの板目材で、一方の端部がすぼまることからクサビの可能性がある。

A区 101SD (024) 024はヒノキの角棒で、端部が炭化していることから、付け木の可能性が高い。

A区 出土遺構不明 (025) 025はヒノキの柾目板で、短辺側の上下両側に穿孔を施す。平面形はやや台形を呈するが、四方転びにはならない。いわゆる箱の側板。(桶上 異)

4. 金属製品

2点の鉄釘がある。M1は先端部を欠損しているが、残存長さ3.4cmの小型の釘で、横断面形は方形である。M2は頭部と先端部を欠損しているが、横断面形が方形であるので、鉄釘とした。残存している長径3.6cmである。

(藤山誠一)

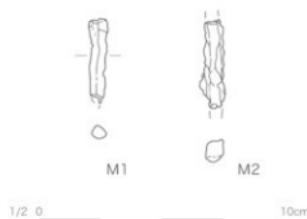


図 3-2 金属製品実測図 (1:2)

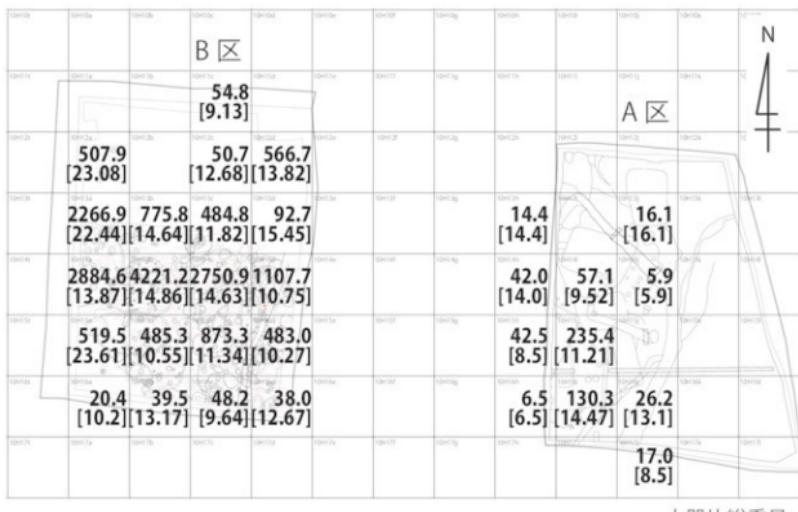
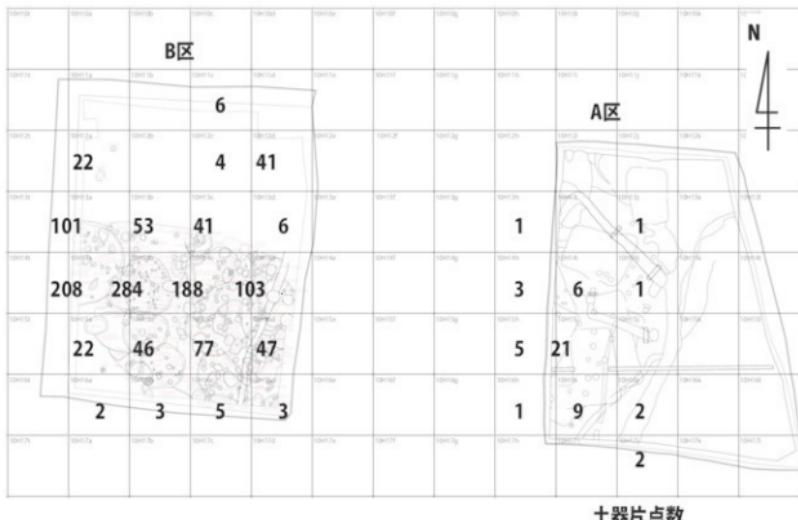
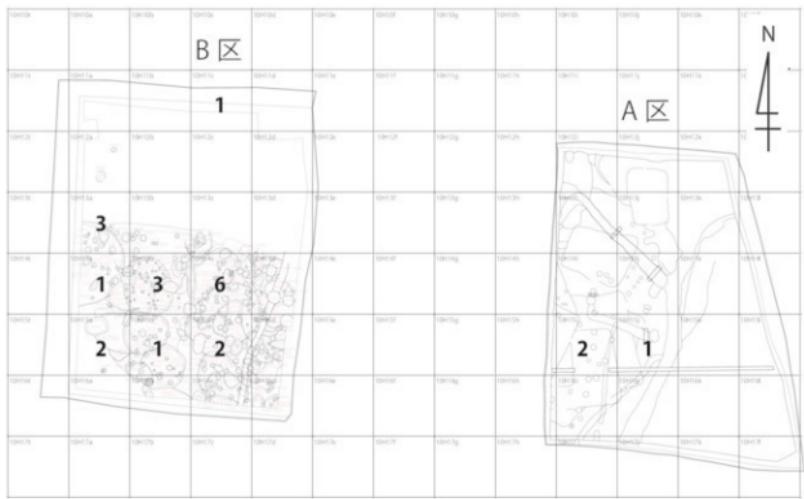
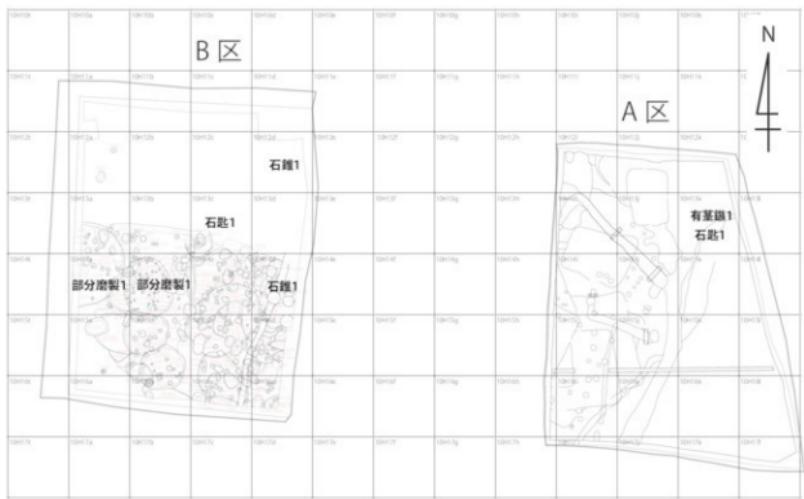


図 3-3 1期遺物出土分布図 -1 (1:400)

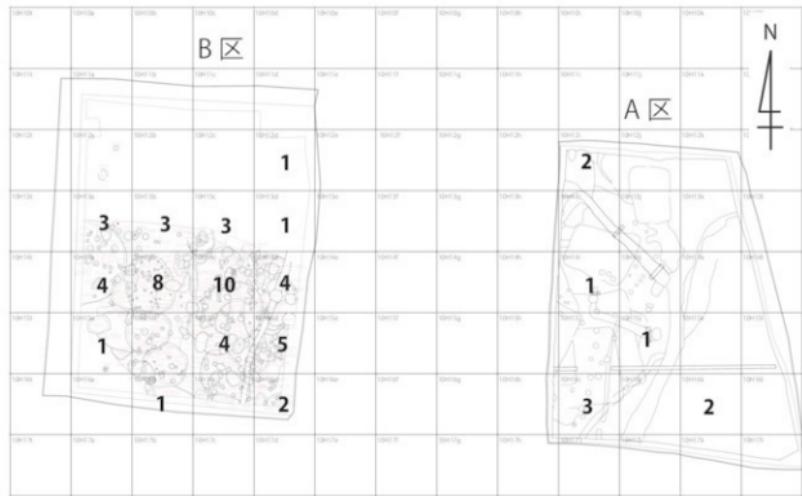


注口土器注口部

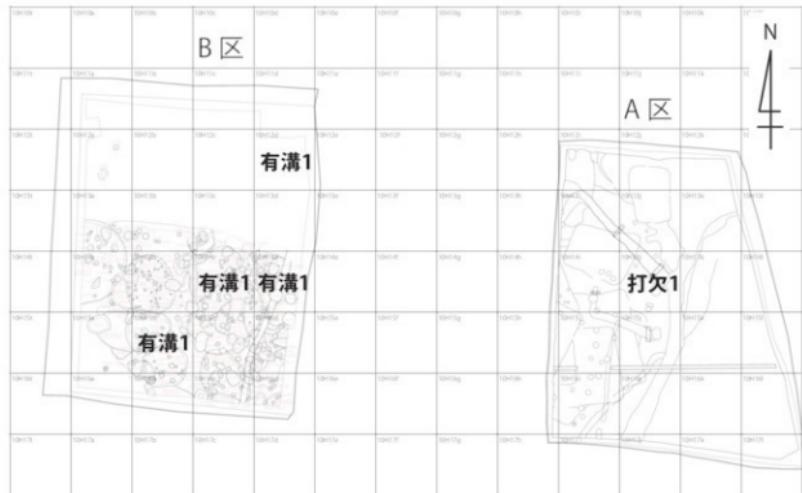


石錐

図 3-4 1期遺物出土分布図 -2 (1:400)



打製石斧



石錘

図 3-5 1期遺物出土分布図 -3 (1:400)

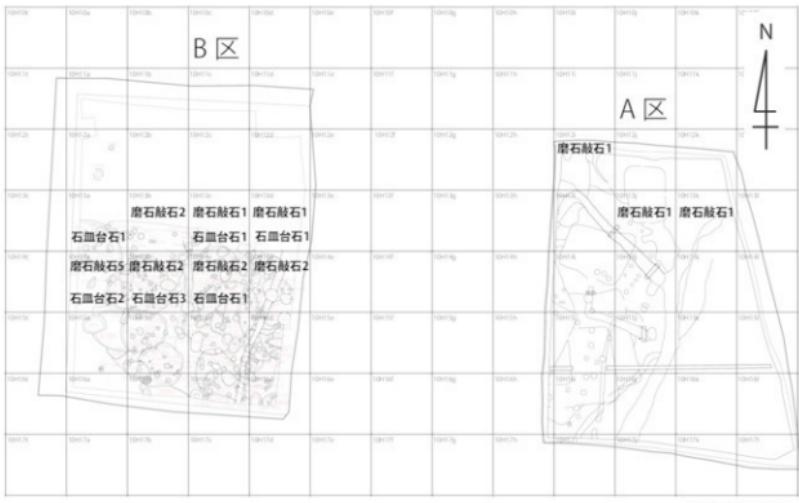
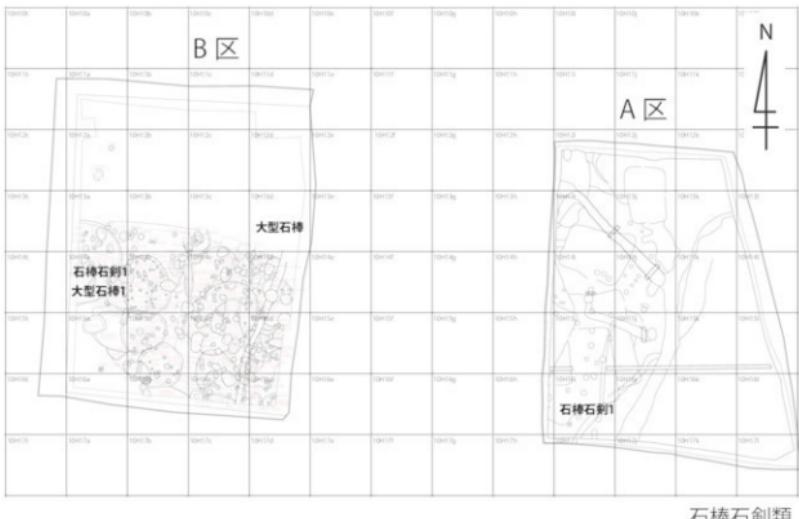
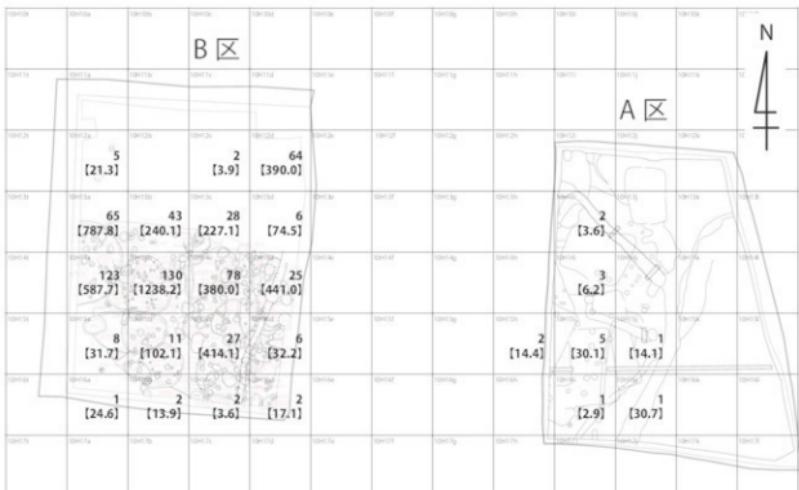
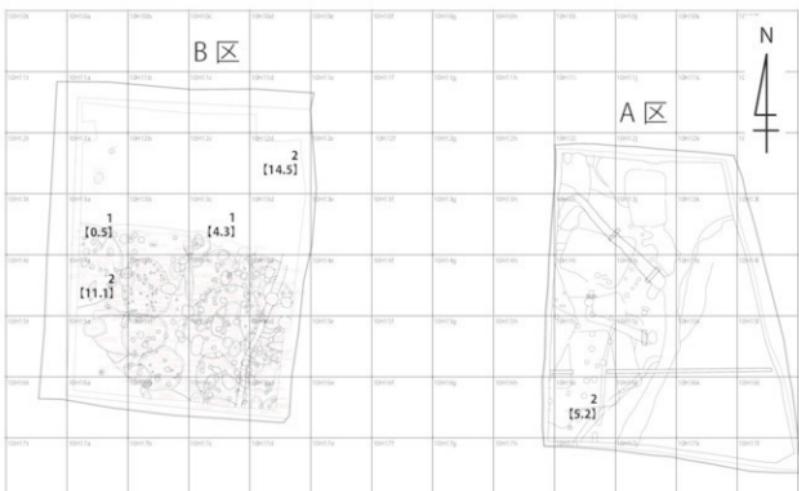


図 3-6 1期遺物出土分布図 -4 (1:400)

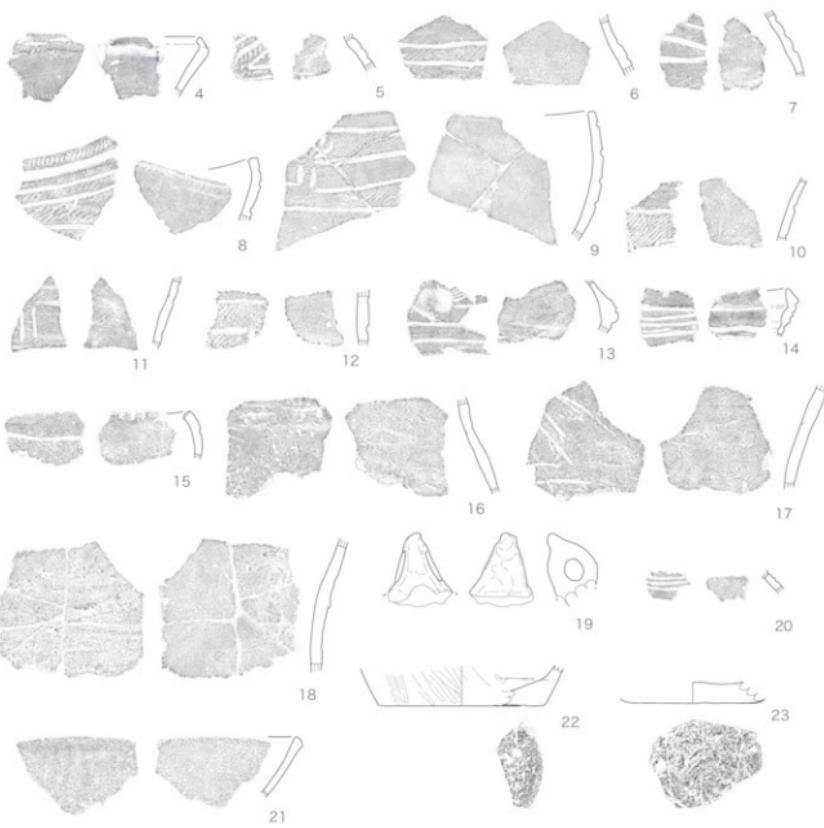


剥片石核(安山岩)
上段:点数、下段【】総重量



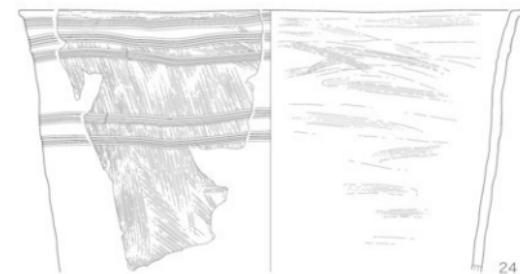
剥片石核(黒曜石)
上段:点数、下段【】総重量

図3-7 1期遺物出土分布図-5 (1:400)



1/3 0 10cm

図 3-8 1期出土土器・土製品実測図 -1 (1:3)



08B 629SK



図 3-9 1期 出土土器・土製品実測図 -2 (1:3)

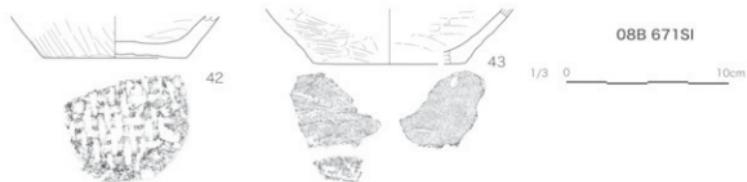
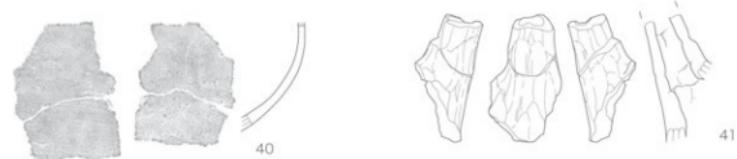
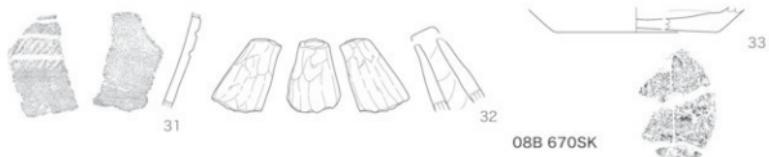
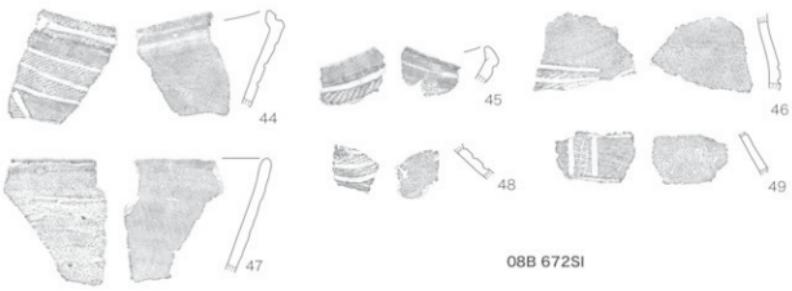
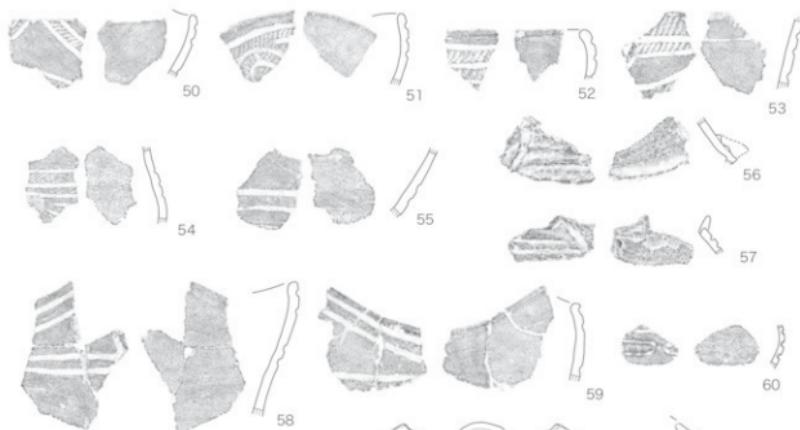


図 3-10 1期 出土土器・土製品実測図 -3 (1:3)

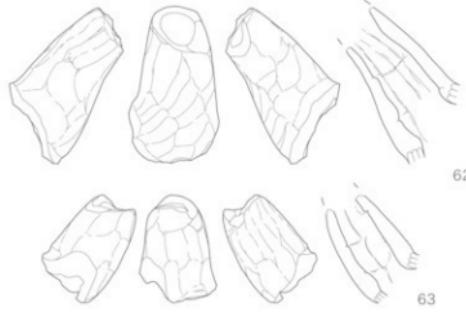


08B 672SI



08B 673SI

1/3 0 10cm



08B 673SI 柱穴

図 3-11 1期出土土器・土製品実測図 -4 (1:3)

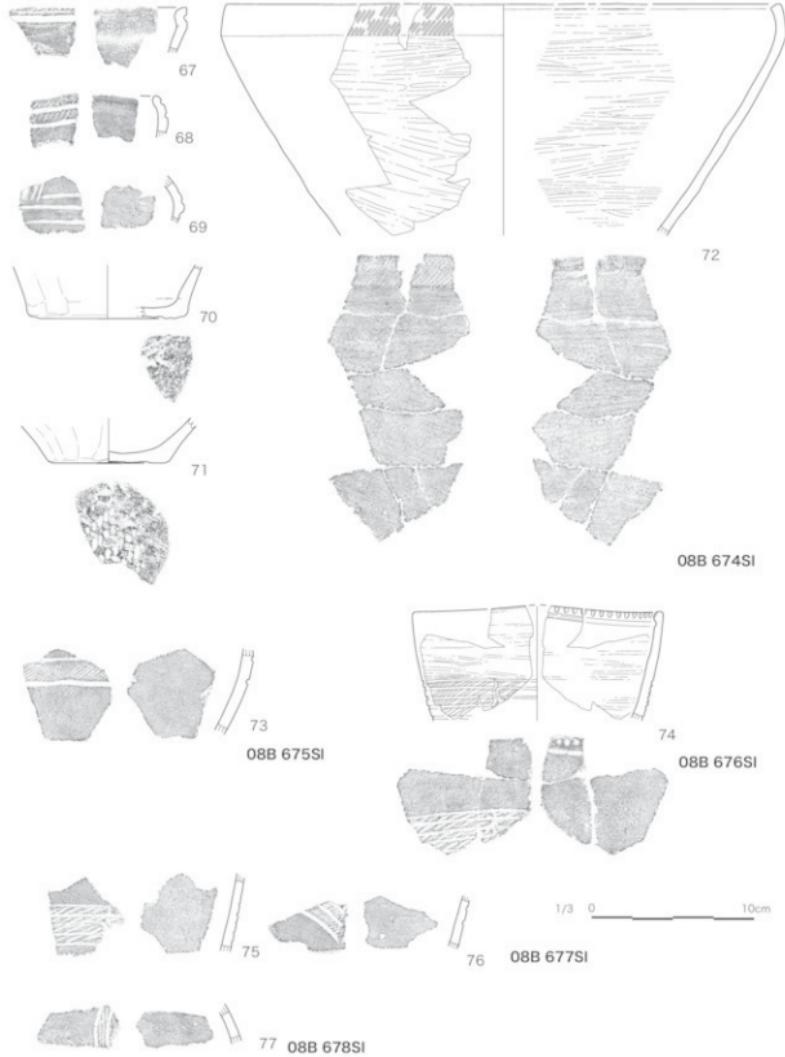


図 3-12 1期 出土土器・土製品実測図 -5 (1:3)

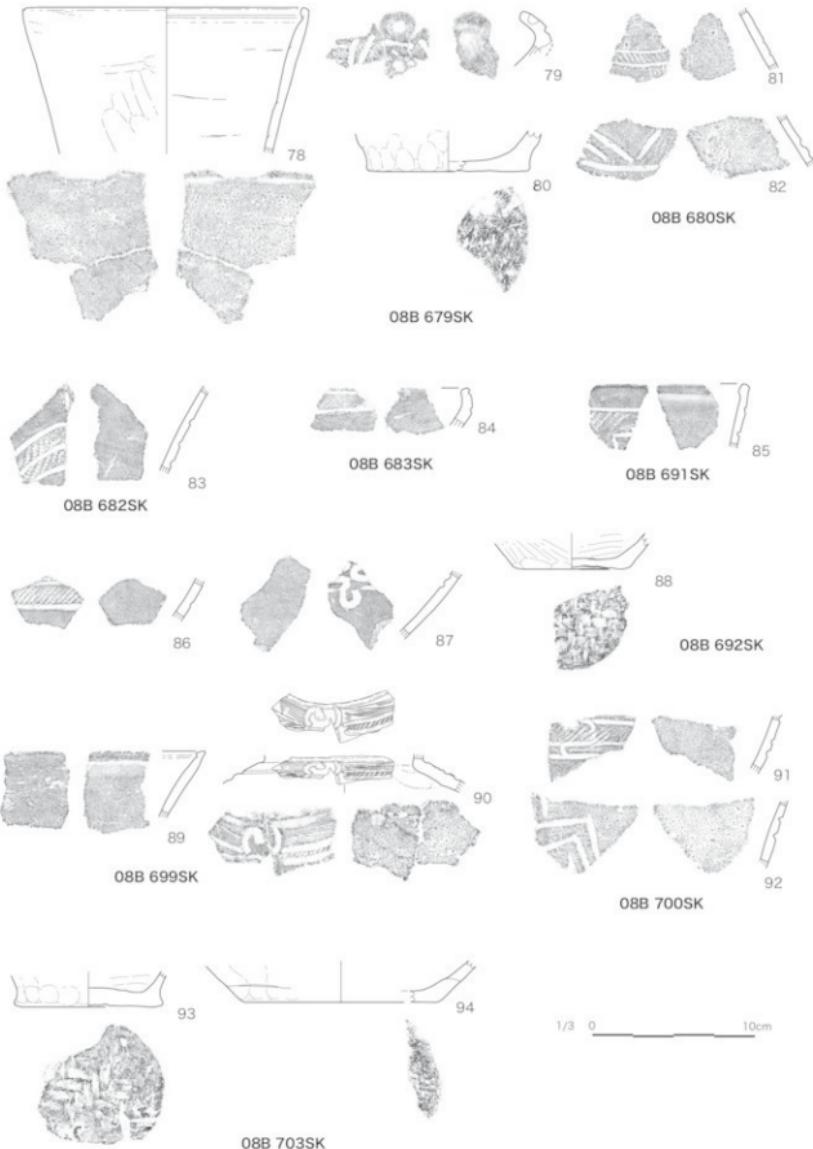


図 3-13 1期出土土器・土製品実測図 -6 (1:3)

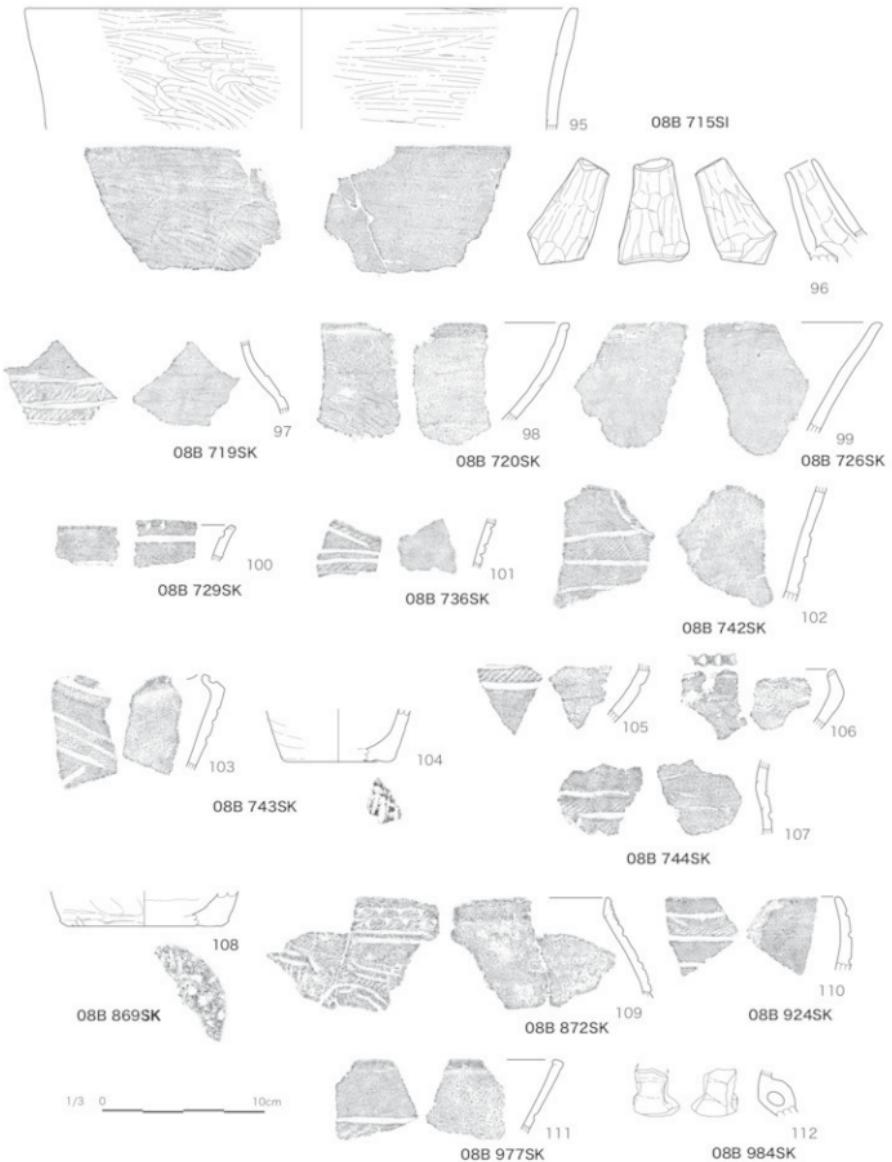


図 3-14 1期 出土土器・土製品実測図 -7 (1:3)

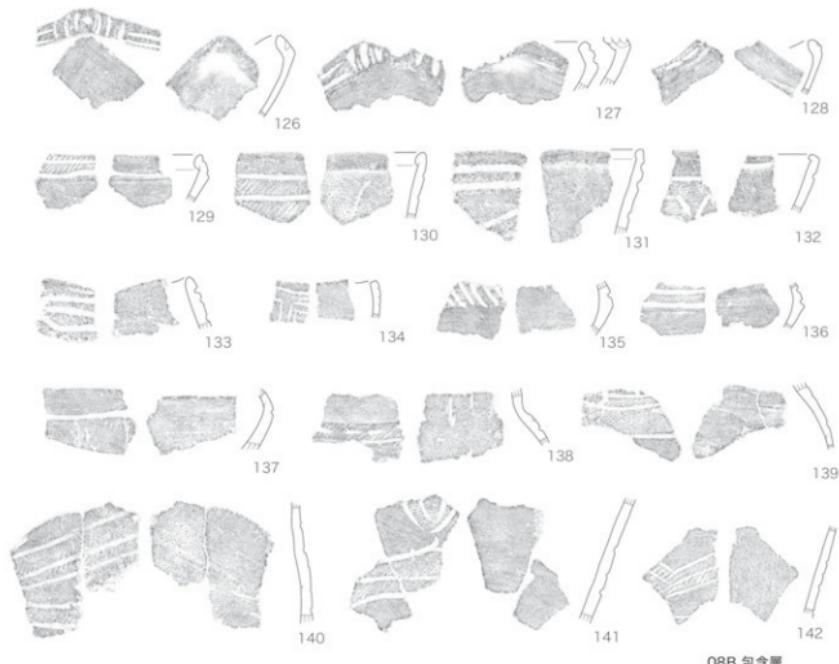
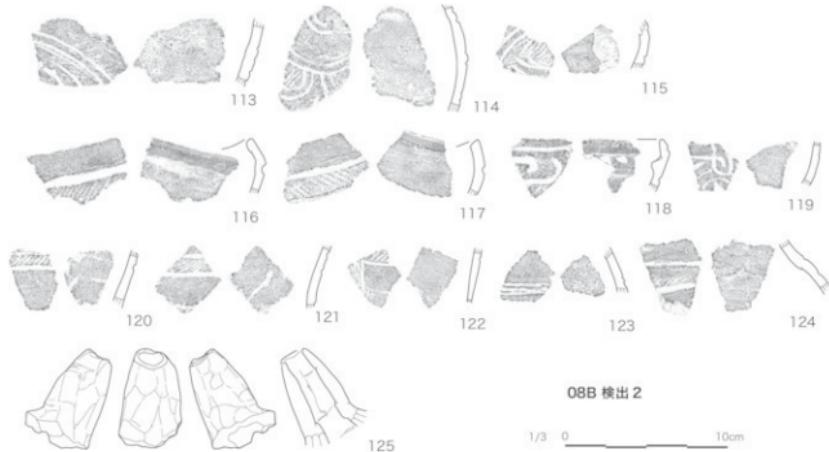
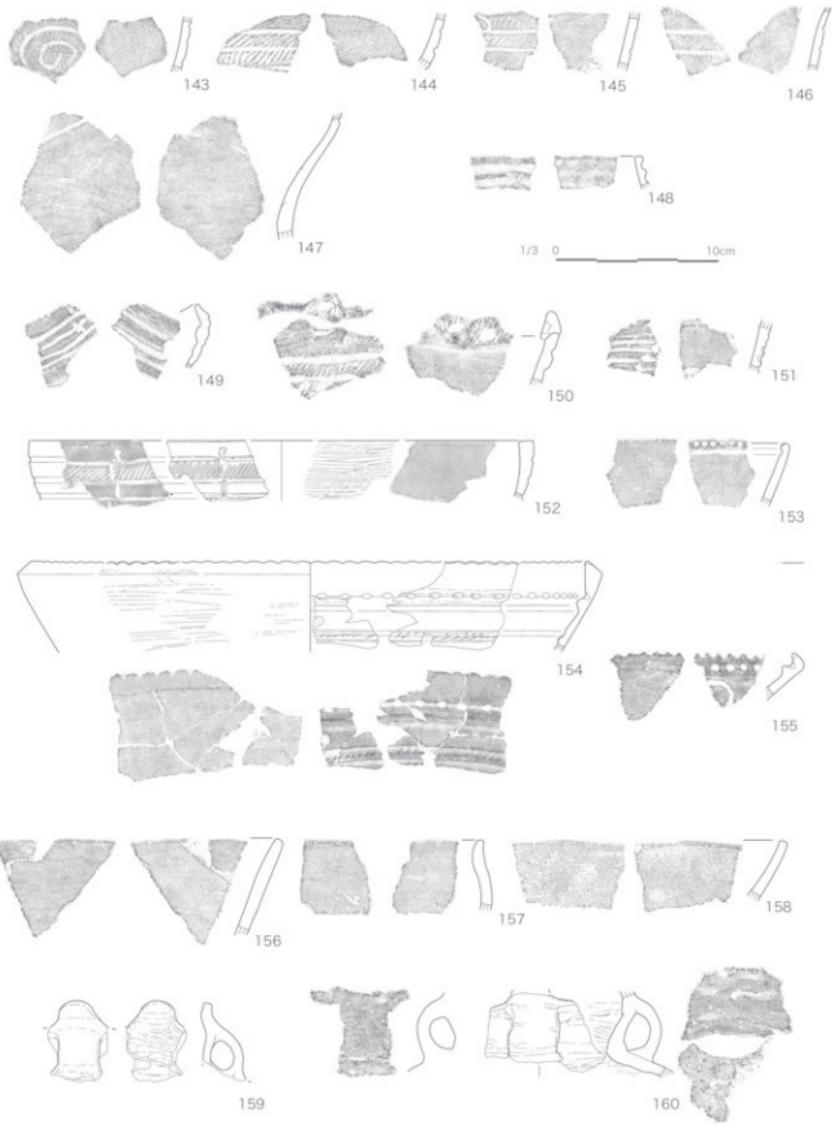
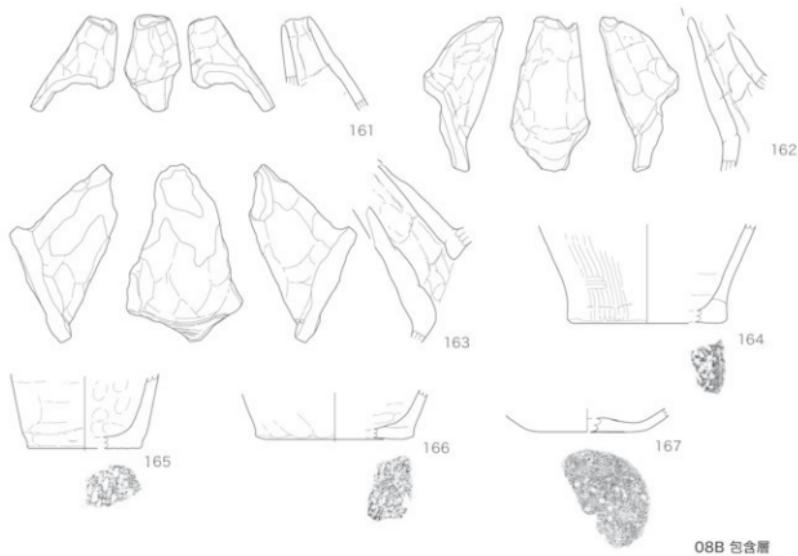


図 3-15 1 期 出土土器・土製品実測図 -8 (1:3)



08B 包含層

図 3-16 1期 出土土器・土製品実測図 -9 (1:3)



1/3 0 10cm

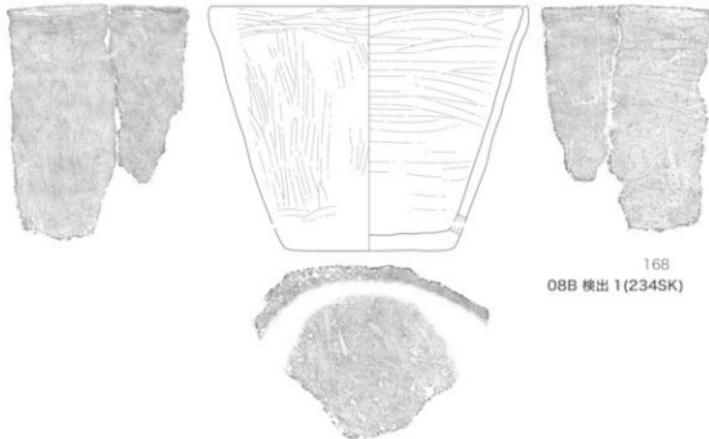
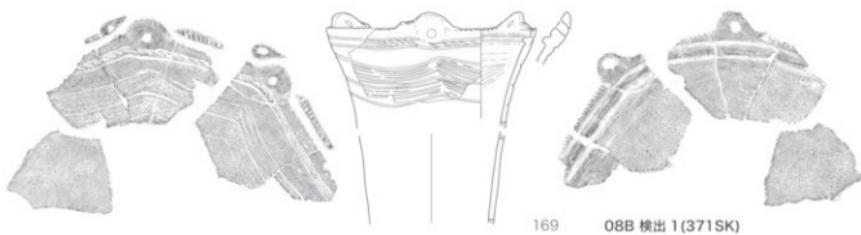
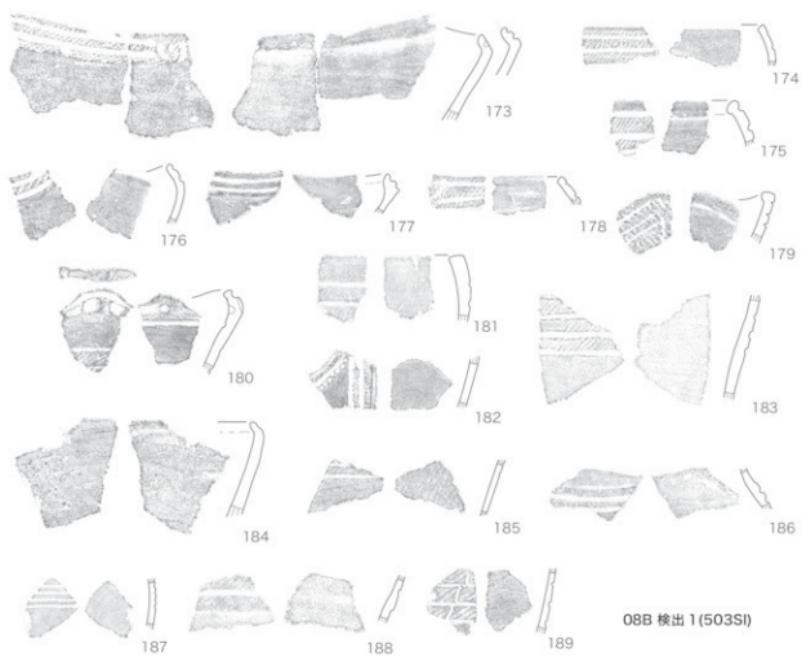


図 3-17 1期 出土土器・土製品実測図 -10 (1:3)



1/3 0 10cm



08B 检出 1(503SI)

図 3-18 1期出土土器・土製品実測図 -11 (1:3)

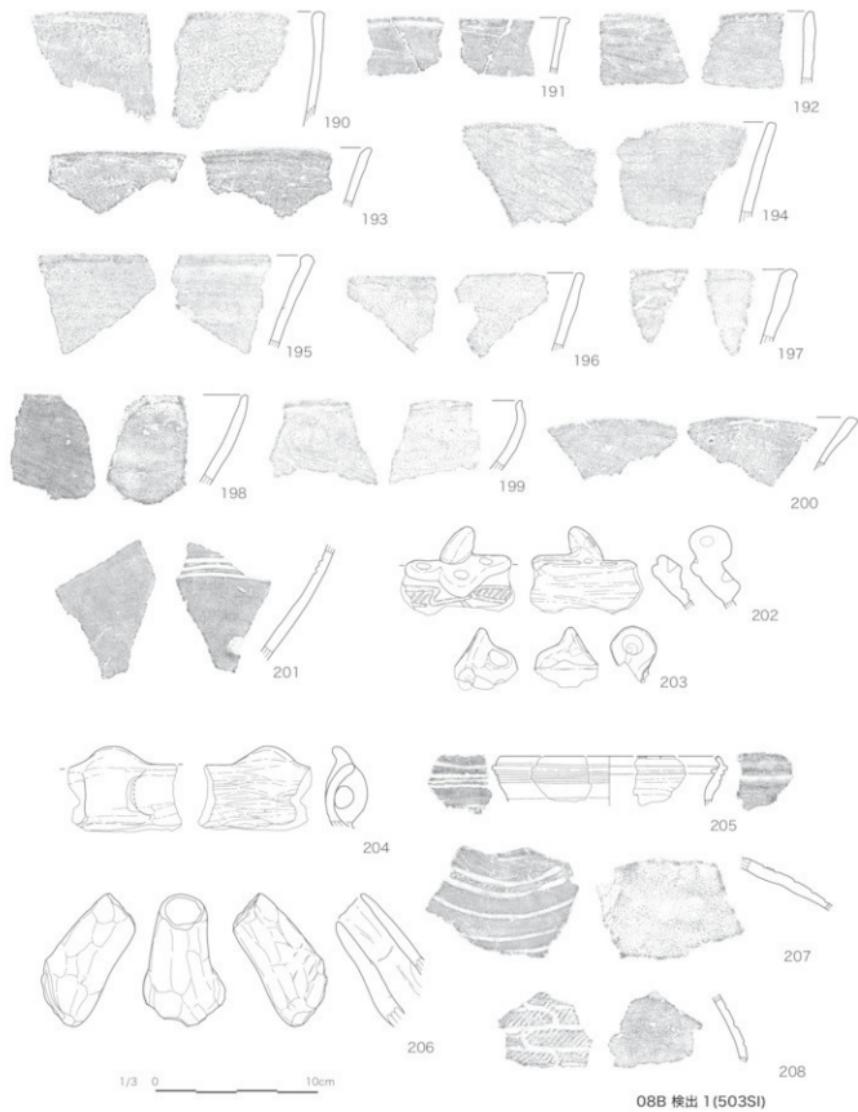


図 3-19 1期 出土土器・土製品実測図 -12 (1:3)

08B 検出 1(503SI)

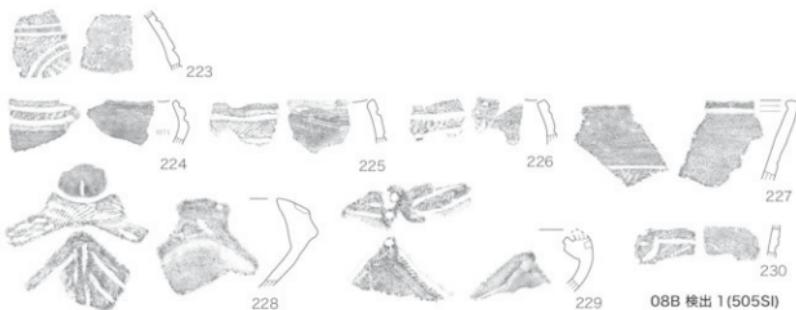
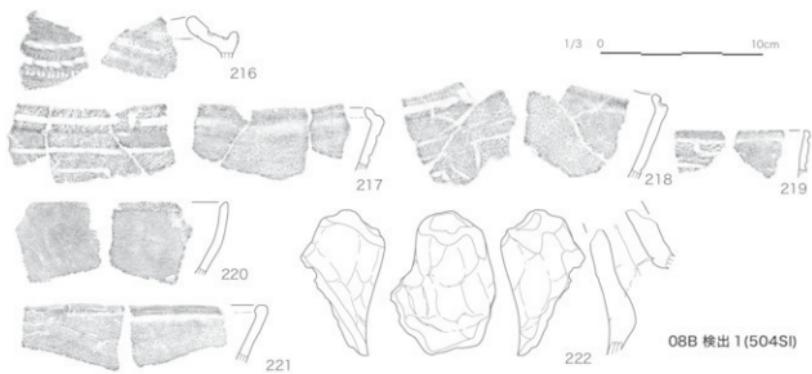
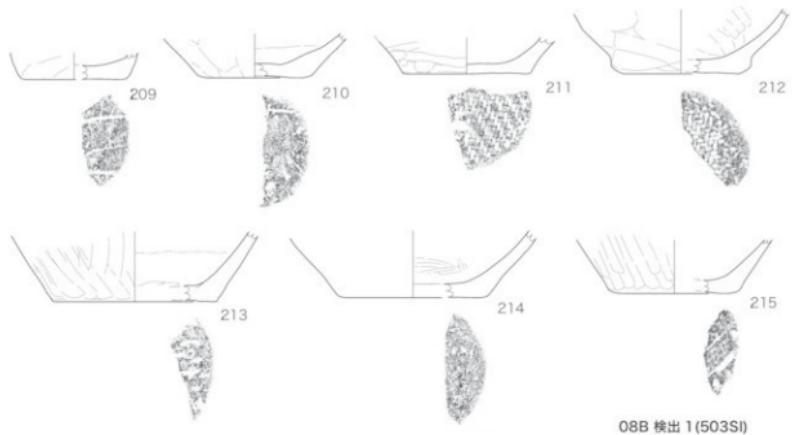


図 3-20 1 期 出土土器・土製品実測図 -13 (1:3)

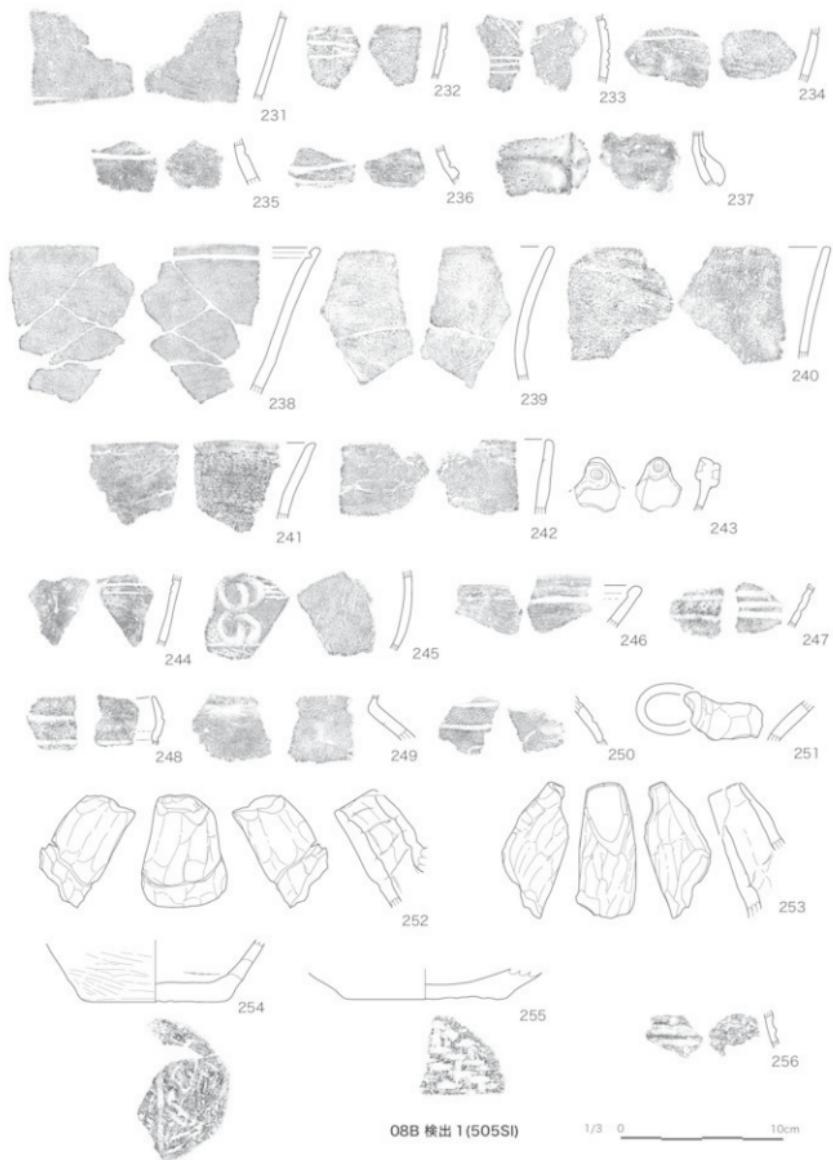


図 3-21 1期 出土土器・土製品実測図 -14 (1:3)

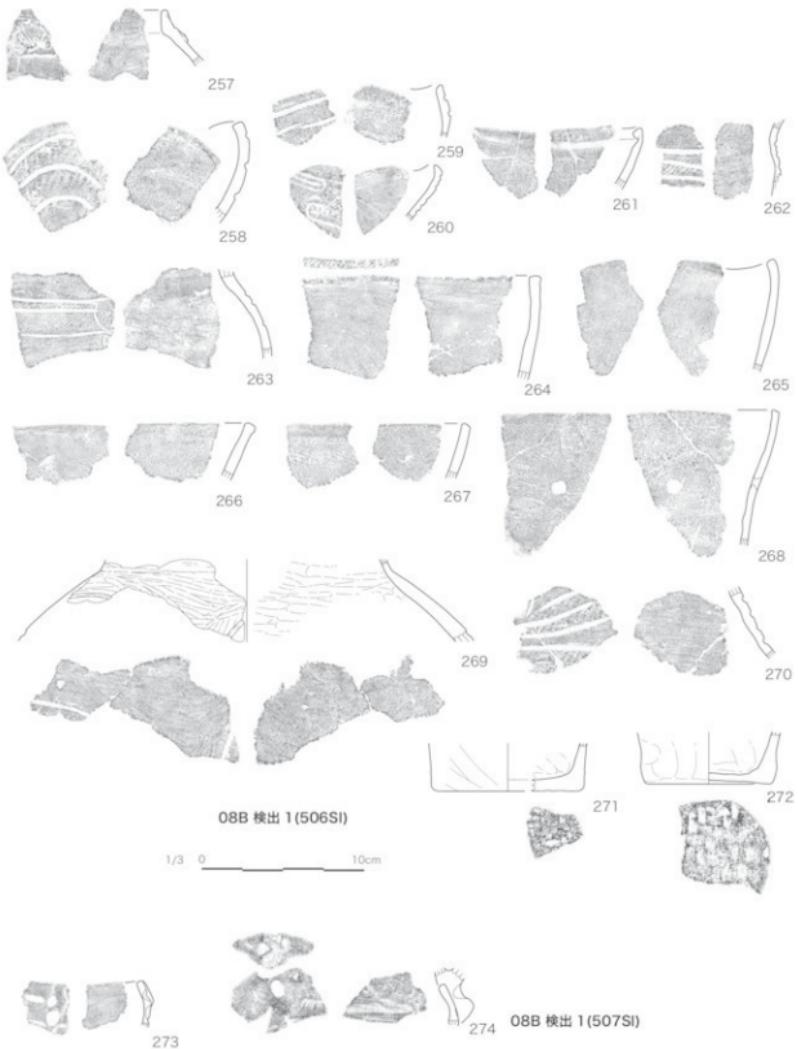


図 3-22 1 期 出土土器・土製品実測図 -15 (1:3)

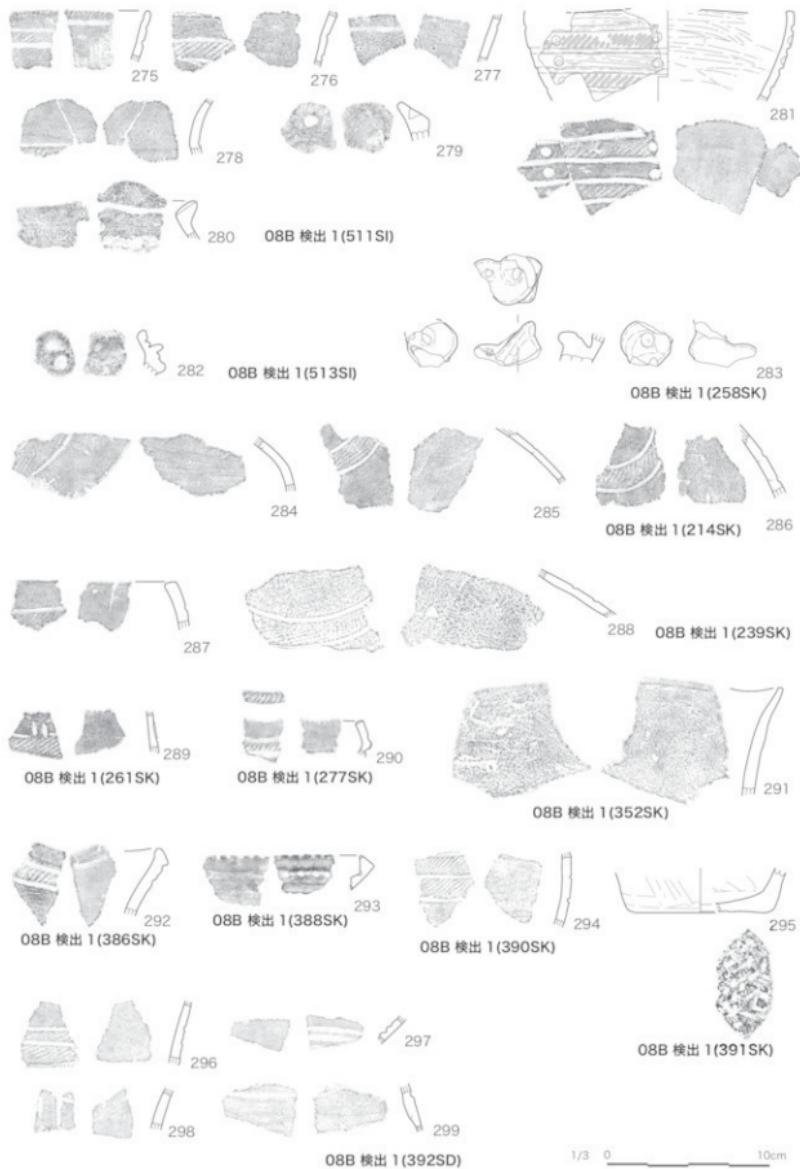


図 3-23 1 期 出土土器・土製品実測図 -16 (1:3)

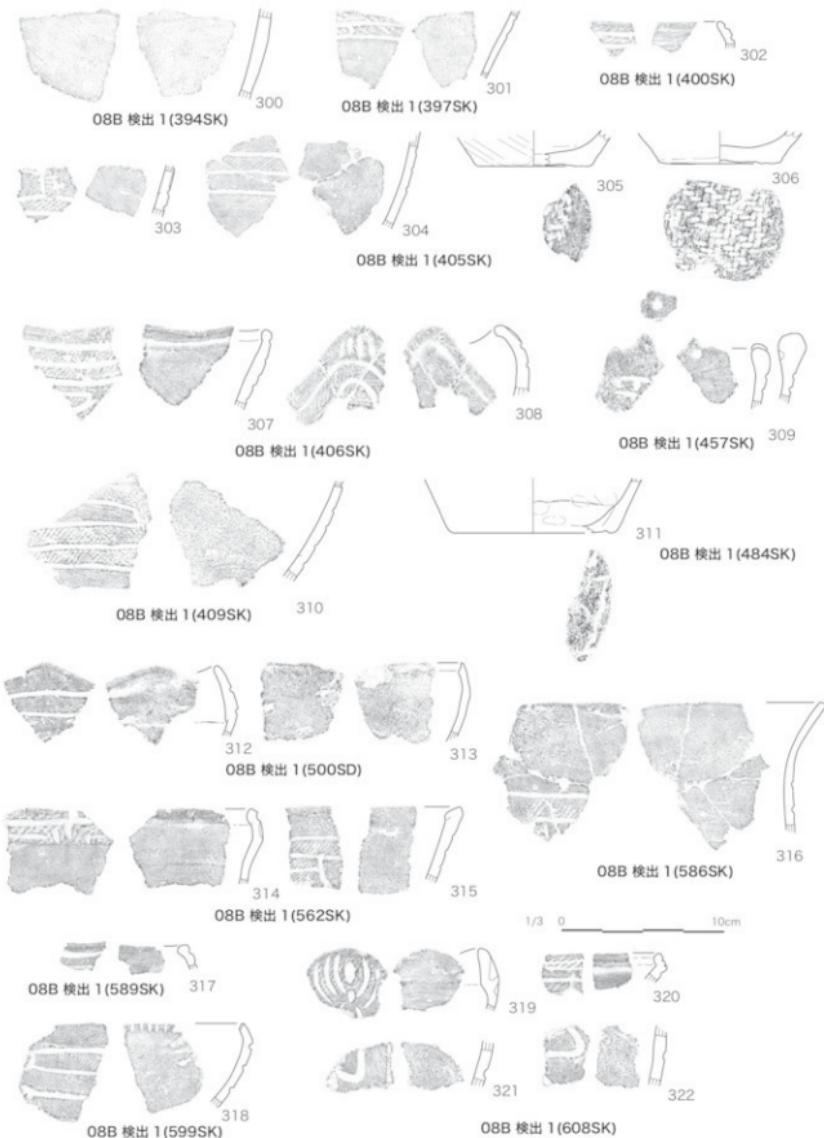


図 3-24 1 期 出土土器・土製品実測図 -17 (1:3)

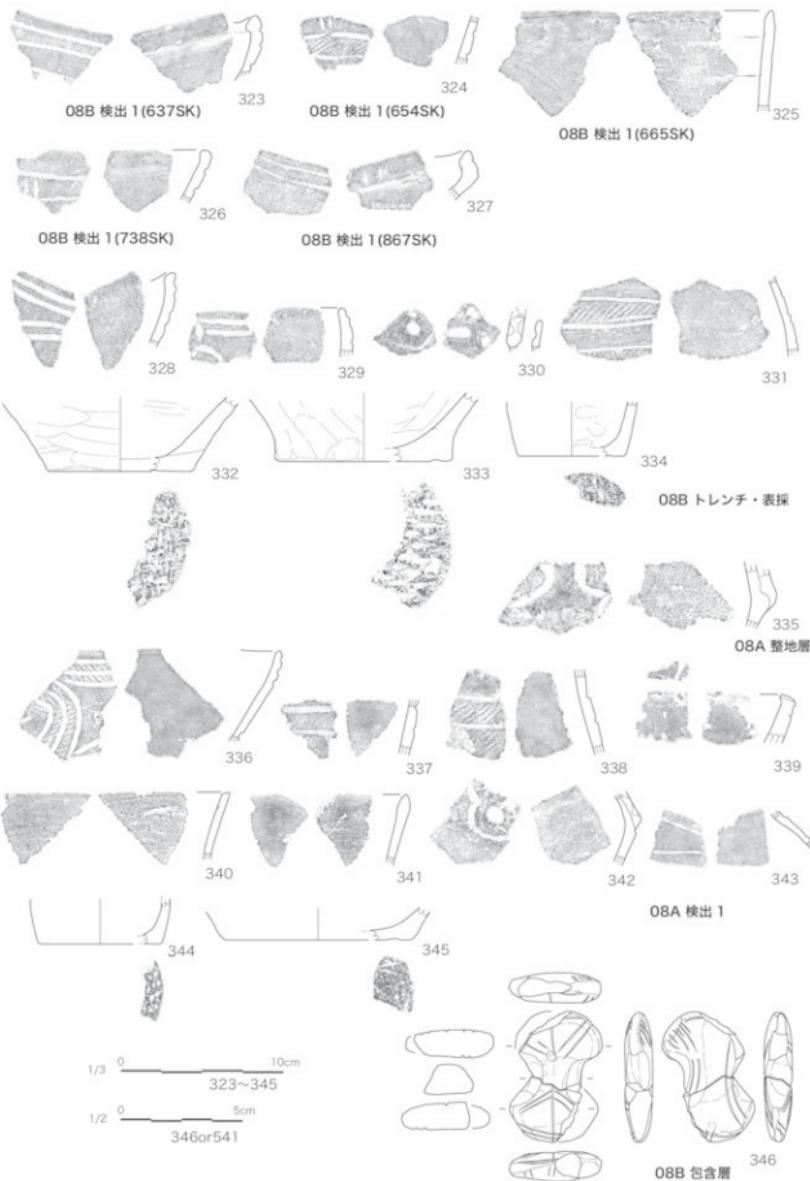
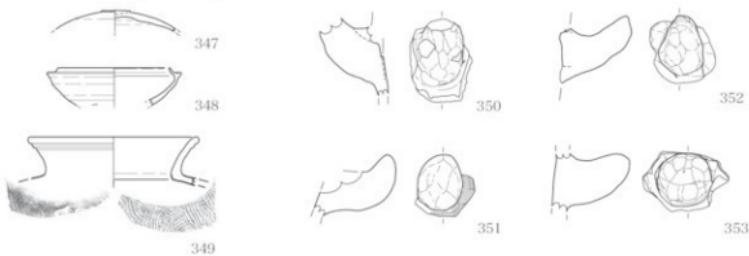


図 3-25 1期 出土土器・土製品実測図 -18 (1:2/1:3)

A 区 -001SD (110SD)



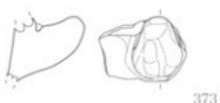
A 区 -002SD



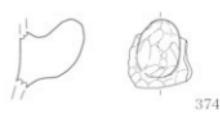
A 区 -032SI



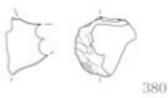
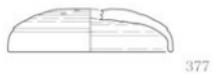
A 区 -030SK



A 区 -036SI



A 区 -046NR



1/4 0 20cm

図 3-26 3期 出土土器・土製品実測図 -1 (1:4)

A 区 -003SD

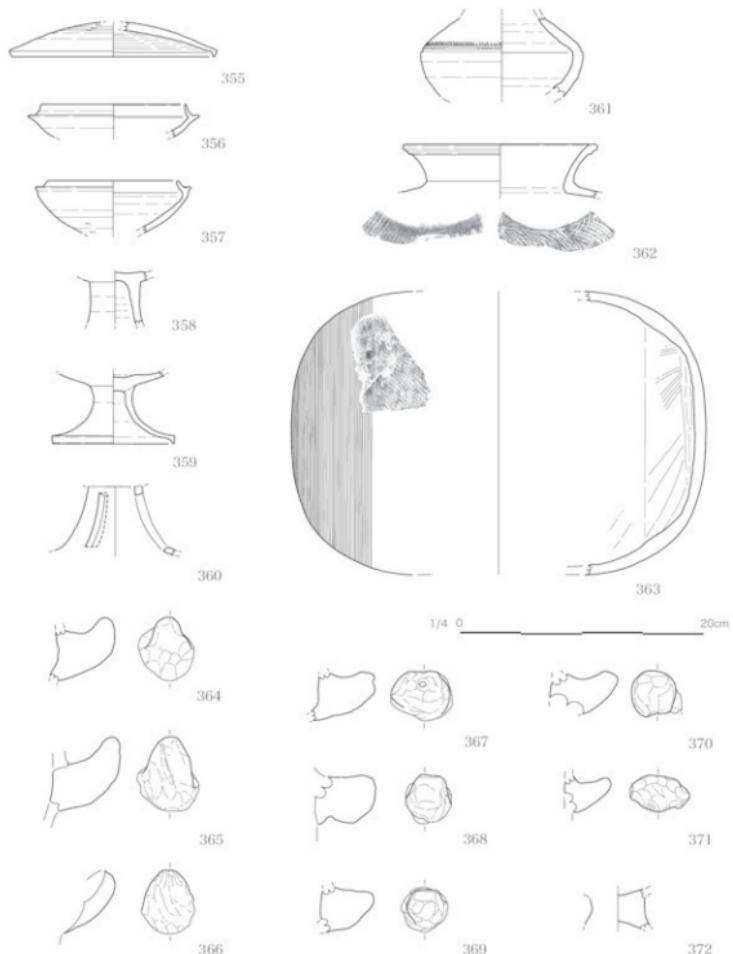
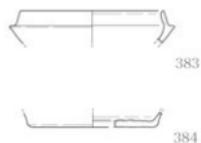


图 3-27 3 期 出土土器・土製品実測図 -2 (1:4)

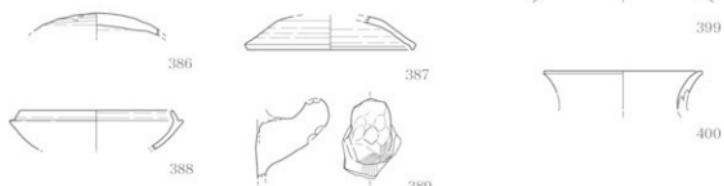
A区 -086SD



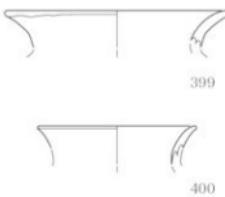
A区 -095SI



A区 -093SD



A区 -110SD



1/4 0 _____ 20cm

A区 -101SD

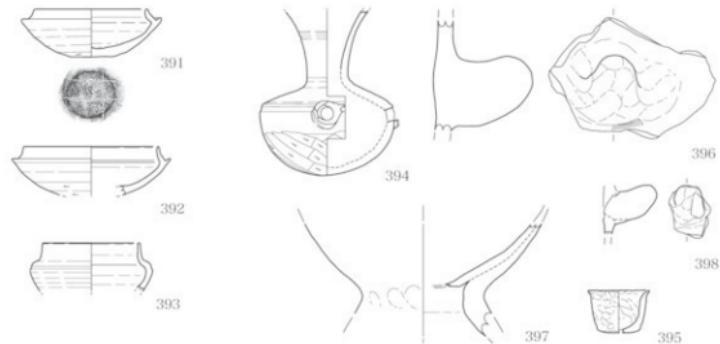


図 3-28 3期 出土土器・土製品実測図 -3 (1:4)

B 区 -205SK



401

B 区 -245SK



402

B 区 -250SK



403

B 区 -278SK



404

B 区 -368SK



408



405

B 区 -432SK



409

B 区 -337SK



407

B 区 -457SK



411

B 区 -433SK (650SB 柱穴)



410

B 区 -500SD



412

B 区 -596SK



413

B 区 -320SK



414



406

B 区 -671SI



416

B 区 -616SK



415

1/4 0 _____ 20cm

図 3-29 3 期 出土土器・土製品実測図 -4 (1:4)

B 区包含層（整地層）

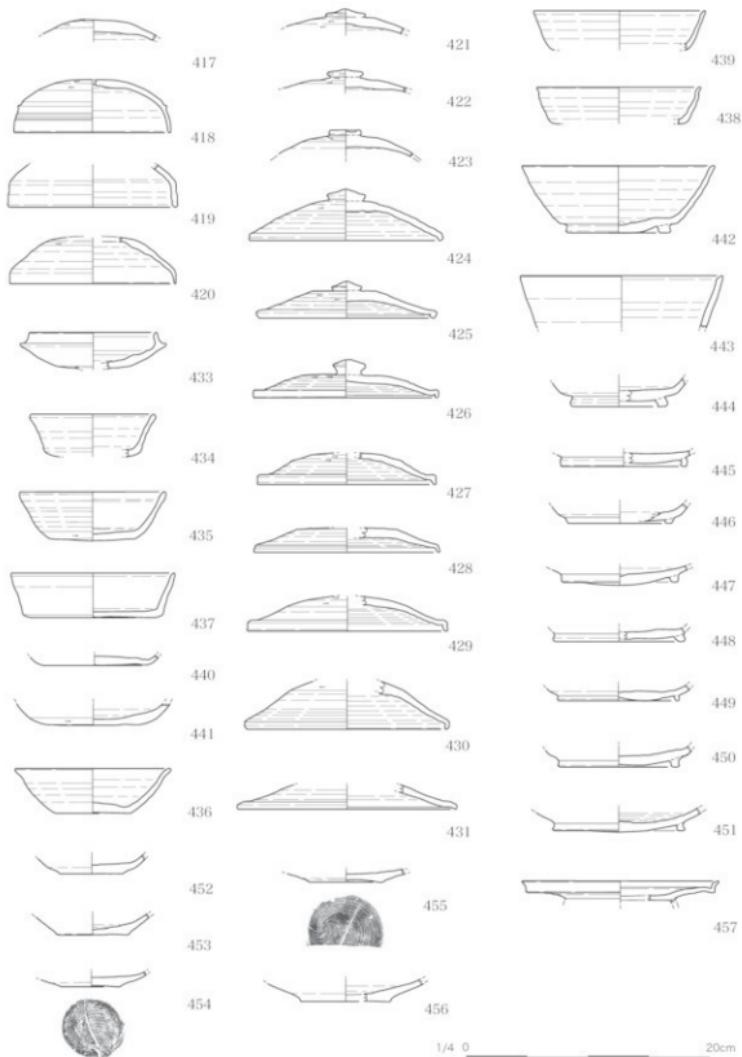


図 3-30 3期 出土土器・土製品実測図 -5 (1:4)

B 区包含層（整地層）

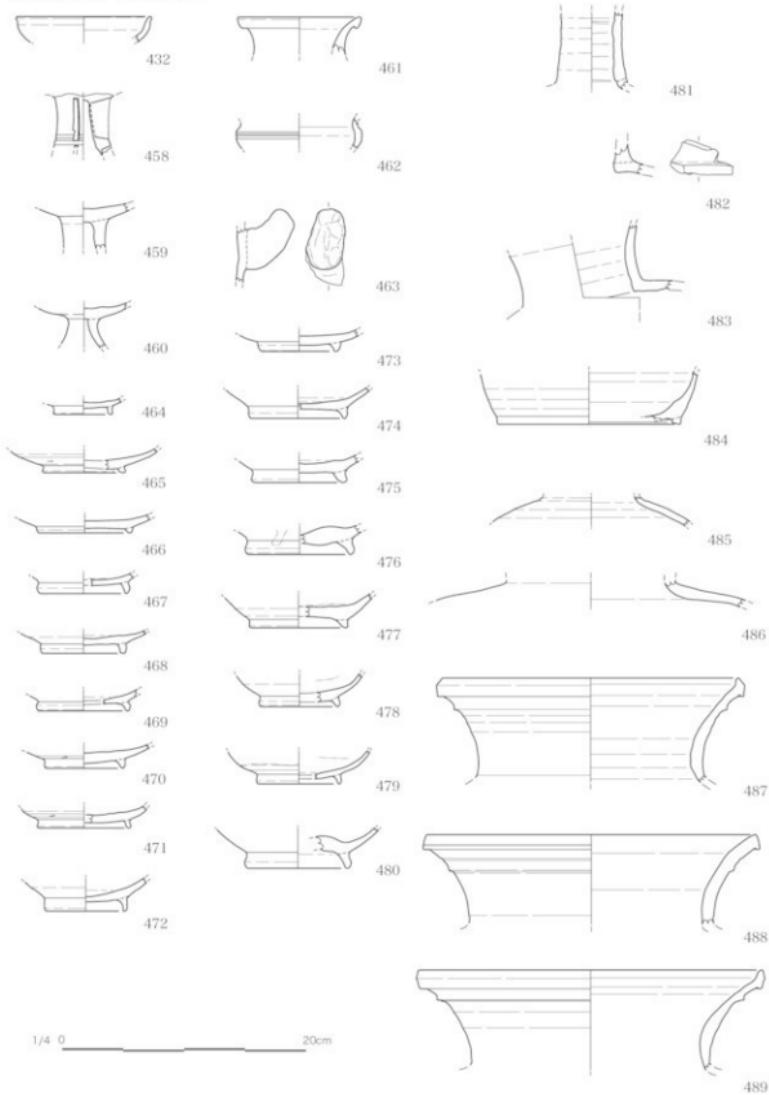


図 3-31 3 期 出土土器・土製品実測図 -6 (1:4)

B 区包含層（整地層）

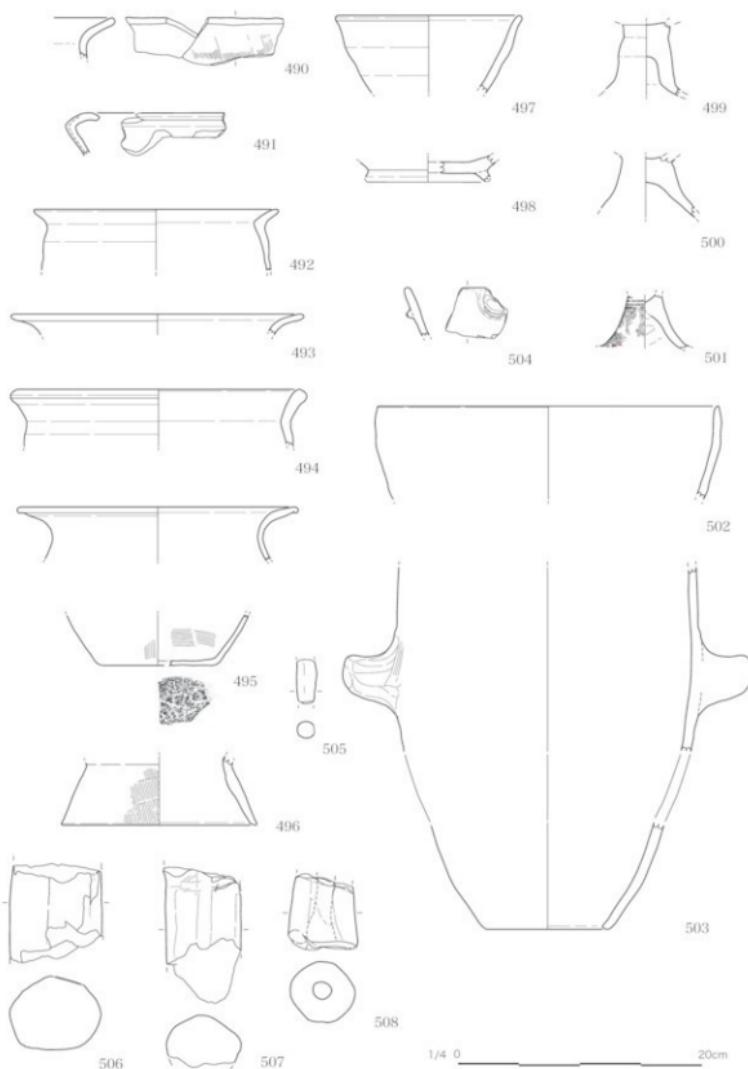
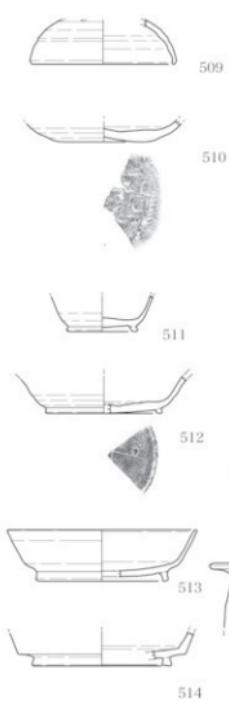
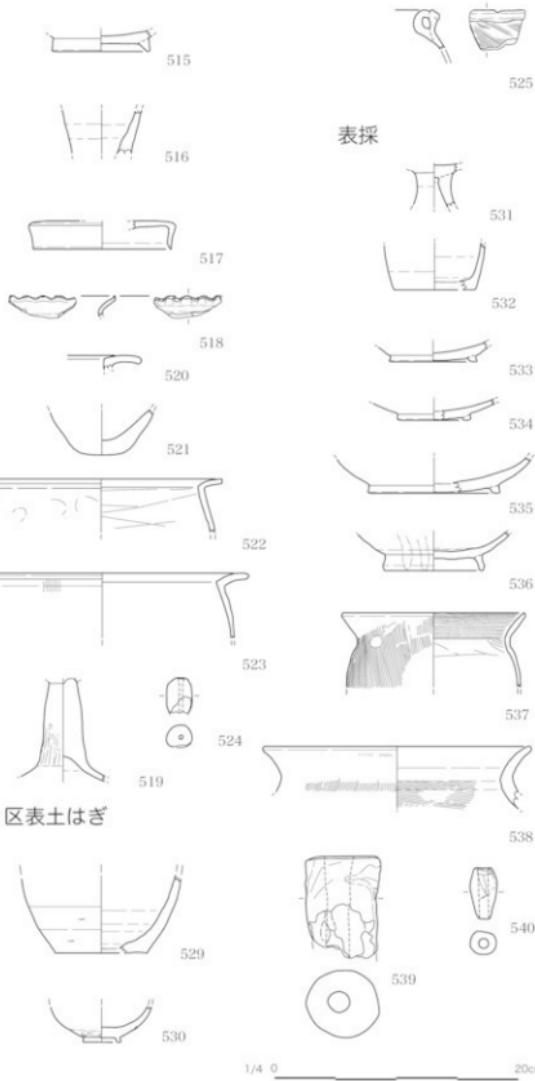


図 3-32 3期出土土器・土製品実測図 -7 (1:4)

B 区サブトレンチ



A 区南壁トレンチ



A 区検 1

A 区表土はぎ

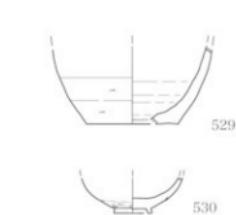


図 3-33 3期出土土器・土製品実測図 -8 (1:4)

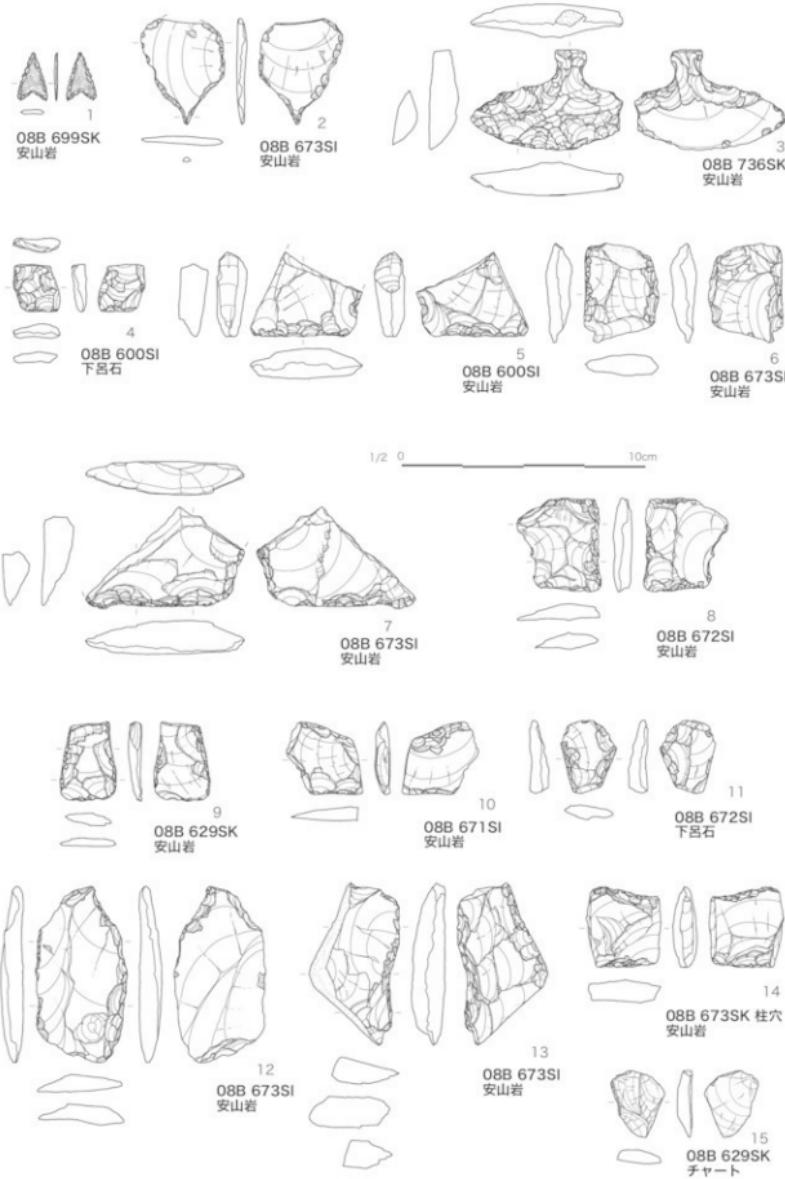


図 3-34 1期出土石器・石製品実測図 -1 (1:2)

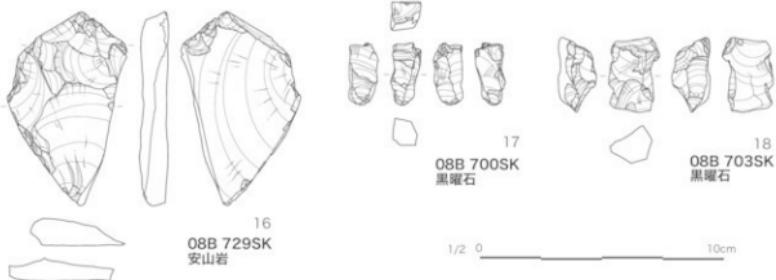


図3-35 1期出土石器・石製品実測図-2 (1:2/1:3)

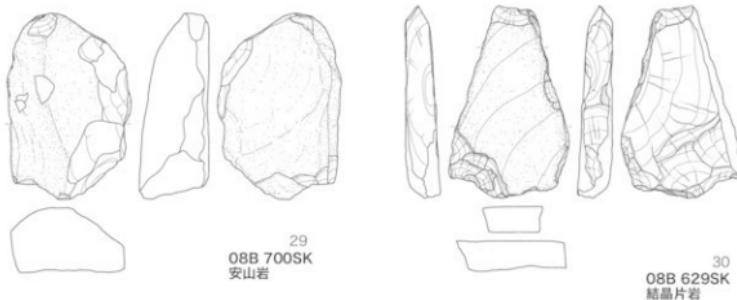
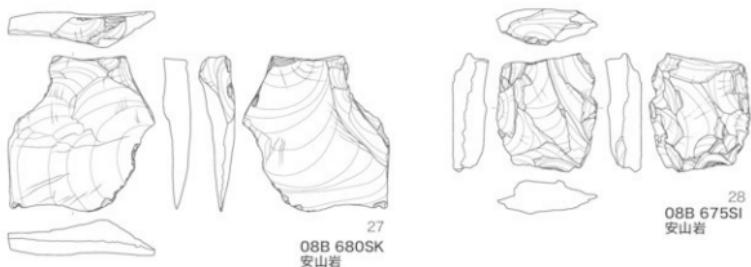


図 3-36 1期 出土石器・石製品実測図 -3 (1:3)

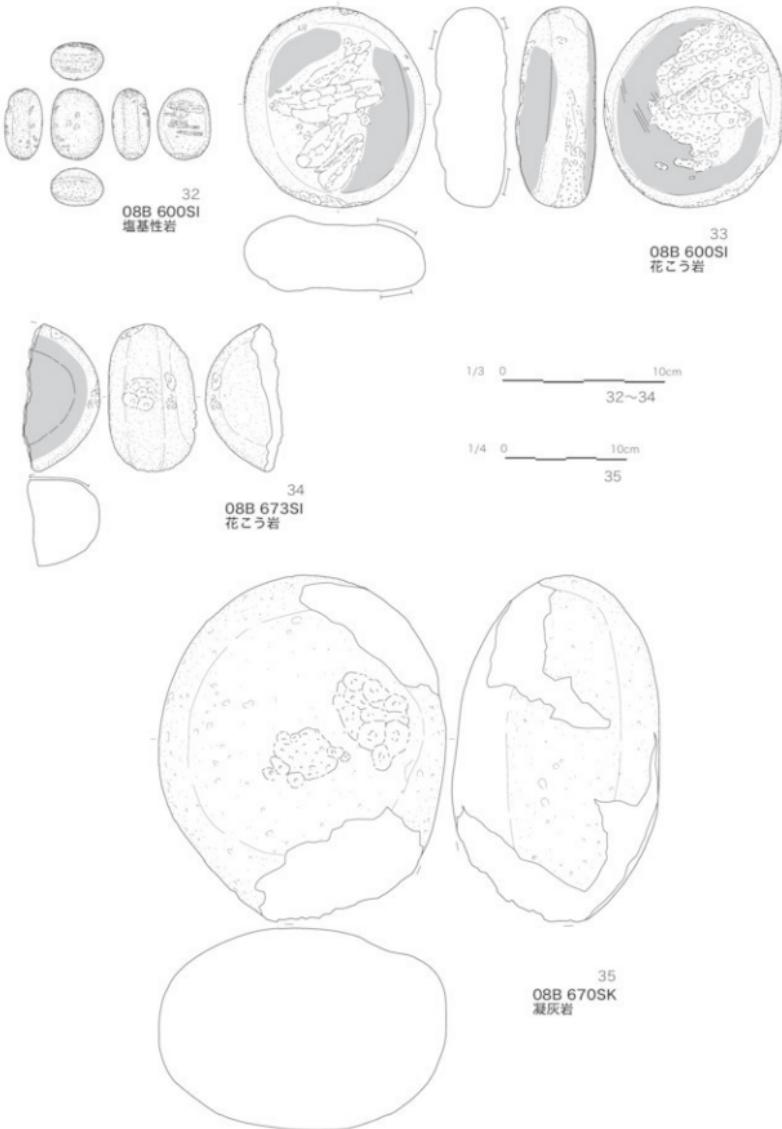


図 3-37 1期出土石器・石製品実測図 -4 (1:3/1:4)

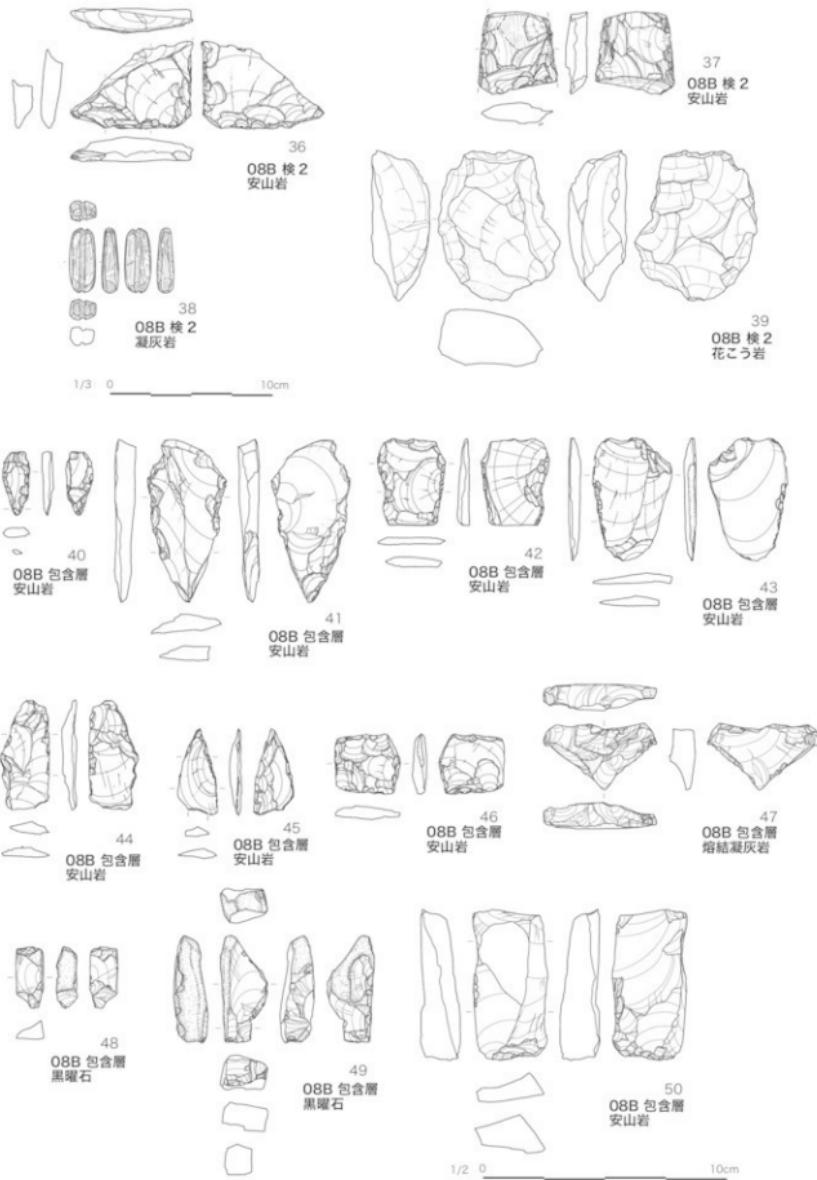


図 3-38 1期 出土石器・石製品実測図 -5 (1:2/1:3)

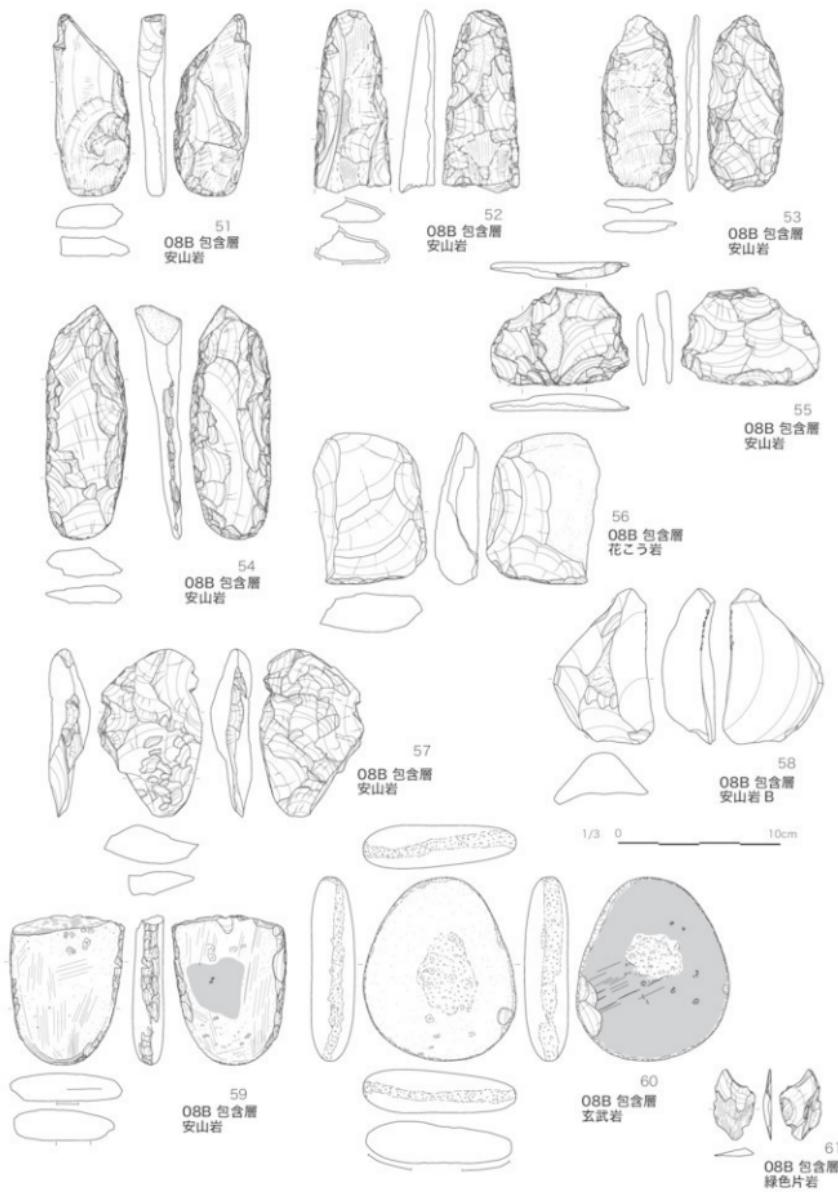


图 3-39 1 期 出土石器・石製品実測図 -6 (1:3)

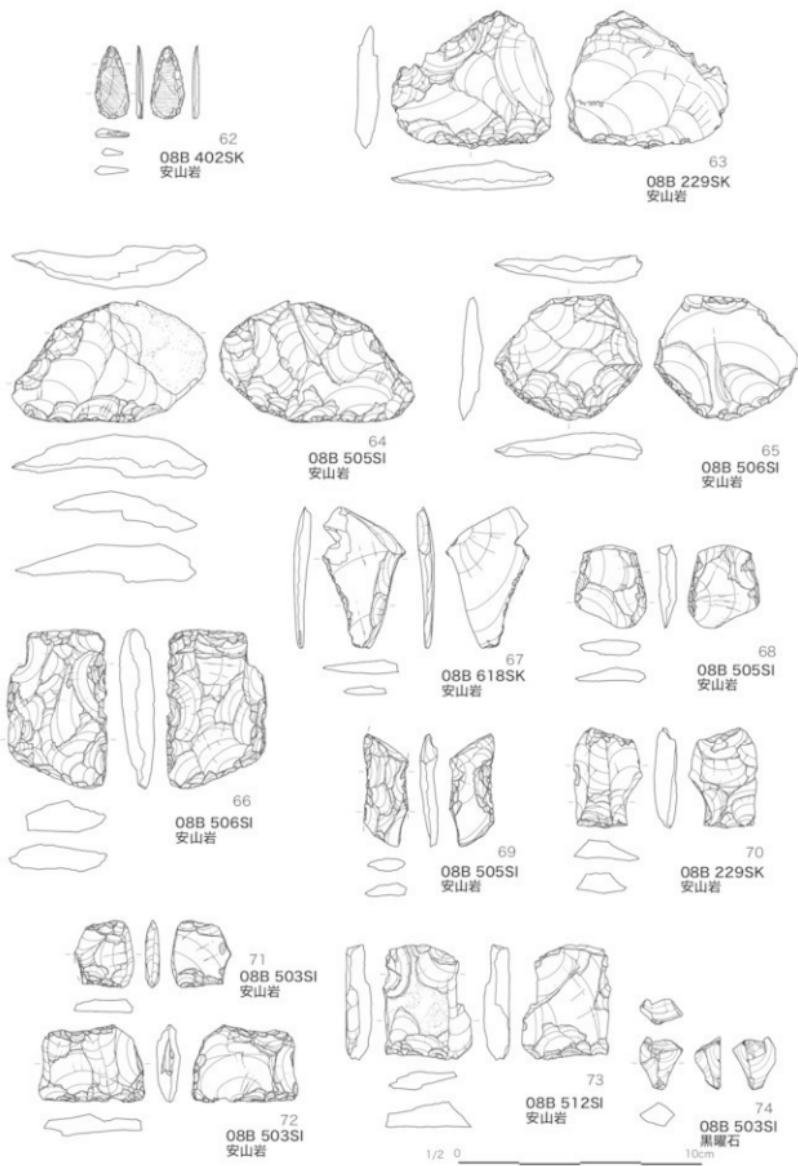


図 3-40 1期 出土石器・石製品実測図 -7 (1:2)

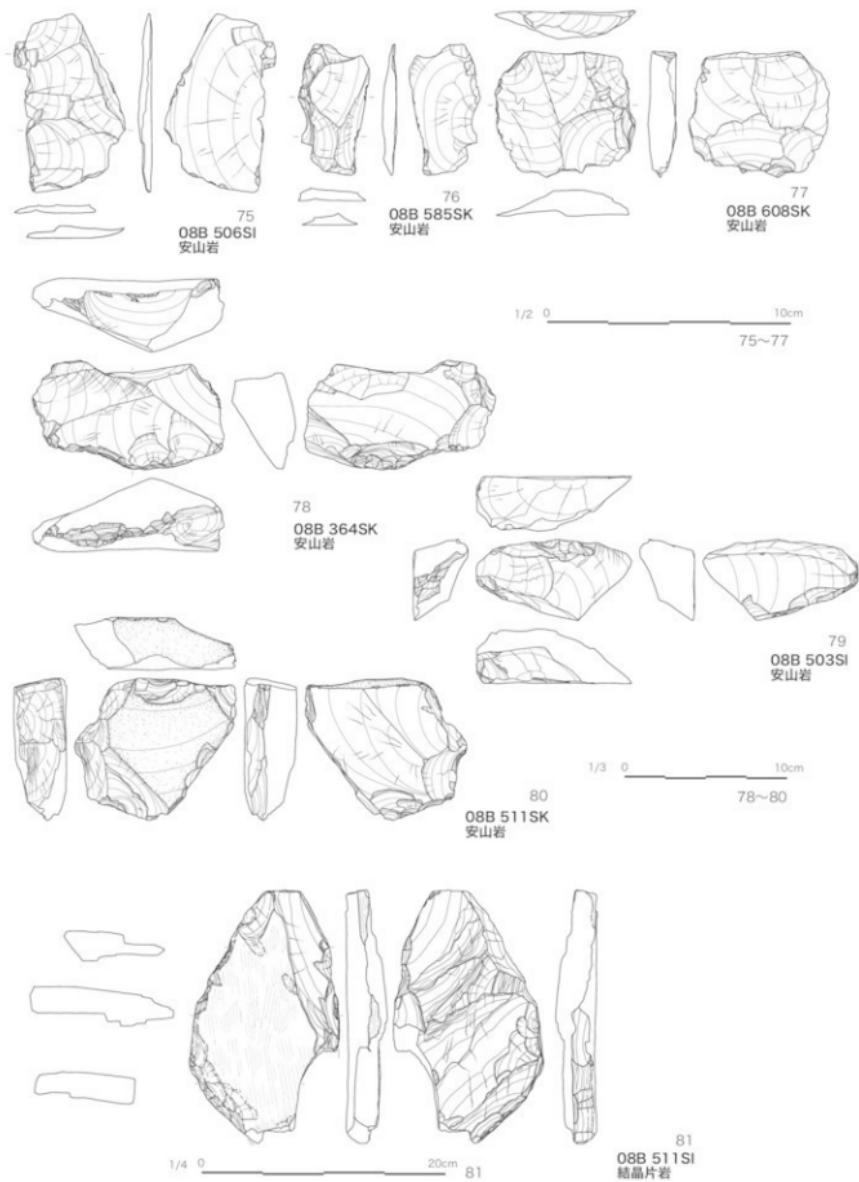


図 3-41 1 期 出土石器・石製品実測図 -8 (1:2/1:3/1:4)

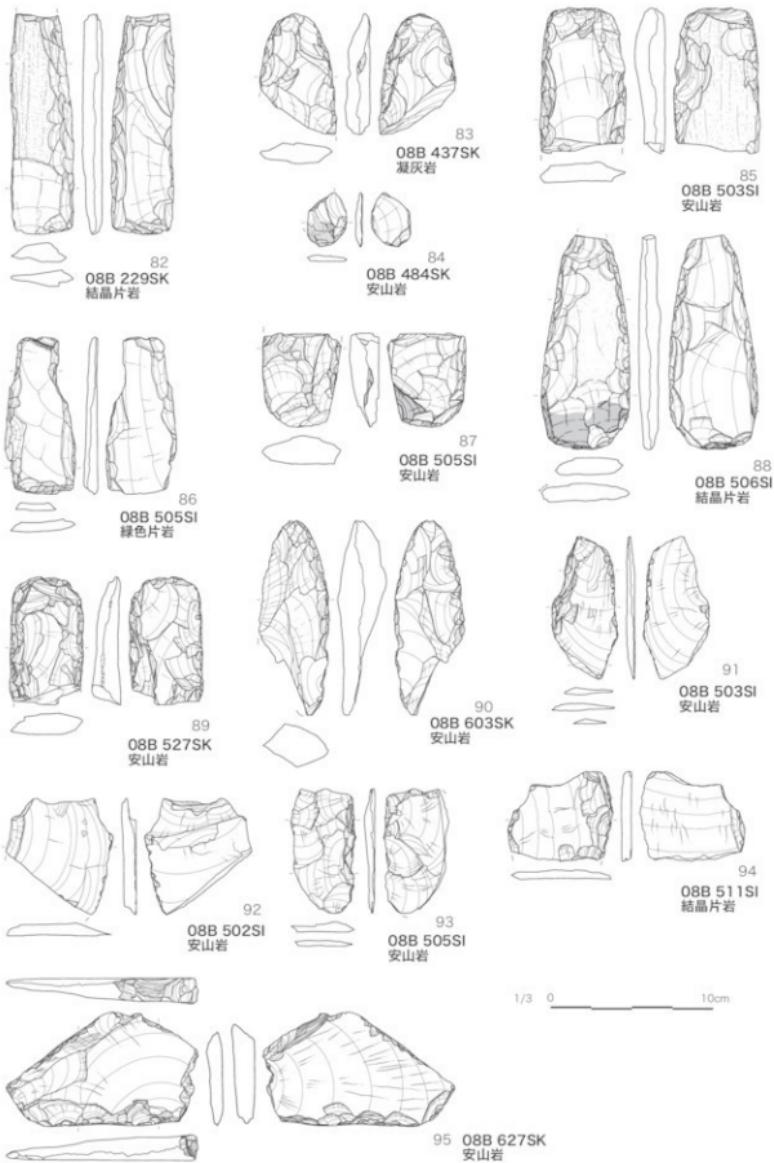


図 3-42 1期出土石器・石製品実測図-9 (1:3)

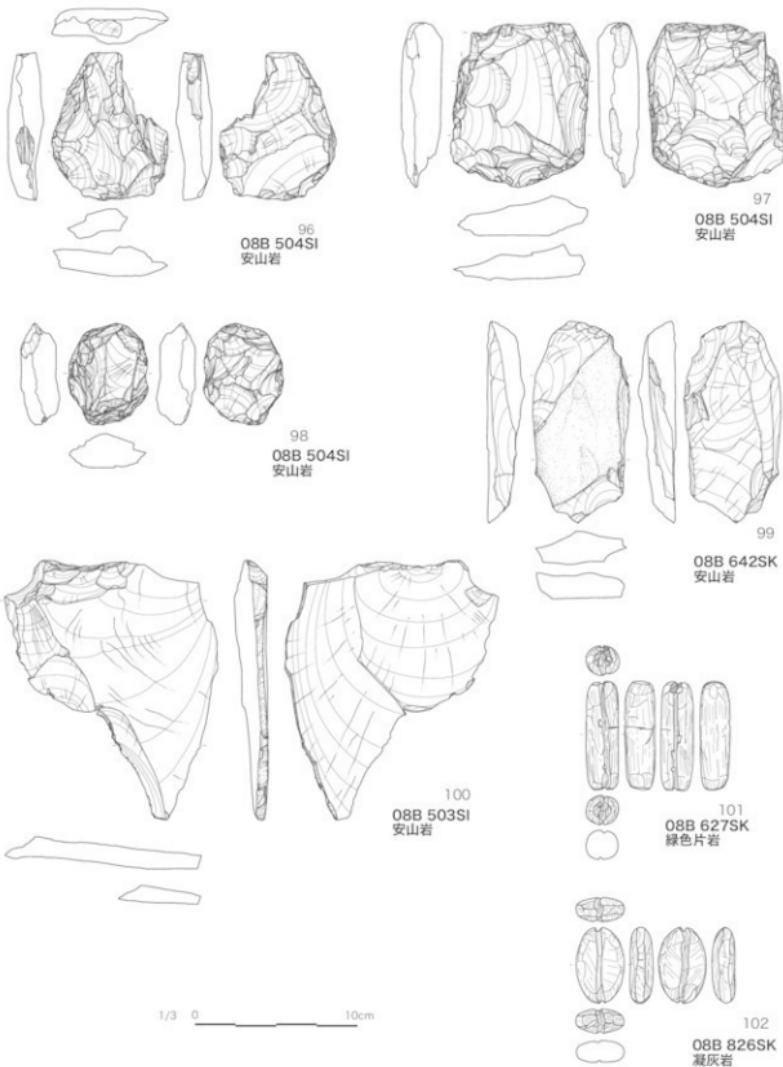


図 3-43 1期 出土石器・石製品実測図 -10 (1:3)

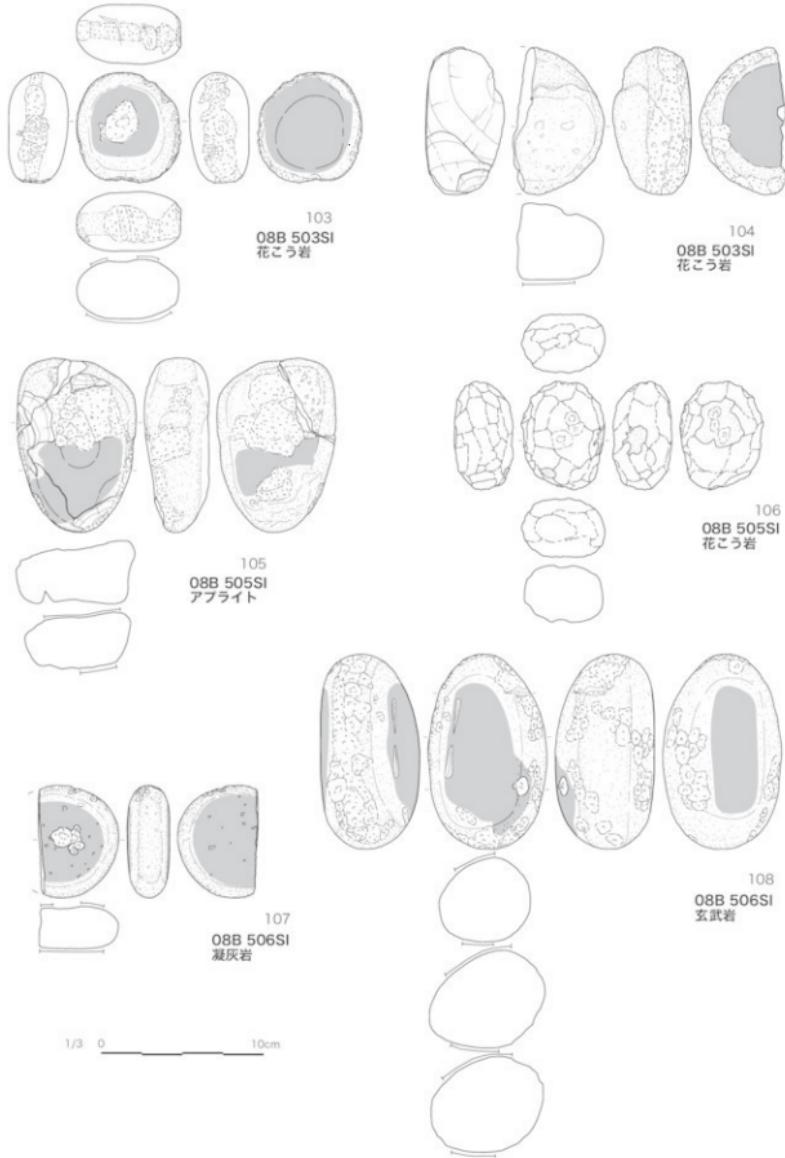


図 3-44 1期出土石器・石製品実測図 -11 (1:3)

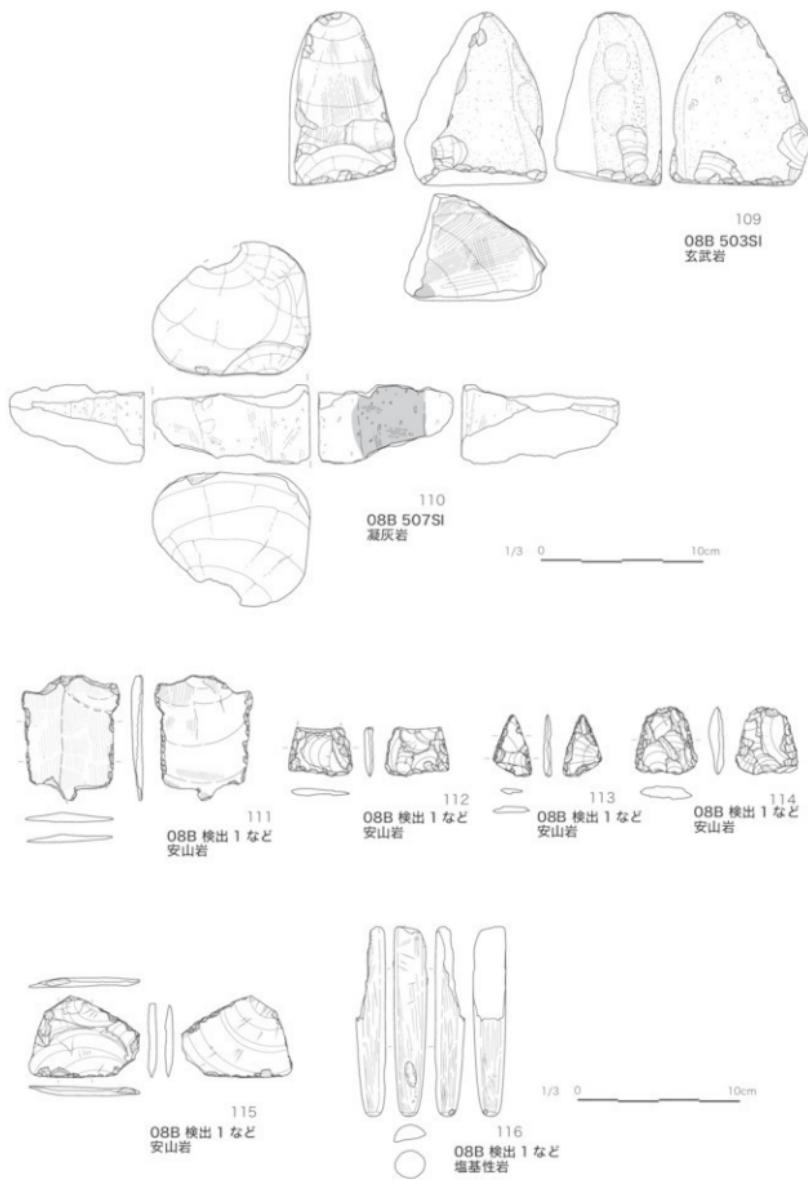


図 3-45 1期 出土石器・石製品実測図 -12 (1:3)

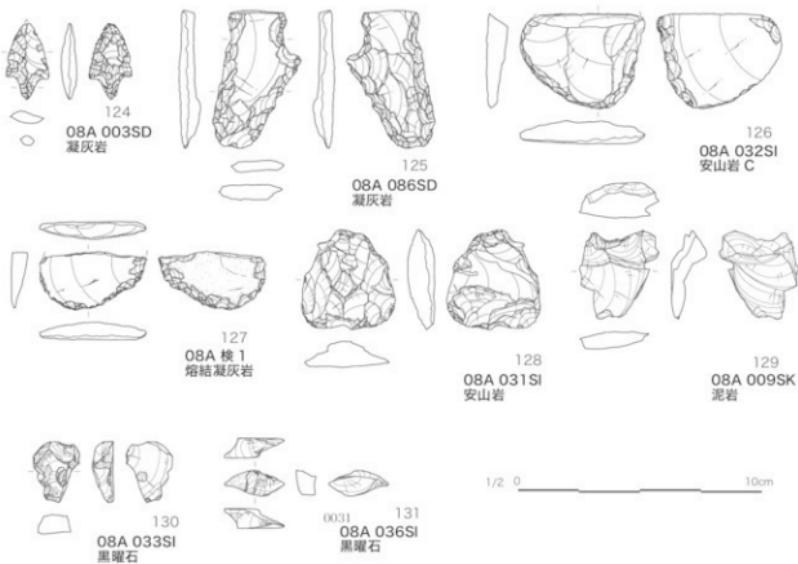
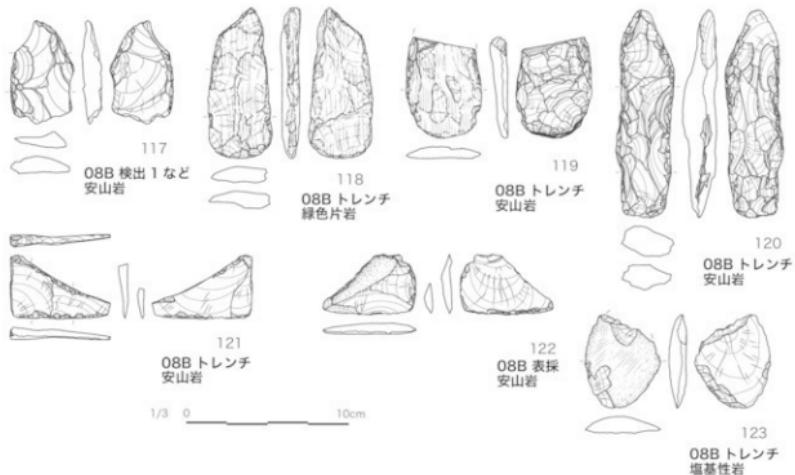


図 3-46 1期 出土石器・石製品実測図-13 (1:2/1:3)

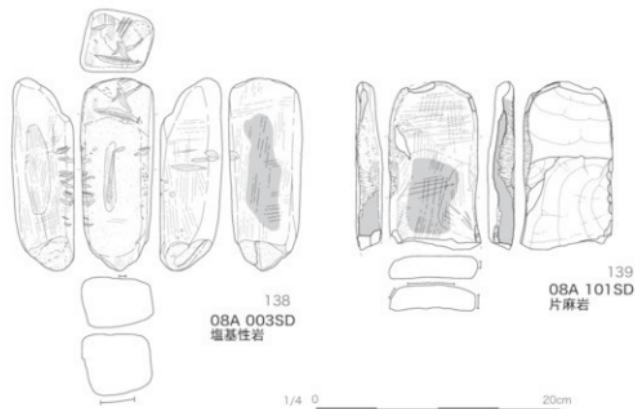
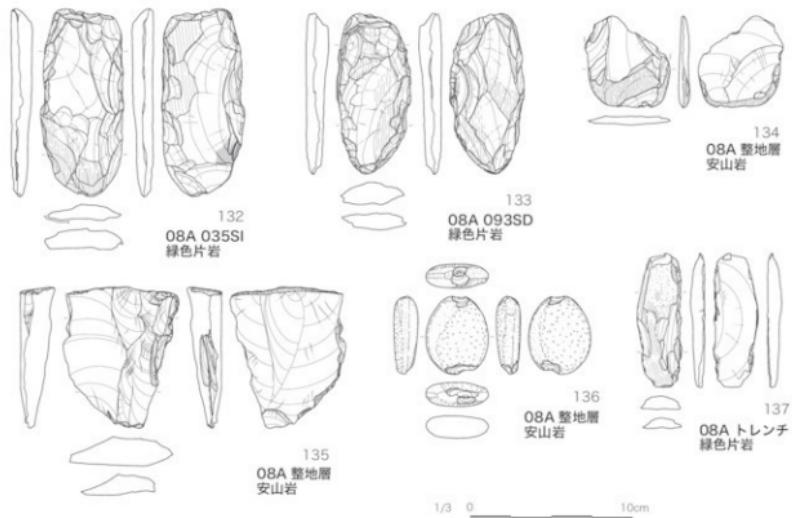


図 3-47 1期 出土石器・石製品実測図 -14 (1:3/1:4)



図 3-48 1 期 出土石器・石製品実測図 -15 (1:4)

A 区 -003SD-1

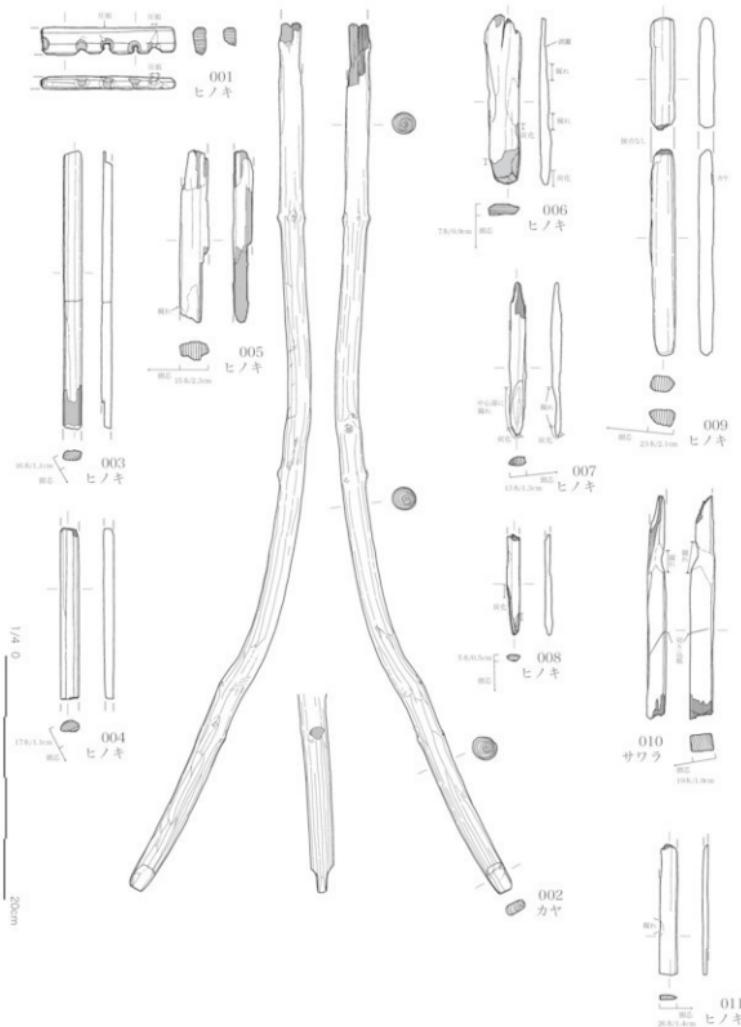
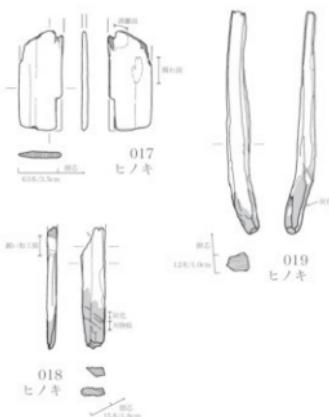


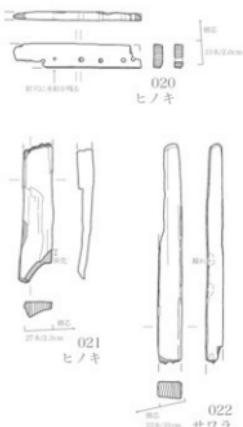
図 3-49 003SD 出土木製品実測図 -1 (1:4)



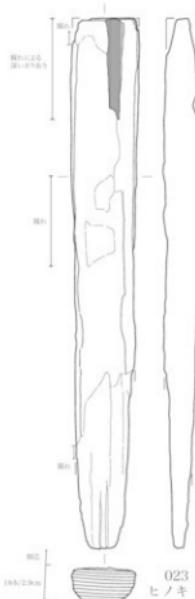
A区 -046NR



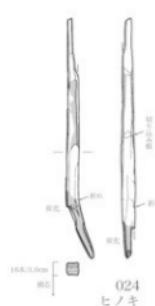
A区 -086SD



A区 -093SD



A区 -101SD



A区 -出土遺構不明



20cm

A区 -038SI

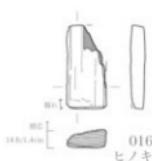


図3-51 その他の出土木製品実測図 (1:4)

第4章 自然科学分析

1. 新城市中央部、石岸遺跡の地下層序と堆積年代

鬼頭 剛

はじめに

新城市中央部に位置する石岸遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定の結果を報告する。

試料および分析方法

地下層序解析のため、調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。加速器質量分析法は $125\mu\text{m}$ の範囲により湿式分離を行ない、範囲を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC 製 1.5SDH)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の曆年代への較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 2σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された放射性炭素年代誤差に相当する95.4%信頼限界の曆年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る

確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ(Code No.; PLD)に依頼した。

分析結果

深掘層序

A区では調査区の南側において東西方向に2地点(地点1・地点2)、B区では調査区の北側で1地点(地点3)の計3地点でバックホーによる深掘を実施した(図4-1)。各地点の層序の特徴を以下に述べる。

A区南側の東寄りで深掘を行なった地点1では深度約4mの層序断面を得た(図4-2)。下位層より、標高78.55～79.65mは灰白色を呈する極粗粒砂層である。細礫を含み、全体に淘汰は良好である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まない。本層の最下部(標高78.56m)にて採取した木材片(試料1)と草本植物片(試料2)を放射性炭素年代測定用の試料とした。標高79.65～79.85mは灰黒色を呈する粘土層からなる。塊状で、堆積構造はみられない。本層の下部(標高79.67m)で放射性炭素年代測定用の炭化物(試料3)を採取した。標高79.85～80.19mは灰白色を呈する極粗粒砂層である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まず、淘汰は良好である。標高80.19～80.35mは灰黒色を呈する粘土層である。塊状で、堆積構造はみられない。本層の下部(標高80.21m)で放射性炭素年代測定用の炭化物(試料4)を採取した。標高80.35～80.53mは灰白色を呈する極粗粒砂層である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まない。

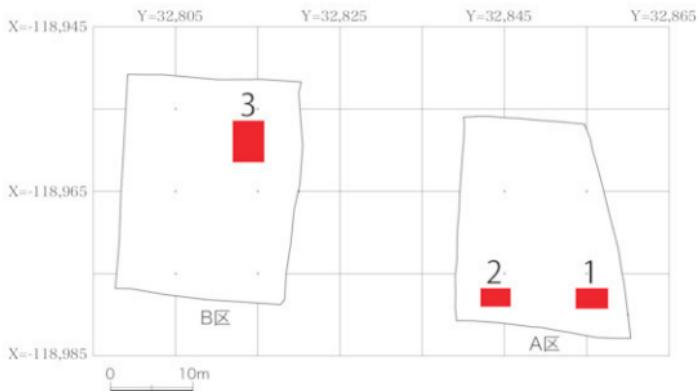


図 4-1 石岸遺跡における深掘地点
地点1

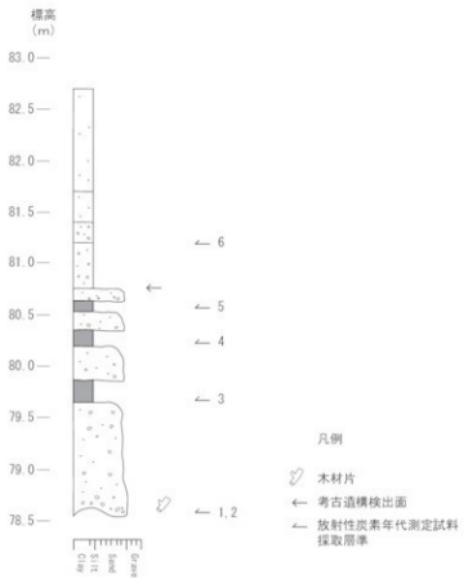


図 4-2 石岸遺跡 A 区（地点 1）における深掘層序断面

い。標高 80.53 ~ 80.63m は灰黒色を呈する粘土層である。塊状や堆積構造はみられない。本層の下部（標高 80.55m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 5）を採取した。標高 80.63 ~ 80.75m は灰白色の極粗粒砂層である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まない。本層と本層の上位層との境界付近が考古学的な遺構検出面である。標高 80.75 ~ 81.20m は暗灰色を呈する粘土層からなる。地層には細礫～極粗粒砂が混じる。本層の最上部（標高 81.18m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 6）を採取した。標高 81.20 ~ 81.40m は黄褐色を呈する粘土層からなる。極粗粒砂が混じる。標高 81.40 ~ 81.70m は灰色の粘土層である。本層も粗粒砂が混じる。標高 81.70 ~ 82.70m は灰色の粘土層である。粗粒砂が混じる。本層の頂部（標高 82.70m）

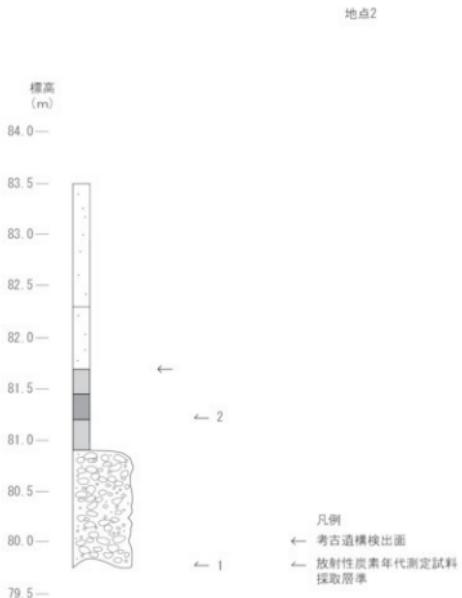


図 4-3 石岸遺跡 A 区（地点 2）における深掘層断面

は地表であり、現在の水田面となっている。

A 区南側の西寄りで深掘を行なった地点 2 では深度約 3.8m の層序断面を得た（図 4-3）。下位層より、標高 79.75 ~ 80.90m は中礫層である。角礫～亜角礫を主とした礫支持礫層である。淘汰は比較的良い。基質は極粗粒砂からなる。本層の最下部（標高 79.77m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 1）を採取した。標高 80.90 ~ 81.20m は褐色を呈する粘土層である。塊状で、堆積構造はみられない。標高 81.20 ~ 81.45m は黒褐色を呈する粘土層である。塊状・均質で、堆積構造はみられない。本層の下部（標高 81.21m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 2）を採取した。標高 81.45 ~ 81.70m は褐色を呈する粘土層である。塊状・均質で、堆積構造はみられない。本層と本層を覆う粘土層との境界付

地点2

近が考古遺構の検出面である。標高 81.70 ~ 82.30m は灰褐色の粘土層である。極粗粒砂が混じる。標高 82.30 ~ 83.50m は灰褐色の粘土層である。極粗粒砂が混じる。本層の頂部（標高 83.50m）が地表である。

B 区の北側で深掘を行なった地点 3 では深度約 5.5m の層序断面を得た（図 4-4）。下位層より、標高 79.40 ~ 79.90m は青灰色を呈する極粗粒砂層である。淘汰は良い。標高 79.90 ~ 80.00m は黒褐色の粘土層からなる。塊状・均質で、堆積構造はみられない。ブロック状に断片化した木材片が混じる。本層の下部（標高 79.91m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 1・試料 2）を採取した。標高 80.00 ~ 80.55m は青灰色を呈する極粗粒砂層である。中礫が混じり、淘汰は良い。標高 80.55 ~ 80.60m は黒褐色を呈する粘土層である。ブロック状に断片化した木材片が混じる。本層の下部（標高 80.56m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 3）を採取した。標高 80.60 ~ 80.90m は青灰色を呈する極粗粒砂層である。標高 80.90 ~ 81.16m は明灰白色を呈する細礫層である。角礫～亜角礫を主とした礫支持礫層である。淘汰は良い。基質は極粗粒砂からなり、雲母片の濃集がみられる。標高 81.16 ~ 81.60m は褐色の中礫層である。粘土ブロックが混じる。標高 81.60 ~ 82.00m は黒褐色を呈する粘土層である。中礫が混じる。本層の下部（標高 81.62m）より放射性炭素年代測定用の試料（試料 4）を採取した。土器片を分散して含み、本層と本層を覆う粘土層との境界付近（標高 82.00m）が縄文時代後期の遺構検出面である。標高 82.00 ~ 82.42m は暗灰色を呈する粘土層である。細礫が混じり、土器片が分散して含まれる。標高 82.42 ~ 83.02m は明褐色の粘土層で

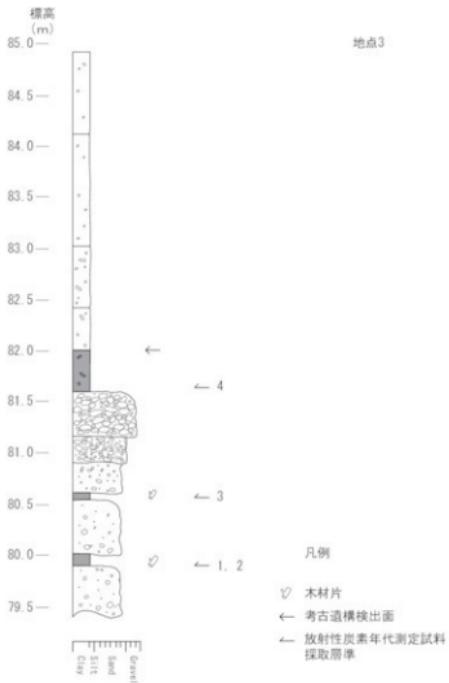


図 4-4 石岸遺跡 B 区（地点 3）における深掘層序断面

ある。細礫を含む。標高 83.02 ~ 84.12m は赤褐色の粘土層である。細礫が混じる。標高 84.12 ~ 84.92m は赤褐色の粘土層である。細礫～中礫が混じる。本層の頂部（標高 84.92m）は地表である。

放射性炭素年代測定

石岸遺跡では A 区の地点 1 で 6 試料、A 区の地点 2 で 2 試料、B 区の地点 3 で 4 試料の計 12 試料について放射性炭素年代測定を行ない、すべての試料で放射性炭素年代値が得られた（表 4-1 ~ 表 4-3）。古い年代値では、A 区の地点 2 にお

いて標高 79.75 ~ 80.90m の中礫層最下部（標高 79.77m）より採取した土壌が 7329 - 7247 cal yrs BP (5380 - 5298 BC) (PLD-26651) を、標高 81.20 ~ 81.45m にみられる黒褐色粘土層の下部（標高 81.21m）から採取した土壌が 8448 - 8380 cal yrs BP (6499 - 6431 BC) (PLD-26650) と 8400 年前～ 7200 年前代の値が得られた。なお、地点 2 では得られた数値年代と地層の累重関係との間で年代値の逆転現象が生じている。新しい年代値では A 区の地点 1 で認められ、標高 80.75 ~ 81.20m の暗灰色粘土層の最上部（標高 81.18m）から採取した生材が 230 - 170 cal yrs BP (1720 - 1780 AD) (PLD-13936) の値であった。深掘地点全体では、調査地点の西にある B 区の地点 3 では標高 80m ~ 82m までの層準で 5400 年前～ 4800 年前代の数値年代を示すのに比べて、調査地点の東寄りにある A 区の地点 1 では標高 78.5m ~ 81m までの層準で 5000 年前～ 2400 年前代と、東側の地点ほど新しい数値年代を示している。

考察

石岸遺跡調査地点における地下層序と堆積年代

石岸遺跡の地理的な位置を概説すると、調査地点は豊橋平野の最奥部（北東端）にあたる。新城市役所からは約 4km 北東にある。調査地点の北方には、山頂高度が約 500 ~ 600m の三河山地（あるいは三河高原）の一部で西から徳定雁峰（標高 655m）、片山雁峰（標高 608m）、須長雁峰（標高 688m）を山頂にもつ山地が連なっている。これらのうち連吾川は須長雁峰を山頂とし、集まった雨水は南へと流れ、北西から南東へ新城市森長を通り調査地のある須長に至る河川と、北

表4-1 石岸遺跡 A 区（地点 1）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料	調査区	標高	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\pm 1\sigma$ PDB (‰)	2σ 年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code
No.		(区)	(m)					(AD/BC, probab.)	(cal yrs BP, probab.)	No. (method)
1	1	A	78.56	種子粒砂層	木片	4416 ± 22	-27.17 ± 0.14	3100 - 2927 BC (93.0 %) 2263 - 2251 BC (2.4 %)	5049 - 4876 (93.0 %) 5212 - 5200 (2.4 %)	PLD - 13941 (AMS)
1	2	A	78.56	種子粒砂層	草本植物片	4049 ± 21	-27.28 ± 0.20	2631 - 2408 BC (90.7 %) 2831 - 2821 BC (1.1 %)	4680 - 4437 (90.7 %) 4780 - 4770 (1.1 %)	PLD - 13940 (AMS)
1	3	A	79.67	灰褐色粘土層	炭化物	3581 ± 21	-25.46 ± 0.19	1980 - 1884 BC (99.9 %)	3029 - 2833 (99.6 %)	PLD - 13937 (AMS)
1	4	A	80.21	灰褐色粘土層	炭化物	3581 ± 21	-27.89 ± 0.16	1980 - 1884 BC (99.9 %)	3029 - 2833 (99.6 %)	PLD - 13938 (AMS)
1	5	A	80.55	灰褐色粘土層	土壤	2409 ± 19	-22.2 ± 0.16	696 - 540 BC (74.2 %) 769 - 702 BC (21.2 %)	2645 - 2449 (74.2 %) 2718 - 2651 (21.2 %)	PLD - 13939 (AMS)
1	6	A	81.18	種子粒砂層 ～細緻じり粘土層 (区, 最小年輪)	生材	145 ± 17	-25.35 ± 0.15	1720 - 1700 AD (33.3 %) 1915 - 1945 AD (19.9 %) 1832 - 1860 AD (16.7 %) 1660 - 1700 AD (15.9 %)	230 - 170 (33.2 %) 35 - 6 (19.0 %) 119 - 70 (16.2 %) 282 - 251 (15.9 %)	PLD - 13936 (AMS)
								1796 - 1819 AD (11.5 %)	154 - 132 (11.5 %)	

表4-2 石岸遺跡 A 区（地点 2）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料	調査区	標高	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\pm 1\sigma$ PDB (‰)	2σ 年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code
No.		(区)	(m)					(AD/BC, probab.)	(cal yrs BP, probab.)	No. (method)
2	1	A	79.77	種子	土壤	6355 ± 23	-26.29 ± 0.15	5380 - 5298 BC (94.6 %) 5464 - 5446 BC (2.3 %) 5420 - 5410 BC (0.9 %) 5242 - 5225 BC (0.9 %)	7229 - 7247 (91.6 %) 7412 - 7395 (2.2 %) 7369 - 7359 (0.9 %) 7191 - 7184 (0.6 %)	PLD - 26651 (AMS)
2	2	A	81.21	灰褐色粘土層	土壤	7619 ± 26	-25.49 ± 0.17	6409 - 6421 BC (96.4 %)	8446 - 8330 (95.4 %)	PLD - 26650 (AMS)

表4-3 石岸遺跡 B 区（地点 3）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料	調査区	標高	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\pm 1\sigma$ PDB (‰)	2σ 年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code
No.		(区)	(m)					(AD/BC, probab.)	(cal yrs BP, probab.)	No. (method)
3	1	B	79.91	灰褐色粘土層	草本植物遺体	4667 ± 21	-29.94 ± 0.22	3477 - 3398 BC (81.3 %) 3517 - 3480 BC (23.1 %) 3386 - 3370 BC (11.0 %)	5426 - 5244 (81.2 %) 5466 - 5431 (23.1 %) 5335 - 5219 (11.0 %)	PLD - 26654 (AMS)
3	2	B	79.91	灰褐色粘土層	草本植物遺体	4712 ± 22	-28.60 ± 0.14	3459 - 3378 BC (49.4 %) 3620 - 3581 BC (25.0 %) 3533 - 3487 BC (21.0 %)	5400 - 5325 (49.4 %) 5579 - 5530 (25.0 %) 5482 - 5446 (21.0 %)	PLD - 26653 (AMS)
3	3	B	80.56	灰褐色粘土層	土壤	6815 ± 25	-27.50 ± 0.17	5738 - 5657 BC (96.4 %)	7887 - 7606 (95.4 %)	PLD - 26652 (AMS)
3	4	B	81.62	灰褐色中硬混じり粘土層	土壤	4397 ± 22	-25.03 ± 0.22	3091 - 1924 BC (96.4 %)	5040 - 4873 (95.4 %)	PLD - 26652 (AMS)

東から南西へ須長集落を通る河川とが調査地点のちょうど西側で合流する。石岸遺跡の調査地点はこの合流地点から115m 東にある。連吾川は調査地点からさらに南約2.5km で農川と合流する。調査地点と連吾川との間には標高80 ~ 85m で南北約380m、東西約110m の南北方向に細長い凸地形がある。さらに、調査地点の東には標高80 ~ 110m で南北方向に長い残丘状の尾根地形が連なっており、調査地点は先の凸地形とこの尾根地形との間に挟まれた谷状の凹地形の中にあ

る。凹地形の最大幅(東西幅)は約140m である。調査地点の現在の地表標高と連吾川の周りにひろがる水田面との標高差はおよそ3 ~ 5m である。

石岸遺跡にて深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、各地点で実施した深掘層序の層相は下位層でみられる礫や砂を主体とする粗粒な層相と、それらの層相を覆う粘土を主とする細粒なものとに大きく分けられた。下位層でみられる礫層は中礫～小礫からなり、砂層は極粗粒砂を主体とした。これは、調査地点にはかつて活

動的な河川流路が存在していたことを示し、礫層および砂層は黒褐色～灰黒色の粘土層を挟むため、活動的な流路は湿地を伴っていたと思われる。また、粗粒な地層の堆積年代について放射性炭素年代測定からは、調査地点西側のB区の地点3において、もっとも下位でみられる標高79.40～79.90mの極粗粒砂層を覆う黒褐色粘土層の下部（標高79.91m）から採取した草本植物遺体について、試料1では5426-5344 cal yrs BP (3477-3395 BC) (PLD-26654)、試料2では5408-5325 cal yrs BP (3459-3376 BC) (PLD-26655)と、ともに5400年前～5300年前代の値であった。その頃には活動的な流路が卓越する環境であったことがわかる。また、同じ地点3において砂層や礫層を覆う標高81.60～82.00mの黒褐色粘土層の下部（標高81.62m）より採取した土壌が5040-4873 cal yrs BP (3091-1924 BC) (PLD-26652)であった。このことから、5000年前～4800年前代には地点3では水理学的な低エネルギー環境へと移り変わったことがわかる。この黒褐色粘土層の頂部（標高82.00m）が縄文時代後期の遺構検出面であることから、水理環境の変化に伴ってヒトの生業活動が行なわれるようになったことがわかる。この黒褐色粘土層をさらに覆う標高82.00～82.42mの粘土層と、標高82.42～83.02mの粘土層からも土器片が地層中に分散するため、5000年前～4800年前以降も連續とヒトが生活を続けていた様子がうかがえる。

いっぽう、調査地点東側の地点1(A区)でも標高78.55～79.65mの極粗粒砂層の最下部（標高78.56m）より採取した木材片（試料1）が5049-4876 cal yrs BP (3100-2927 BC) (PLD-13941)、草本植物片（試料2）が4580-4437 cal yrs BP (2631-2488 BC) (PLD-13940)と、5000年前～4400年前代に調査地点の西側（地点3）と同様に活動的な河川流路であったことがわかる。この極粗粒砂層を覆って粘土層と極粗粒砂層とが互層するようになる。標高79.5～80.5mにみられる互層の堆積年代について、

下位層より、標高79.65～79.85mの粘土層下部（標高79.67m）で3929-3833 cal yrs BP (1980-1884 BC) (PLD-13937)、標高80.19～80.35mの粘土層下部（標高80.21m）で3929-3833 cal yrs BP (1980-1884 BC) (PLD-13938)、標高80.53～80.63mの粘土層下部（標高80.55m）で2645-2489 cal yrs BP (696-540 BC) (PLD-13939)と3900年前～2400年前代を示した。このことから、西側（地点3）が5000年前～4800年前代に水理学的な低エネルギー環境へと移り変わったのに対して、東側（地点1）では5000年前～2400年前代に渡り活動的な河川流路が流下するような高エネルギー環境であったことがわかる。考古学的にはA区の東端に南北方向の河道跡が検出されており、その河道の東縁辺では7世紀前半～9世紀前半に大きな土地改変が行なわれているという所見（樋上、2009）から、少なくともそれ以前には河川跡であったことも調和的である。

謝辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤 茂氏・安昭炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏・小林克也氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

樋上 畏, 2009, 石岸遺跡, 平成20年度愛知県埋蔵文化財センター「年報」, 53-56.

2. 石岸遺跡出土木材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

雁峰山の南麓で、連吾川左岸の東側緩斜面に位置する石岸遺跡では、溝跡などから出土した木製品や加工木、自然木の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、住居跡である038SIから3点、溝跡である001SDから1点、003SDから73点、086SDから16点、093SDから1点、101SDから4点、自然流路である046NRから5点、出土遺構不明の試料が3点の、計106点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾

燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹であるカヤとモミ属、マツ属複雜管束亞属、ヒノキ、サワラの5分類群と、広葉樹であるクリとスダジイ、コナラ属アカガシ亞属（以下アカガシ亞属と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、エノキ属、クスノキ科、サカキ、カマツカ、カエデ属の9分類群の、計14分類群が産出した。ヒノキが60点で最も多く、カエデ属が9点、モミ属が8点、コナラ節が6点、マツ属複雜管束亞属が4点、サワラとクリ、アカガシ亞属、クスノキ科、カマツカが各3点、カヤとスダジイ、エノキ属、サカキが各1点の計106点である。同定結果を表1に、一覧を表4-4に示す。

表4-4 石岸遺跡出土木材の樹種同定結果

樹種/器種	火切りうす	弓	板	角棒	丸棒	杭	加工木	加工木？	自然木	合計
カヤ			1							1
モミ属						1	7			8
マツ属複雜管束亞属			2				2			4
ヒノキ	1		23	7	1	1	22	2	3	60
サワラ				2			1			3
クリ						2			1	3
スダジイ						1				1
コナラ属アカガシ亞属						1			2	3
コナラ属コナラ節						6				6
エノキ属						1				1
クスノキ科						1			2	3
サカキ									1	1
カマツカ						3				3
カエデ属						3			6	9
合計	1	1	25	9	1	2	50	2	15	106

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc.
イチイ科 図 4-5 1a-1c(No.2)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～5細胞高となる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2～4個みられる。また仮道管の内壁には、2本1対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

(2) モミ属 *Abies* マツ科 図 4-5
2a-2c(No.29)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1～12細胞高となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高地に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高地に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きくて、保存性に優れる。

(3) マツ属 複維管束亞属 *Pinus* subgen.
Diplastylon マツ科 図 4-5 3a-3c(No.10)

仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は、単列のものと、水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亞属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。アカマツもクロマツも、材質は重硬で、切削等の加工は容易である。

(4) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et

Zucc.) Endl. ヒノキ科 図 4-5 4a-4c(No.22),
5a-5c(No.36)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～8細胞高となる。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(5) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図 4-5・6
6a-6c(No.30), 7a-7c(No.35)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや厚く、早材から晩材への移行はやや急である。分野壁孔は単列で、1～11細胞高となる。分野壁孔はやや壁孔が開いて斜めに傾いたヒノキ型で、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図 4-6 8a-8c(No.83)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は単列で同性となる。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(7) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino)
Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図
4-6 9a-9c(No.85)

年輪のはじめに中型の道管が断続的に数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木

の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

(8) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図4-6 10a-10c(No.81)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、單列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定が出来ない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強韌で耐水性があり、切削加工は困難である。

(9) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinns* ブナ科 図4-6・7 11a-11c(No.80)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、單列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強韌で、切削加工はやや難しい。

(10) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図4-7
12a-12c(No.79)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を減じた道管が多数複合して斜線～接線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～2列が方形となる異性で、1～4列となる。また放射組織は、不完全な鞘細胞を有する。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬いが、まとまって生育しないため、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(11) クスノキ科 *Lauraceae* 図4-7

13a-13c(No.88)

やや小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1～3列となる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科
図4-7 14a-14c(No.100)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～2列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強韌、坚硬で、切削加工は困難である。

(13) カマツカ *Poorthiaea villosa* (Thunb.) Decne. var. *villosa* バラ科 図4-7 15a-15c(No.52)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～4列となる。

カマツカは温帯から暖帯の山地に分布する落葉低木の広葉樹である。材は重硬、強韌で、切削加工は困難である。農具、工具などの柄に多く用いられる。

(14) カエデ属 *Acer* カエデ科 図4-7
16a-16c(No.90)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部組織の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～6列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通に

みられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

4. 考察

木製品では、弓を除くすべての器種でヒノキが最も多くみられた。火切りうすと丸棒、加工木?ではヒノキのみがみられ、板材ではヒノキの他にマツ属複維管束亜属、角棒ではサワラ、杭ではモミ属がみられた。針葉樹は木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持っているが、その中でもヒノキは耐朽性が高い（伊東ほか、2011）。そのため、多くの木製品で用いられた可能性がある。杭でみられたモミ属は、保存性が良いという材質を持つ（伊東ほか、2011）。杭材は地中に打ち込んで使用するため、耐朽性が高いヒノキと保存性が高いモミ属が利用されたと考えられる。

弓には、カヤが用いられていた。カヤは弾力性と加工性が良く、耐朽性にも優れる良材であるため（伊東ほか、2011）、弓に選択されたと考えられる。

石岸遺跡も含まれる三河地方では、7～8世紀頃の木製品にはヒノキ科の木材が多く利用されていることが報告されている（樋上、2012）。弓の用材では、各時期を通して三河地方ではイヌガヤの用材が多く、次いでマキ属が多くみられるが（樋

上、2012）、当遺跡の弓はカヤであった。7～8世紀頃の弓は、田原市の山崎遺跡でマキ属の弓1点がみられるが（伊東・山田編、2012）、他に事例は確認できず、弓におけるカヤの利用傾向は不明であった。

加工木でもヒノキが最も多かったが、ヒノキ以外の針葉樹および広葉樹も多くみられた。また自然木ではカエデ属が最も多く、ヒノキとクリ、アカガシ亜属、クスノキ科、サカキがみられた。自然木は遺跡周辺に生育していた樹木である可能性が高く、ヒノキなどの針葉樹と、アカガシ亜属、クスノキ科、サカキなどの常緑広葉樹林、クリとカエデ属などの落葉広葉樹林の混交林が広がっていた可能性がある。なお加工木の樹種構成をみると、自然木でもみられた広葉樹が多く確認できることから、加工木は遺跡周辺の樹木を伐採利用していたと考えられる。

引用文献

- 樋上 異（2012）東海・中部—三重県・岐阜県・愛知県・静岡県—、木の考古学—出土木製品用材データベース—、193-209。
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、青海社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—、449p、青海社。

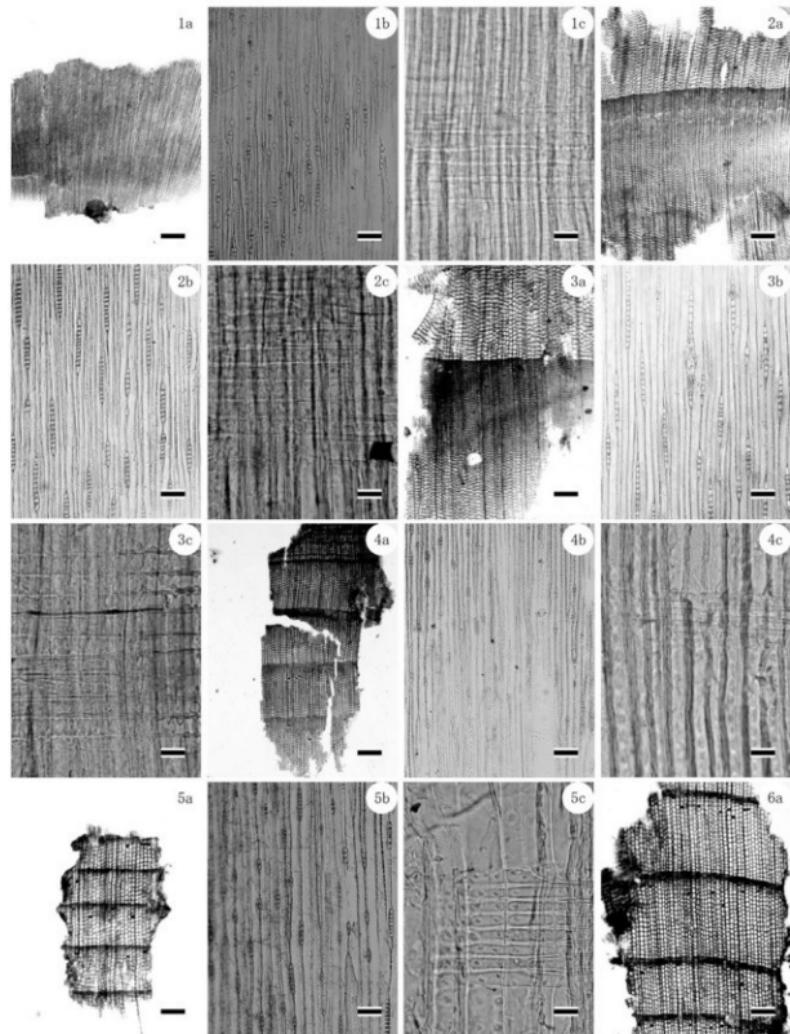


図 4-5 石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -1

1a-1c. カヤ (No.2)、2a-2c. モミ属 (No.29)、3a-3c. マツ属複維管束亞属 (No.10)、4a-4c. ヒノキ (No.22)、
5a-5c. ヒノキ (No.36)、6a. サフラ (No.30) a: 横断面 (スケール = 250 μm), b: 接線断面 (スケール = 100 μm), c:
放射断面 (スケール = 25 μm)

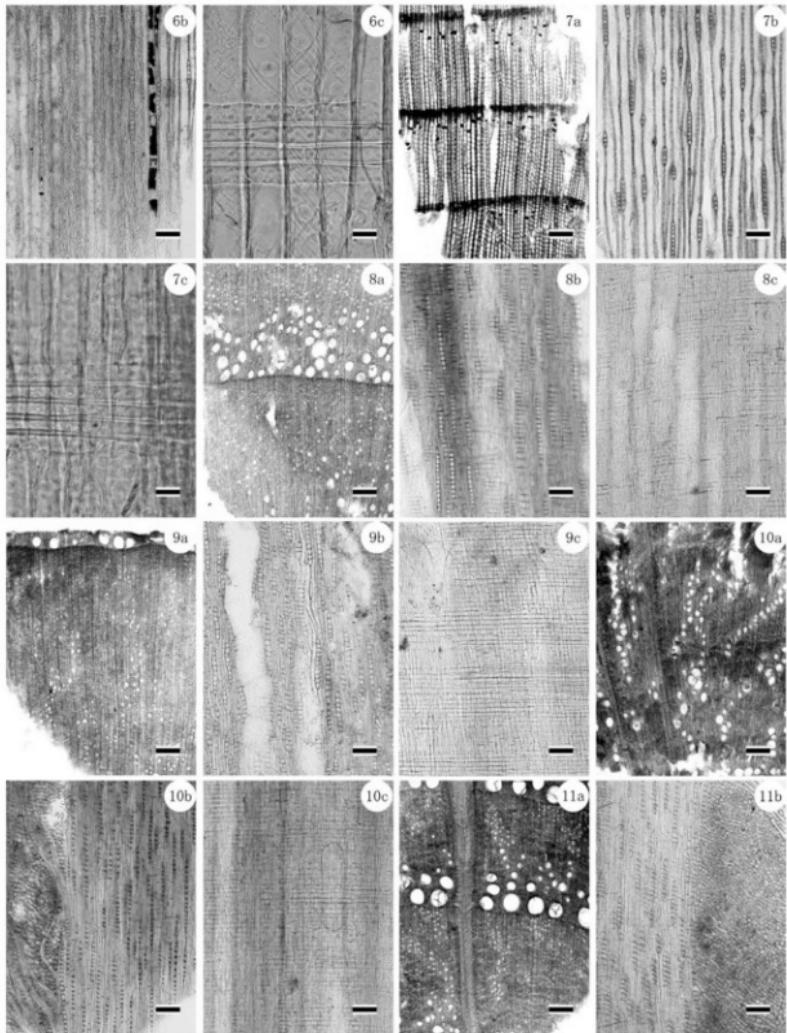


図 4-6 石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -2

6b-6c. サワラ (No.30), 7a-7c. サワラ (No.35), 8a-8c. クリ (No.83), 9a-9c. スダジイ (No.85), 10a-10c. コナラ属アカガシ亜属 (No.81), 11a-11b. コナラ属コナラ節 (No.80) a: 横断面 (スケール = 250 μm), b: 接線断面 (スケール = 100 μm), c: 放射断面 (スケール = 6-7:25 μm, 8-10:100 μm) 10(12)

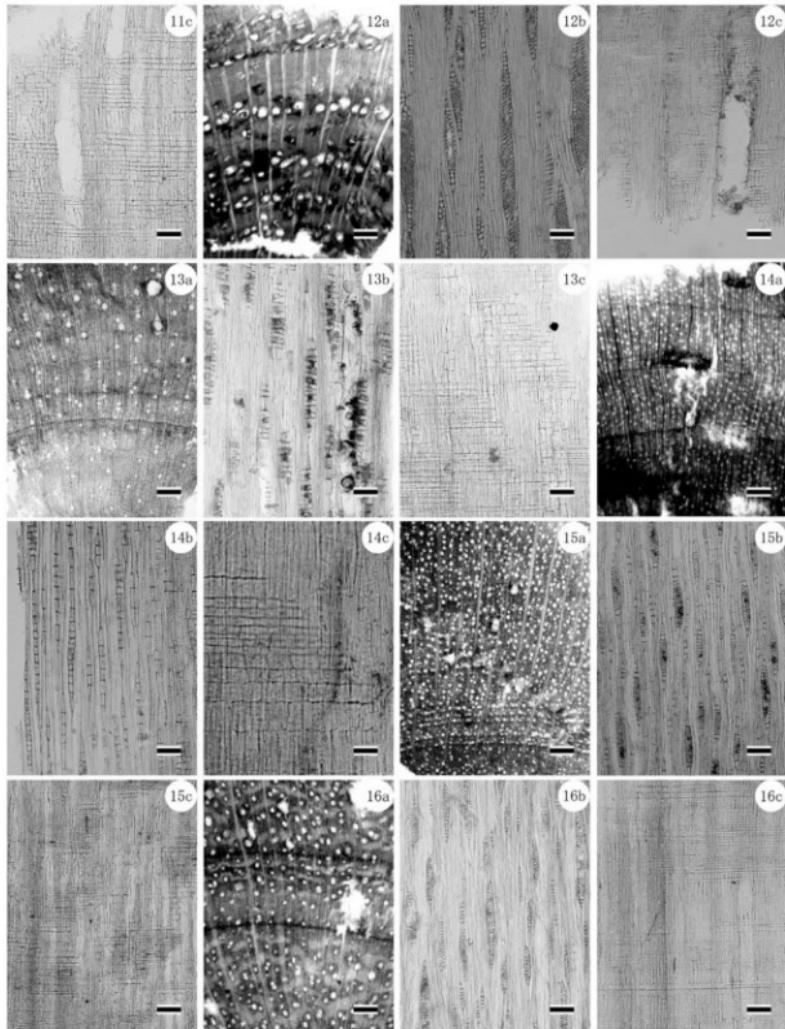


図 4-7 石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -3

11c. コナラ属コナラ節 (No.80)、12a-12c. エノキ属 (No.79)、13a-13c. クスノキ科 (No.88)、14a-14c. サカキ (No.100)、15a-15c. カマツカ (No.52)、16a-16c. カエデ属 (No.90) a: 横断面 (スケール = 250 μm)、b: 接線断面 (スケール = 100 μm)、c: 放射断面 (スケール = 14:50 μm × 14 以外: 100 μm)

3. 石岸遺跡出土の大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ・スダルシャン（バレオ・ラボ）

1. はじめに

愛知県新城市須長に位置する石岸遺跡は、雁峰山の南麓、豊川の支流である連吾川左岸にある残丘の東側緩斜面に立地する。遺構検出面の標高は、約80mである。ここでは、7～8世紀の溝跡などから出土した大型植物遺体を同定し、食用などとして利用された植物あるいは遺跡周辺における栽培状況や植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は、発掘調査現場において目視で取り上げられた21試料である。対象としたのは、A区で検出された溝跡である003SDから10試料と、086SDから1試料、093SDから1試料、101SDから7試料、自然流路である046NRから1試料、包含層から1試料である。考古学的な所見による試料の時期は、いずれも7世紀から8世紀である。

大型植物遺体の同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。また、形状により、完形と動物食痕、打撃痕、破片に分類した。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のイヌガヤ種子1分類群と、広葉樹のモモ核とスモモ核2分類群の、計3分類群が得られた（表4-5）。また計測可能なモモとスモモの一覧表を表4-6に示す。

以下に、産出した大型植物遺体について遺構別に記載する。

003SD:モモが21点（完形11点、動物食痕4点、破片8点）、イヌガヤ（破片）が1点得られた。

表4-5 石岸遺跡から出土の大型植物遺体（括弧内は破片数）

分類群	種子	A区					
		遺構名	003SD	086SD	093SD	101SD	046NR
			遺構の種類	溝跡			包含層
イヌガヤ	(1)					7~8世紀	
モモ	核(完形)	11				7	1
	核(動物食痕)	4				2	
	核(打撃痕)			(1)			
	核(破片)		(8)		(3)	(12)	
スモモ	核					1	

086SD：モモ（打撃痕）が1点得られた。
093SD：モモ（破片）が3点得られた。
101SD：モモが21点（完形7点、動物食痕2点、破片12点）、スマモ（完形）が1点得られた。
046NR：モモ（完形）が1点得られた。

包含層：疊であった。

次に、産出した大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) イヌガヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. 種子 イチイ科

赤褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形。側面観は長卵形で両端がやや尖る。表面には顆粒状の浅い隆起がある。種皮は厚く硬い。長さ15.1mm、幅10.1mm。

(2) モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は卵形～楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側面には縫合線に沿って深い溝に入る。計測可能な24点の大きさは、長さ18.9～35.4（平均 22.8 ± 3.9 ）mm、幅16.5～22.4（平均 19.0 ± 1.7 ）mm、厚さ12.4～17.5（平均 15.6 ± 1.2 ）mmであった。

(3) スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核 バラ科

赤褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は紡錘形。縫合線に沿ってやや深い溝に入る。表面は平滑だが、臍付近に縱方向の不規則な皺がある。長さ15.5mm、幅12.1mm、厚さ8.2mm。

4. 考察

7～8世紀の溝跡などから産出した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物のモモとスマモ、野生植物のイヌガヤが得られた。モモの形状は完形個体が多いが、半分以下に割れた個体やアカネズミによると推定される円形の食痕を持つ個体も見いだされた。086SDでは、縫合線に沿って割れていないため打撃痕と判断した個体が1点含まれていた。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代

ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代では比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、鎌倉期では大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期になると大型になり、平均核長2.69cm、最大で3.8cm程度の核がみられるとしている。石岸遺跡から出土したモモ核は、平均で長さ 2.28 ± 0.39 cm、幅 1.90 ± 0.17 cm、厚さ 1.56 ± 0.12 cmで、大きさの変異に幅があり、比較的大きくて縦長のタイプ（長さ3.56cm、幅2.24cm、厚さ1.53cm：図4-8-2）と小さくて丸みの強いタイプ（長さ2.38cm、幅2.06cm、厚さ1.61cm：図版4-8-4）がみられた。また、モモは食用可能な植物であるが、呪術的な意味を持つため、しばしば祭祀との関連が推定される。石岸遺跡では溝跡から46点が産出したが、特定の溝跡や位置から集中して出土する産状はみられなかった。

イヌガヤは種子内部の胚乳に油分を含むため、油として利用可能な植物である（長沢、2012）。1点しか産出していないが、堅い種子が破片で産出しており、利用された可能性がある。

今回検討したのは、発掘調査中に目視で取り上げられた種実で、良好な状態で残存していた。したがって今後、堆積物中に含まれる大型植物遺体を解析すれば、当時の植生や植物利用についてのより詳細な検討が可能になると思われる。

引用文献

- 長沢 武（2012）野外植物民俗事苑、443p、ほ
おづき書籍。
新津 健（1999）遺跡から出土するモモ核につ
いて—山梨県内の事例から—、山梨考古学論集
IV、

表4-6 石岸遺跡から出土した計測可能なモモ・スモモ一覧（括弧内は破片値（mm））

地区	グリッド	遺構名	分類群	部位	長さ	幅	厚さ	形状	図版No.
AI区	10I12k	003SD	モモ	核	27.3	22.2	17.5	完形	No.3
			モモ	核	23.1	20.0	(15.1)	完形	
AI区	10I13j	003SD	モモ	核	25.0	20.3	15.9	完形	
			モモ	核	22.0	(21.0)	16.3	動物食痕	
AI区	10I13k	003SD	モモ	核	23.8	20.6	16.1	完形	No.4
			モモ	核	20.0	18.9	16.0	完形	
			モモ	核	20.6	17.5	15.1	完形	
			モモ	核	(18.4)	16.5	13.6	完形	
			モモ	核	20.1	(17.9)	14.9	動物食痕	
			モモ	核	19.2	17.2	14.7	完形	
			モモ	核	19.6	18.3	16.7	完形	
AI区	10I14k	003SD	モモ	核	20.3	18.6	15.6	完形	
			モモ	核	23.6	(20.2)	17.0	動物食痕	No.8
			モモ	核	29.4	(21.7)	(12.8)	動物食痕	No.7
			モモ	核	20.3	18.6	15.6	完形	
			モモ	核	35.6	22.4	15.3	完形	No.2
AI区	10I14k	086SD	モモ	核	25.0	17.7	(8.9)	打撃痕	No.6
AI区	10I12j	101SD	モモ	核	22.2	20.0	15.8	完形	
			モモ	核	19.8	17.0	16.2	完形	
			モモ	核	20.6	19.7	16.8	完形	
			モモ	核	22.8	18.6	14.9	完形	
AI区	10I13j	101SD	スモモ	核	15.5	12.1	8.2	完形	
			モモ	核	21.0	20.5	16.9	完形	
			モモ	核	24.7	18.4	12.4	完形	
AI区	10I13j	046NR	モモ	核	(19.2)	(10.6)	15.3	動物食痕	No.9
			モモ	核	18.9	17.4	13.6	完形	No.5



スケール 1-10:5mm

図 4-8 石岸遺跡から出土した大型植物遺体

1. イヌガヤ種子 (003SD, 10I12k)、2. 毛モ核完形 (003SD, 10I14k)、3. 毛モ核完形 (003SD, 10I12k)、4. 毛モ核完形 (003SD, 10I13k)、5. 毛モ核完形 (046NR, 10I13j)、6. 毛モ核打撃痕 (086SD, 10I14k)、
7・8. 毛モ核動物食痕 (003SD, 10I14k)、9. 毛モ核動物食痕 (101SD, 10I13j)、10. スモモ核 (101SD,
10I12j)

4. 石岸遺跡の黒曜石原産地同定

井上 嶽（第四紀 地質研究所）

1. 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製J SX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（FP法）による自動定量計算システムが採用されており、6°C～92°Cまでの元素分析ができる。ハイパワーX線源（最大30 kV、4 mA）の採用で微量試料～最大290 mm²×80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクFP法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30 kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量＝0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量%）でSiO₂-Al₂O₃-Fe₂O₃-TiO₂, K₂O-CaOの各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

2. 関東・中部・東海の黒曜石

2-1-1 長野県

長野県内に分布する黒曜石は、和田岬周辺の西餅屋、東餅屋、小深沢地区をあわせた和田岬系—1、男女倉5～7地区と星ヶ塔地区をあわせた和田岬系—2、北八ヶ岳の麦草岬周辺と冷山地区をあわせた蓼科系の3地域に分かれる。和田岬系の黒曜石はフォッサマグナ中央部の大規模流紋岩中に産する。高松山-虫倉山の南斜面を北西-南東方向に走る鷹山断層の南側での黒曜石はガスの抜けた気泡痕がなく、均質で、ハンマーでうち欠くと貝殻状に割れ、鋭利な刃先が打ち出される黒曜石である。この黒曜石を産する流紋岩は新生代第四紀の約70～130万年前に噴出、あるいは貫入したものである（手島、1994）。麦草岬と冷山の黒曜石は第四紀に噴出した八ヶ岳火山群の丸山溶岩流に被覆された同じ流紋岩の中に形成されたもので、26～27万年前とされている（河内、1974, 1998）。

A) 和田岬系-1

a 長野県和田岬西餅屋

西餅屋の黒曜石は和田岬の西側に隣接する標高1657 mの山体を取り囲んでリング状に分布する。この黒曜石は現在、芙蓉バーライト（株）によつて採石されている。試料は同社の採掘現場である坑道内で採取した。坑道内の黒曜石岩体は全体として亀裂が多く、10～15 cmの角礫状であるが一部に30～50 cm大のものもある。黒曜石は黒色で気泡跡に乏しく、小片にすると透明性が高く、貝殻状に割れる。

b 長野県和田村東餅屋

和田峠東の東餅屋の黒曜石は標高 1500 m 付近の採石場跡の露頭に分布し、厚さ 1 ~ 2 cm の薄い黒曜石脈が流紋岩と互層して産する。黒曜石脈の厚いところでは 15 ~ 20 cm、黒色で気泡跡と亀裂が多く 3 ~ 5 cm の小角礫に分離する。

c 長野県和田村小深沢

小深沢の黒曜石は和田峠北のビーナスラインの道路沿い標高 1600 m 付近に分布する。現在黒曜石はほとんど採掘されつくされその規模は定かではない。試料はこの採石場跡の法面から採取した。法面は高さ約 30 m、幅 80 ~ 100 m と広い。顆粒状の 5 mm ± の黒曜石が厚さ約 1 ~ 2 cm の縞状の流紋岩中に互層して挟まっている。本来の黒曜石岩体はもっと大きいと推察される。その痕跡として段切りした法面で 10 ~ 15 cm の角礫状のものが採取される。この黒曜石は黒色で気泡跡に乏しく、貝殻状に割れる。

B) 和田峠系—2

a 長野県和田村男女倉

男女倉地区的黒曜石は男女倉川の東側、標高 1300 ~ 1350 m の斜面に分布し、北から男女倉—5、6、7 とほぼ南北に分類されている（和田村教育委員会、1993）。

男女倉—5 の黒曜石は標高 1350 m の山腹の南側斜面から沢に至る地すべり地内で採取される。この地すべり地末端を横断する林道の切通し法面（高さ約 15 m）に斜面上部から移動し、堆積した多量の黒曜石岩塊が露出している。黒曜石は黒色で 50 ~ 60 cm の亜円礫で気泡跡が点在する。男女倉—6 は黒曜石の採石が行われた跡地で、黒曜石の岩塊は黒色でジョイントが多く、5 ~ 7 cm の角礫状を呈し、気泡跡が多い。

男女倉—7 は林道路盤に露出するもので、男女倉—6 と連続する黒曜石である。

b 長野県和田村星ヶ塔

星ヶ塔の黒曜石は和田峠東方、新和田トンネル調査側出口の東を流下する御料沢の上流域、標高 1576 m の山体にリング状に分布する。現在は山体北側斜面の標高 1350 ~ 1400 m で芙蓉パラライト（株）によって黒曜石が採石されている。黒曜石の試料採取は現在稼働中の採石場の岩体で行なった。黒曜石は幅 20 ~ 25 m、高さ約 10 ~ 15 m の岩体で、ジョイントが多く入り、10 × 5 cm 程度の角礫となるが大きなものでは 50 × 30 cm のものもある。黒曜石は黒色で気泡跡に乏しく、均質で、貝殻状に割れる。薄く削ると透明となる。

c 長野県長門町鷹山

鷹山の黒曜石は標高 1350 ~ 1400 m の鷹山部落の鷹山川沿いに河床堆積物として分布する。大きなものでは人頭大のものが採取されたといわれているが、現在はベンション脇の支流の小さな法面と支流の河床中で採取される。黒曜石は黒色、硬質で、打ち欠いた薄い断面では透明で、気泡跡に乏しく、均質で、貝殻状に割れる。

C) 豊科系

麦草峠と冷山との間には丸山溶岩が広く分布し、両地域の黒曜石は異なる時期に生成したよう見えるが冷山と麦草峠の黒曜石は同時期の流紋岩の中に生成したものである（河内、1974、1998）。冷山の黒曜石はサカサ川の上流域の標高約 1800 m 付近に広く分布し、麦草峠の黒曜石は麦草峠（標高 2120 m）から白駒池駐車場の東側、国道 299 号の道路法面にかけての広い地域に分布する。両者の距離は直線距離で、約 3.0 km である。

a 長野県茅野市冷山

冷山の黒曜石は麦草峠の西斜面で、サカサ川の上流域の標高約 1800 m 付近に広く分布している。露頭は高さ 10 ~ 15 m、幅 50 ~ 70 m の広

い範囲で急崖をなす。露頭の下部では黒曜石は厚さ1~2cm、3~5mmの顆粒状を呈し、黒曜石と流紋岩との間で厚さ2~3cmの互層をなす。黒曜石は上部にむかって厚くなり、最上部では1m+の厚さを有し、黒色で気泡跡に乏しく、透明性が高い。岩塊では黒色であるが、貝殻状細片では透明となる。

b 長野県八千穂村麦草峠

麦草峠の黒曜石は麦草峠（標高2120m）から白駒池駐車場の東側、国道299号の道路法面にかけての広い地域に分布する。白駒池駐車場の東側、道路法面両側に露頭する黒曜石の岩体は30×50mと大きく、黒曜石は黒色で気泡跡が点在し、露頭ではジョイントが多く5~8cm程度の角礫に分離する。この岩体を中心として斜面上部と下部では黒曜石は貧弱となり、流紋岩の中に3~5mmの顆粒状の黒曜石として互層する。

3. 分析結果

表4-7 化学分析表には分析結果、表4-8 原産地対比表には分析結果に基づいて原産地も記載している。

1) 図4-9 R b-S r図に示すように、和田岬系-1は1個も検出されず、和田岬系-2が中心となる。

2) 最も多く検出されたのは弱被熱・和田岬系-2が5個、弱被熱・和田岬系-2 Caタイプが3個である。

3) 弱被熱・和田岬系-2 Caタイプとは焼成の際に小枝など木類の火に当たったもので、弱被熱・和田岬系-2のK aタイプとは火の種類が異なると推察される。

4) 和田岬系-2のうち男女倉5は黒色でガスの抜けた小さな跡があり均質ではなく、透明感のある材質からするといし石岸遺跡の遺物は均質な星ヶ塔に近い。

引用文献

- 井上 嶽 (2000) 東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析(XRF) 北越考古学、第11号、23-38/
- 井上 嶽 (2001) テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言、軽石学雑誌、第7号 23-51.
- 井上 嶽 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 関東・中部・東海編
- 井上 嶽 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 東北・北陸編
- 井上 嶽 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 北海道編
- 井上 嶽 (2008) 東北日本の原産地黒曜石写真集

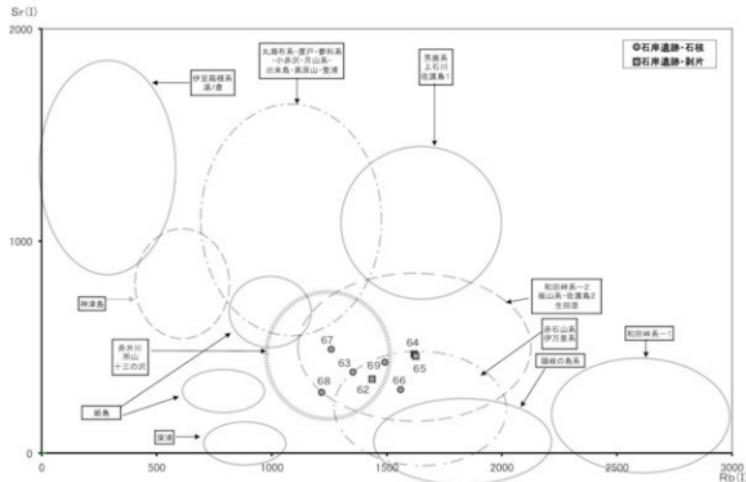


図 4-9 石岸遺跡 Rb – Sr 図

表 4-7 化学分析表

試料名	Na2O	MgO	SiO2	Al2O3	FeO	TiO2	SnO2	PbO	Cr2O3	ZrO2	NiO	Rb	Sr	Y	La	Ce	Eu	Gd	Yb	Lu	Yt	Yb/Yb	La/Yb	Eu/Eu	Ce/Ce	Y/Y	Yb/Y	Lu/Lu	Yt/Yt	Yt/Yb	Yt/Lu	Yt/Yb/Y	Yt/Lu/Y	Yt/Yt/Yb	Yt/Yt/Lu	Yt/Yt/Yb/Y	Yt/Yt/Lu/Y
IS-64	33.0095	0.0000	11.7728	27.7792	0.5643	4.8463	0.5419	0.2343	0.1165	0.0832	0.0083	0.0065	0.0006	0.0192	99.9993	341	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000			
IS-65	30.0182	0.0000	11.8690	27.4346	0.5660	4.8362	0.5407	0.2446	0.1145	0.0843	0.0083	0.0067	0.0002	0.0206	99.9993	1353	362	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000			
IS-66	29.8875	0.0000	11.2809	25.4214	0.6082	7.8598	0.2965	0.1477	0.1254	0.1051	0.0341	0.0100	0.0027	0.0221	100.0000	1619	465	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000			
IS-67	29.9409	0.0000	11.8025	27.6482	0.6082	4.9867	0.5371	0.1639	0.1271	0.1129	0.0314	0.0090	0.0007	0.0203	100.0000	1623	465	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000			
IS-68	30.9112	0.0000	11.8562	27.3024	0.6571	5.0347	0.5160	0.1168	0.1146	0.0301	0.0059	0.0045	0.0161	100.0000	1559	300	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000				
IS-69	2.9498	0.0000	10.8677	79.4069	0.5861	4.7929	0.5024	0.1615	0.1139	0.0407	0.0228	0.0060	0.0048	0.0126	99.9993	1260	465	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000			
IS-70	2.9116	0.0000	11.2409	78.9706	0.5899	4.6133	0.5402	0.1265	0.0935	0.0614	0.0218	0.0062	0.0060	0.0170	99.9993	1217	287	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000			
IS-71	3.1180	0.0000	11.1100	78.3118	0.5994	5.1832	0.4857	0.1752	0.1090	0.0882	0.0264	0.0077	0.0046	0.0108	99.9993	1403	470	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000			

表 4-8 原産地対比表

試料名	原産地	器種	整理番号	登録番号
IS-64	弱被熱、和田岬系-2	剥片	241	74
IS-65	弱被熱、和田岬系-2	剥片	426	
IS-67	弱被熱、和田岬系-2	石核	772	18
IS-68	弱被熱、和田岬系-2	石核	833	48
IS-69	弱被熱、和田岬系-2	石核	1023	49
IS-62	弱被熱、和田岬系-2	C a 剥片	21	
IS-63	弱被熱、和田岬系-2	C a 石核	31	
IS-66	弱被熱、和田岬系-2	C a 石核	769	17

第5章 総括

この石岸遺跡に所在した、柱掘り方が1mを超える大型総柱建物650・1013SBに関連して、古代（3期）の遺構群について纏め直すことにより、総括としたい。

第1章で詳述したように、本遺跡の古代はおむね7世紀中葉から10世紀後半におよぶ。そして、それを3-1～3-4期に区分して変遷を示した（表5-1・図5-1）。

3-1期（7世紀中葉～後半）

A区の東南部約1/3は河道046NRが機能している。ここに南西から北東に伸びる溝190（086）SDが掘削され、この溝の埋没とともにA区西半部で竪穴建物の築造が開始される。築造されたのは037・144・042・036SIの順で、このほか032SIも3-1期に属するとみられる。このうち出土遺物から時期が確定しているのは036SIで東山50～岩崎17号窯式期併行。

B区には竪穴建物ではなく、036SIに軸線が近い1014・1015SBがこの時期の掘立柱建物と推定される。

本遺跡の東約250mの丘陵南端部に所在する須長10号墳（直径約14mの円墳）が平成22粘土の発掘調査によって岩崎17号窯式期併行（7世紀後半）であることがわかつており、この古墳

に併行する時期で最も近いこの石岸遺跡が、須長10号墳の被葬者が居住していた集落である可能性がきわめて高い（愛知県埋蔵文化財センター2014）。

須長古墳群は10基からなる群集墳とされているが、石岸遺跡の東の丘陵上に所在するのは9・10号墳のみで、1～4号墳は北の丘陵部、5・6号墳は北東側の尾根筋、7・8号墳は本遺跡の北西の独立丘陵上と立地がばらつくことから、本来はひと離まりの古墳群ではなかった可能性が高い。また、発掘調査で時期が確定したのは10号墳のみであることから、現況では10号墳に限って石岸遺跡3-1期に関連する古墳としておく。

3-2期（7世紀末～8世紀前半）

A区では河道046NRと西の微高地の境に、新たに溝003SDが掘削される。この溝の調査区北東端からは当該期の弓や火鑽臼などの木製品が出土している。003SDはA区の中ほどで分岐し、微高地の縁に沿って北西側に伸びる溝001SD-B（110SD）・101SDからは東山50号窯式期を含みつつ岩崎17号窯式期併行、003SDからは高藏寺2号窯式期併行の須恵器が比較的纏まって出土している。001SD-B・101SDの埋没後に093SD・095SIが築かれる。

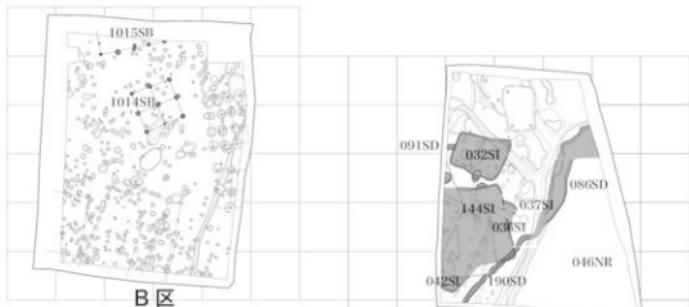
表5-1 3期の遺構変遷表

		3-1期 (H-50～I-17)	3-2期 (I-17～C-2)	3-3期 (O-25～O-10)	3-4期 (K-14～H-72)
A区	河道	046NR 086SD 190SD 091SD			004SD 0025D (001SD-A)
	溝		003SD 161SD 110SD (001SD-B) 093SD		
	竪穴建物	037SI 144SI 042SI (032SI)	035SI (038SI)	033SI 034SI 095SI (038SI)	031SI 100SB
	掘立柱建物				
B区	土坑	145・150・161・163・164SK	098SK		
	溝		500SD		
	竪穴建物		(10145B) (10158B)	(10165B) (10175B)	6505B 10135B (0515B)
	廻司		(10185A)		

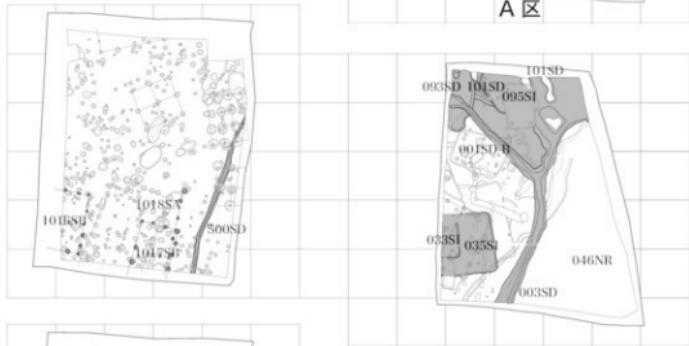
須長10号墳

※ 太ゴテックは時期的明確な遺物が出ている遺構。かっこ内は所属時期の決め子に付ける遺構

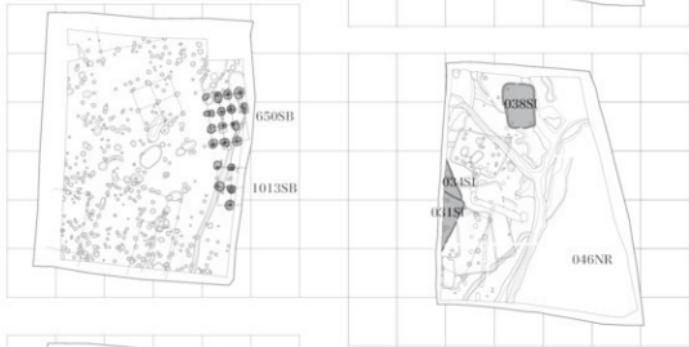
3-1 期



3-2 期



3-3 期



3-4 期

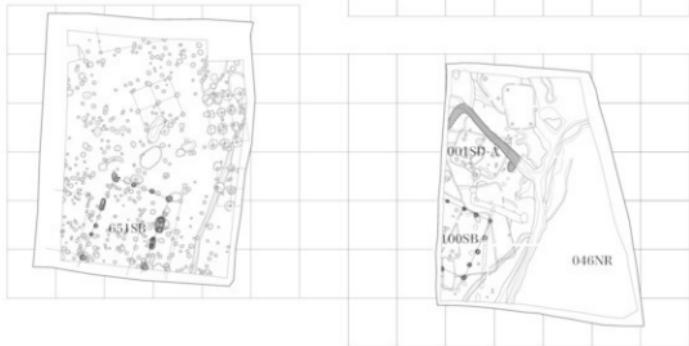


図 5-1 石岸遺跡 3 期の遺構変遷 (1:500)



図5-2 石岸遺跡3-3期と周辺の地形（新城市都市計画図 1:2,500より作成）

また、003SD の西側では 035SI、次いで 033SI が築かれる。

B 区では、A 区の 003SD から西に分岐した 001SD-B (110SD) の延長とみられる 500SD が調査区の東端を南北に走る。この溝に平行して建てられた 1016・1017SB と 1018SA がこの 3-2 期の掘立柱建物および柵列と推定している。

3-3 期（8世紀中葉～末）

大型の総柱建物 650・1013SB が B 区に築かれる時期。650SB の柱抜き取り穴から出土した完形の短頭壺が城ヶ谷和広氏の同定により猿投窯産鳴海 32 号窯式期に属することから、8 世紀後半にこの建物が廃絶したことがわかる。南の 1013SB は建物の主軸が 650SB よりも真北に近い方位をとるが、西側の柱筋が崩うことを考慮すれば、同時併存と考えておくのが自然であろう。

北で 10° 前後西に振れる 650SB の軸線は、この石岸遺跡周辺の水田地割などにおいて認められる（図 5-2）。また、雁峰山から伸びる尾根筋の縁を走る現道の、本遺跡に最も接近した場所での方位もこれに近い。巨視的にみて、この本遺跡周辺で古代からの交通路が存在していたとすると、この雁峰山の山裾の道が最も可能性が高く、現在でも設楽郡田口から長野県飯田市に抜ける主要幹線道路のひとつとなっている。現在の道は尾根を深く削り込んでいることから、丘陵間の狭い谷筋が本来の道であった可能性が高い。

B 区で 650・1013SB 以外の当該期の掘立柱建物は不明だが、第 1 章で述べたように調査時に西側の整地層を重機で掘削し過ぎたために滅失した掘立柱建物の大型柱穴が調査区西側の壁面に複数認められることから、650・1013SB よりも西側にも数棟同規模の掘立柱建物が本来は存在していた可能性が高い。

この整地層は B 区壁面の土層断面と出土遺物をみる限り、7 世紀中葉から 10 世紀にいたるまで、幾度にも渡って造成されたと考えられる。この石岸遺跡が載る微高地は、遺跡の西側を南北に伸びる独立丘陵の東斜面にある。この独立丘陵の地勢を子細にみると、本遺跡の北西側のみが不

自然にえぐれていることがわかる。おそらくは、この部分の土砂を削り取って B 区から A 区西半分に渡って整地をほどこしたのであろう。また、丘陵を削ることによってその部分も平坦面を確保することができ、およそ 80m 四方の平坦面を作りだしている。このような大土木工事を最初に計画・差配した指導者こそが須長 10 号墳の被葬者であった可能性が高い。

この B 区で確認できた掘立柱建物のうち、滅失したものを除けば 650・1013SB のみが柱掘り方の一辺が 1m を超える方形である。しかも総柱であることから、機能は倉庫と考えて差し支えなく、なんらかの公的な性格を帯びていた可能性が高い。本遺跡の約 1.3km 南西に位置する神田遺跡（新城市教育委員会 2009）や約 1km 南西の大宮・塙田遺跡（森田 2001）では奈良時代の瓦が採取されていることから、この石岸遺跡 3-3 期の性格もまた、周辺の遺跡との関わりでみていく必要性があろう。

3-4 期（9世紀前半～10世紀後半）

A 区では 3-2 期の溝 001SD-B が再掘削され、コの字状に南に開く溝 001SD-A となる。その南には 4×3 間以上の掘立柱建物 100SB が築かれる。

B 区の掘立柱建物 651SB もこれと主軸を同じくすることから、当該期と考えられる。側柱には 2 つの柱穴を 1 つの掘り方で掘削するという布堀建物に近い建築方法がとられている。

A・B両調査区とともに 11 世紀以降の遺物がほとんど認められないため、10 世紀後半を境に本遺跡は廃絶したと思われる。

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 2014『須長 10 号墳』
新城市教育委員会 2009『八剣遺跡・神田遺跡発

掘調査報告書』

森田勝三 2001『新城市大宮・塙田遺跡出土の古瓦』
『伊勢湾考古』15



A区3面完了 西から



A区3面 001・003SD 完掘状況 南から



A区 3面 001SD-B 全景 南東から



A区 3面 003SD・046NR 南から



A区3面037・144SI全景 西から



A区3面046NR 木製品出土状況



A区3面101SD 土器出土状況 西から



A区3面101SD 土器出土状況 南から



A区3面101SD 土器出土状況 北から



A区1・2面遺構検出状況 南西側 東から



A区1・2面遺構検出状況 南西側 南から



A区1・2面遺構検出状況 南西側 北から



A区1・2面遺構検出状況 北東から



A区1・2面完了 西から



A区1・2面完了 東から



A区1・2面完了(南半) 東から



A区1・2面 001SD・032・038SI 全景 西から



A区2面003SD
木製品出土状況 西から



A区2面003SD
木製品出土状況 南西から



A区2面003SD
木製品出土状況 北から1



A区2面003SD
木製品出土状況 北から2



A区2面003SD
弓出土状況 南から



A区2面003SD
火鏃臼出土状況



A区2面031SI 全景 北東から



A区2面032SI 全景 東から



A区2面033SI 全景 西から

A区

2面



A区2面034SI全景 西から



A区2面035SI全景 北から



A区2面036SI全景 西から



A区2面036SI全景 北から



A区2面038SI全景 北から



A区2面042SI全景 北西から



A区2面086SD石器出土状況



A区2面095SI全景 北東から



A区2面093SD木製品出土状況



A区 1面 100SB 全景 北西から



A区 1面 100SB 全景人入り 北西から



B区3面全景 南東から



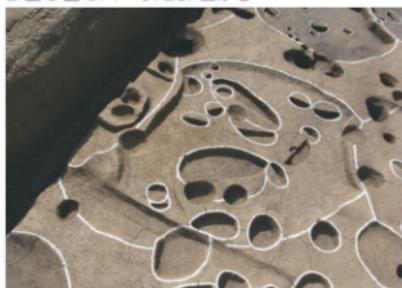
B区3面全景 北から



B区3面671・672SI 西から



B区3面672SI 東から



B区3面677・678SI 北東から



B区3面699SK・670・675・676SI 西から



B区3面736SK 石器出土状況



B区1・2面全景 西から



B区1・2面全景 北から



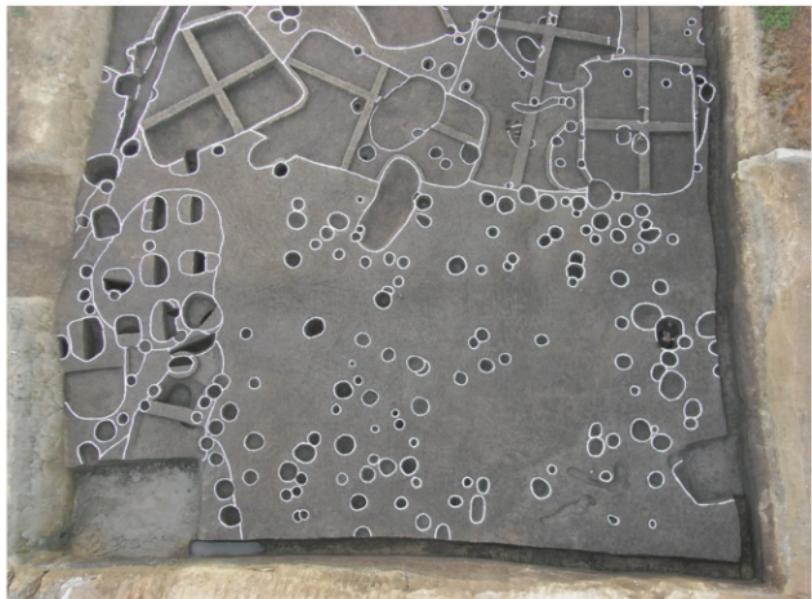
B区1・2面(南半)全景 西から

B区

3面



B区1・2面(南半)全景 北から



B区1・2面(北半)全景 北から

B 区

2 面



B 区 2面 502・511・512・513・514SI 北西から



B 区西壁セクション 東から



B 区西壁セクション 北から



B 区南壁セクション 北から 1



B 区南壁セクション 北から 2



B 区 2面 503・504・505・506・507・600SI 北から 1



B 区 2面 503・504・505・506・507・600SI 北から 2



B 区 2面 508・509・510SI 北から 1

B区

1面



B区2面 508・509・510SB 北から2



B区1面 650・1013SB 北から



B区1面 650・1013SB 人入り 北から



B区1面 650・1013SB 西から



B区1面 650SB 西から



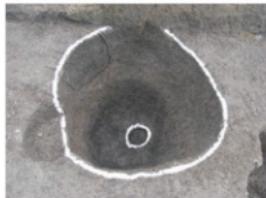
B区1面 650SB 北から1



B区1面 650SB 北から2



B区1面 433SK (650SB) セクション 南から



B 区 1 面 433SK (650SB)
完掘状況 西から



B 区 1 面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 西から



B 区 1 面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 南から



B 区 1 面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 北から 1



B 区 1 面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 北から 2



B 区 1 面 459SK (1013SB)
完掘状況 西から



B 区 1 面 461SK (650SB)
完掘状況 西から



B 区 1 面 567SK (650SB)
完掘状況 西から



B 区 1 面 594SK (650SB)
完掘状況 西から



B 区 1 面 599-624SK (650SB)
完掘状況 南から



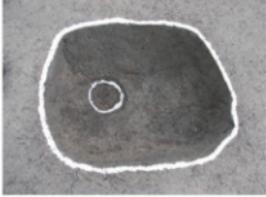
B 区 1 面 609SK (650SB)
セクション 西から



B 区 1 面 609SK (650SB)
完掘状況 西から



B 区 1 面 610-634SK (650SB)
セクション 西から

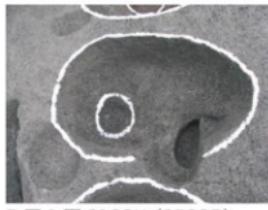


B 区 1 面 610SK (650SB)
完掘状況 西から



B 区 1 面 618SK (650SB)
セクション 西から

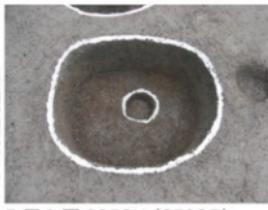
B区
1面



B区 1面 618SK (650SB)
完掘状況 西から



B区 1面 624SK (650SB)
セクション 東から



B区 1面 625SK (650SB)
完掘状況 西から



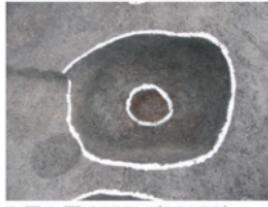
B区 1面 625SK (650SB)
セクション 西から



B区 1面 627SK (650SB)
セクション 南から



B区 1面 627SK (650SB)
石器出土状況 東から



B区 1面 627SK (650SB)
完掘状況 西から



B区 1面 628SK (650SB)
セクション 北から



B区 1面 633SK (650SB)
セクション 東から



B区 1面 637SK (650SB)
セクション 西から



B区 1面 637SK (650SB)
完掘状況 西から



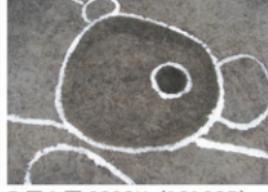
B区 1面 638SK (650SB)
完掘状況 西から



B区 1面 638SK (650SB)
セクション 西から



B区 1面 639SK (1013SB)
セクション 西から



B区 1面 639SK (1013SB)
完掘状況 西から



B区1面 640SK (1013SB)
セクション 西から



B区1面 640SK (1013SB)
完掘状況 西から



B区1面 641SK (1013SB)
セクション 西から



B区1面 641SK (1013SB)
完掘状況 西から



B区1面 651SB 西から



B区1面 690SK (1013SB)
セクション 南から



B区1面 644・645SK(651SB)
セクション 東から



B区1面 646SK (651SB)
セクション 東から



B区1面 651SB 北から



B区1面 432SK
土器出土状況 西から

遺物写真図版1



遺物写真図版2



74



75 76 77



A row of nine small, brownish-red fragments of ancient pottery or stone, labeled 143 through 158. The fragments vary in shape and texture, some appearing more like shards while others are more rounded.



The image shows five fossilized shark teeth arranged horizontally. From left to right: tooth 159 is a small, narrow, conical tooth; tooth 160 is a larger, more triangular tooth with a distinct serrated edge; tooth 161 is a small, rounded, and slightly irregular tooth; tooth 162 is a large, broad, and deeply serrated tooth; tooth 163 is a very large, massive, and heavily serrated tooth. The teeth are set against a plain white background.



168



169







350



351



352



353



359



361



364



374



391-1



382



389



391-2



392



394



395



396



397



403-1



403-2



407



409



410



414



415



418



420



423



424



425



426





468



470



475



477



480



484



486



487



488



489



492



495



499



500



501

遺物写真図版9





530



536



539-1



537



578



539-2



1表



1裏



16



17



18









001



002



002 細部 1



002 細部 2



024

018

008

006



012



013



014 細部

014





020



025-1



025-2



023



025 細部



001



002

ふりがな	いしぎしいせき						
書名	石岸遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第195集						
編著者名	随上 昇・鬼頭 剛・藤山誠一・川添和曉・佐々木由香・パンダリスダルジャン・小林克也・井上 嶽						
編集機関	公益財團法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 TEL 0567(67)4161						
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 31 日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりした 石岸	あいちけんしんしろし 愛知県新城市 すながあいしきし 須長字石岸	23221	760285	34 度 55 分 39 秒	137 度 31 分 34 秒	2008.5.12 ~ 2008.9.20	800	第二東海自動車道横浜名古屋線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石岸遺跡	集落跡	縄文時代中期 ~後期	竪穴建物、土坑	縄文土器、石器	
		弥生時代中期	竪穴建物、溝、土坑	弥生土器	
		飛鳥～ 平安時代	掘立柱建物、竪穴建物、 溝、土坑、自然流路	須恵器、木製品、 金属製品	柱掘り方の一辺が 1m を超える大型の縦柱建 物が 2 棟。官衙施設の 可能性あり

文書番号	発掘届出：埋文（19 埋セ第 123 号） 発掘届出：県教委（20 教生第 206 号） 完了報告（20 埋セ第 123 号） 文化財認定（21 教生第 315 号）
------	--

要約	豊川中流域の右岸に位置する 7 世紀後半～11 世紀の集落。A 区は自然流路・溝・竪穴建物・掘立柱建物からなり、B 区は分厚い整地層の上に建てられた掘立柱建物のみ。なかでも 8 世紀後半の縦柱建物 2 棟は、柱掘り方の一辺が 1m を超える巨大なもので、一般集落よりも官衙的な機能が想定される。
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第195集

石岸遺跡

2015年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財團
愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 サンメッセ株式会社